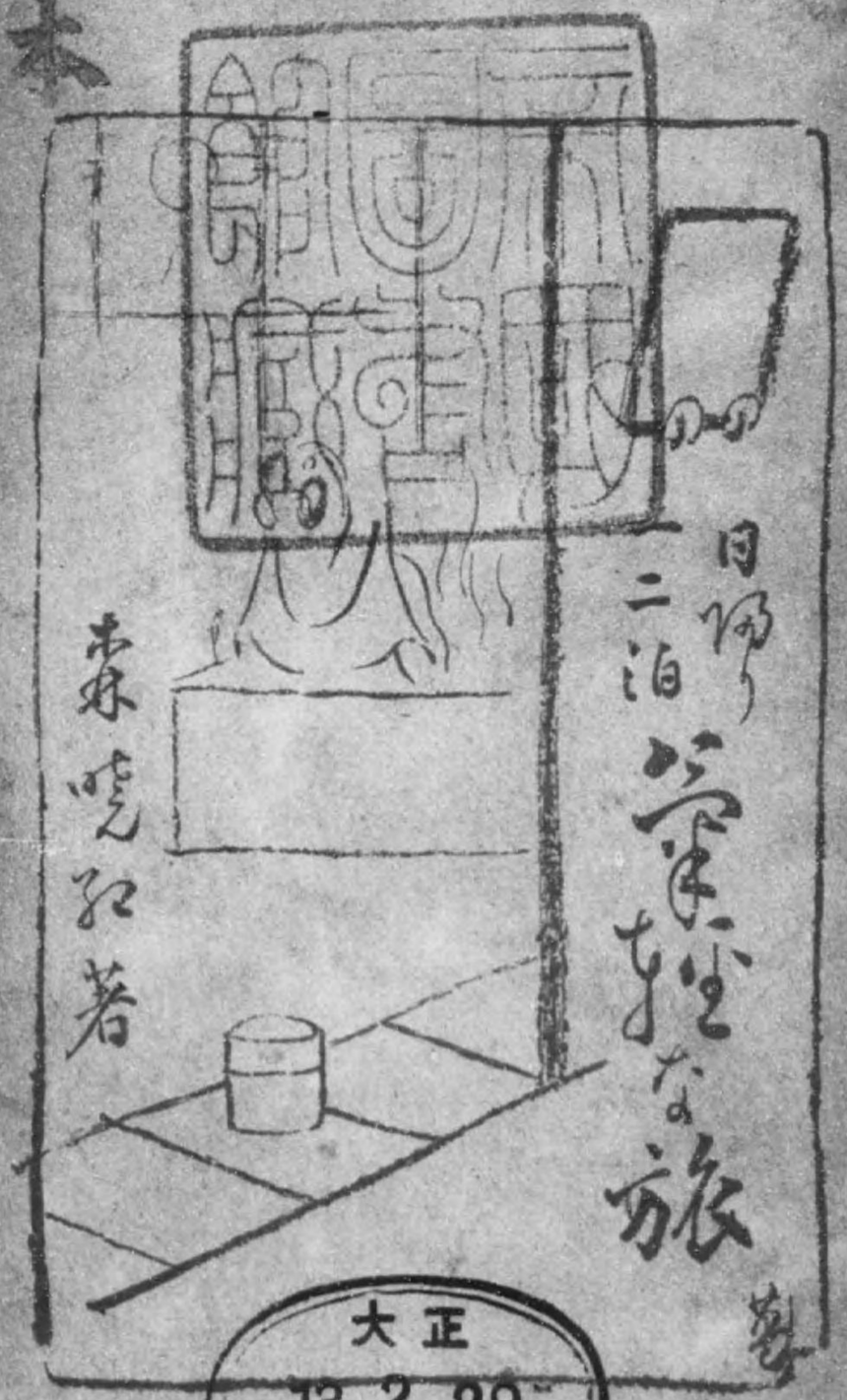
514
201

部

納本

574-201



二泊三日の家族的な旅

森曉紅著

大正
13. 2. 29
内交

序に代へて

——きのふの東京、けふの東京——

前古未曾有の大震火災はおこつた。

辛うじて此の書は災害はまぬがれたが、此の書中にものした「東京名所」や、會話の中に出る、「東京」の通も洒落も、一いきに失なつちまつた。

計らずも玆に此の書の中の幾篇かは、大きなかたみとなつた。

きのふの東京を想ひ、けふの東京を觀て、其の想ふ所を、序に代へて書く事とした。

ズシンーグラ〳〵と來た天魔の活動は、僅か二三分にして、さしも盛へた東京をめちやく〳〵にして了つた。

けふは三越あすは帝劇へ、と贅澤をそゝり立てる廣告が、常の事に想はれるほど、人々は天井知らずに侈りきつてゐた、斯樣なるのも所謂天の配劑かも知れない。

震災は忽ち火を起した、三越を燒き帝劇を燒き、侈りの的から片附けていつた。

だが然し、さらに八方から起つた火が、東京目抜きの繁昌地を全部燒盡し、十數萬の人を燒殺したことは、あまりの酷さと言はざるを得ない。

まつたくきびしい天命だつた。

時に賢者はこれを「天災か天幸か」とさへ言つてゐる、其の云ふ所をよく考へて、これを天幸と頷く事ができたとしたら、災ひが福にかへつたわけだ。

きのふまでの東京は、目覺しい立派さではあつたけれど、謂はゞ其れは觀たばかりの立派であつたかも知れない、何故ならば、あんなに立派ではあつたけれど、鳥渡した例が、人は住宅難に苦るしみ、交通難に苦るしみきつてゐたものだ。

人はみてくれの立派さばかりを爭つて、眞實味といふものがなかつた、而して人はわれがちにばかりなつて親切味といふものがなかつた。

其れで自分々々が侈ることばかりを考へてゐた。たとへば、道路を掘返してゐる工夫の仕事振を見ても、役目以外に親切味を見る事ができなかつた、其の辭、左樣した工夫等の手に金指輪の光るのをよく見かけたものだ。

文明とか、文化とか言つて、ケバ〳〵しくざわめき、意の無い人眞似に、家の建築でも人の風俗でも、ほんたうに究めた、眞實から出たものがなかつたのだ。

一氣に振下した大鐵槌の下、其の總てはケシ飛んで了つた。

みごとに東京の前世は去つた。

こゝに第二の東京は生れた、上野の山や九段の上から其の生れた態を眺めると、見得も外聞もない、きのふの物置小屋よりもひどいものが、取敢ず造られて、なにがしの商店、くれがしの住居と建込んで、露をしのげば足るといふ中に、人々の働くのが想はれた。

やがて來る大都市計畫に依つて此れが改築される時は、再た新しい虛榮や新しい苦るしみに、人の爭ひが起るかも知れないが、今觀るトタン家根の蔭には、家根を得た喜びといふ樣な昔て人々におほえのないものを感じてゐるに相違ない。

然し。

私は上野の山の見晴しに立つて、バラックに變つた東京を眺めた時、ありしきのふの東京を、やはり想はないではゐられなかつた、案外そこに住む人々の元氣はみるが、きのふに變つた其のみすぼらしさは、言ひ知れぬ感じを起させた。

『氣輕な旅』といふ此の書は、例に依つて私が手ごしらへの氣輕な、のんきな人間を扱つて、駄洒落を言はせたり巫山戯たりさせて、お馴染の讀者が、机上の旅のお慰みともし、時に御案内役ともならうとするのだが、その篇中の東京名所の散策は、あはれ此の書に見るの外はなくなつて了つた。

就て序に代へて斯く述べ、さらに、燒ちまつた東京の一文を卷末に添へ、以て過去の東京を弔ひ、而してやがて燒ふとるべき新東京の繁榮を祈る事とした。

曉紅記

目次

序代へてきのふの東京、けふの東京……卷頭
旅行情景　歡樂境東山……一
現代奥の細道　飯坂の湯宿……二五
山水絶勝　鹽原と那須……六五
旅のたより(上)　道了樣から……七九
旅のたより(下)　赤倉溫泉から……八五

隠れた避暑地 久里濱……八九
現代膝栗毛 日本橋から川崎迄……九一
旅は道連れ 戸塚の松並木……一一〇
横濱名所 弘明寺——井土ヶ谷……一三一
珍譚鰯次喜多 善光寺の宿……一七一
東京名所十二ヶ月 一日の行樂……二一一
一月 福詣（上野の大黒天）
二月 初午（王子稲荷）
三月 梅見（百花園）
四月 堀端の櫻（半藏門前）
五月 藤見（龜戸）
六月 新綠（箱根）
七月 銷夏問答（見沼の螢）
八月 瀧浴（目黒不動）
九月 蟲の音（道灌山）
十月 紅葉（海晏寺）
十一月 菊見（淺草公園）
十二月 年忘れ（動坂）
一日行脚 江戸ッ子の觀た東京……四二一
焦土めぐり 燒ちまつた東京……四五四

——（畢）——

日歸り
一二泊

氣輕な旅

旅行歡樂境東山

森曉紅著

一

午後九時十分上野驛發上奥羽線廻り青森行といふのへ乘つて、夏の短かい夜を汽車に明し、會津の東山溫泉へ往かうといふ、連れは古い友達のKといふ活動の脚本家と、其の實弟の商人、以前は一寸俳句などをやつた、其の俳號の名頭でよぶとSといふ男と、私の三人旅だ。

年齢の事はあんまり言ひたくないが、此の行の向ふ所が卽ち其の東北の三歡樂境の一である東山溫泉といふのだから、其の情調の味ひ方に、年齢に依る所があるので、其の發端として玆にぶちまける必要がチョイとある。

私とKとは既に四十を越えてゐる、Sだけが私等の其の時分を顧へらせる三十代、數へては五つ六つ程の隔たりだが、四十の聲が振分る心持の差は！　カッキリと人間が別に見える程――夫れは決して誰でもがとは言はないが――私には左樣深く感じられる。

夫れはその、宜しく後の條を見て知りねかしである。

さて、汽車は上野を出た、長い見通しの二等室に、詰れば半分ほどにもならない乘合の數は、旅行季節の込むのが當然と期してゐたのに有難い裏切といふものだつた。

『案外空いてゐるね、これなら樂なものだ』

『世間は不景氣なのだね』

Kと私は這麼言つた。世間は不景氣と餘所事の樣にいふ其の言葉は、自分達は上景氣といふ樣に裏書かれもする。

私は此の記を現金懸値無し正直に描かうといふのだから、氣取ッけなしに、遠慮をせずに、思つたこと、行つたこと、感じたことをありのまゝに描いて了ふつもりだ。

そこでその、世間が不景氣であるならば、人間の所謂常識といふものは、共に不景氣な顏をして、愚痴をこぼさなければならぬのだが、實際私等は、Kが其の不景氣を餘所事にいふくらゐ、お互ひに其の不景氣を身に知らないのだ。

然し、尤も、上景氣とは言へないかも知れないが……。

Tといふ大きな活動館の專任の脚本家であるKは、年中不斷の興行に、期間の短かい替り目に追はれて、其の腦力と勞力を吝まず、新脚本に筆を走らせてゐる、其の忙がしさに得る所は、世間からみる決して大なるものではないかも知れないし、又、私が勤務や仕事に得る所など、言ふまでもない高の知れたものではあるのだが、然し、まつたくお互ひに常によく働く、と憚らず言ひ得るだけ働いてゐるのだ。

而して其のよく働いて得た所のものは、お互ひが抱へてゐる小さな一家の事が先づ足り、其餘が斯樣した時偶の氣散じ旅ともなるのだ。

其の中でSは側違ひの商人、勿論小商人ではあるのだが、東京で二三の指に屈せられる繁昌な土地へ店を開けたのと、其の一生懸命な氣込みと勉强振は、手堅く成績をあげてゐる。

稼げば稼ぐほど、働けば働くほど、限りが猶更知れなくなるものだ、だから又夫れだけに、人間これでいゝと納まれる滿足な時はないものだが、然し、お互ひの其樣した努力は不景氣の愚痴をこぼさなくつても、先づ濟むといふものなんだ。

イヤこれは、些お話がお堅くなつて恐入る――といふやつだが、何さ、斯樣して旅に出た限り、仕事や、勤務や、商賣や、お互ひの其の平常から放れようといふのだから、此の記決してお堅いことばかりは言つてゐない。

殊に私やKは、さらに過去を打明けた正直な所、遊蕩に重ねた積惡があるんであるから、現今其の漸くの眞面目ぐらゐでは、なか〳〵つぐなはれない程なのだ……兎まれ堅いの、働くのと敢ていふ程の現在から、息ぬきに出た道中氣分に、自然過去のさま〴〵が手繰られて來もする所を、讀む人宜しくお慰みとなされべしだ。

汽車は其通り空いてはゐるし、始めつから寢ようとする人もあるが、宵の内は大方それぞれに世間話や旅の想出に、連れ同志寄り〳〵に掛けた兩側は、先づ暫時は賑はしいが、時なら二三時間、小山、宇都の宮と過ぎて、驛の名も、呼ぶ聲も、

「寶積寺々々々」

と眠さうな、そこらを通る時分はモウ、乘合何れも、失禮ながら、百で買つた馬か、夕河岸の鮪か、地震をくつた五百羅漢か、といふ樣に、いろんな型で寢ちまつてゐる。

いつそ込んでゐると、同じ眠むるのでも縱の儘で眠むつてゐるから、口のあけッ放しぐらゐなもので、型はシャッチコ張つてゐるからまだいゝが、これだけ空いてゐる仕合はせは、夜るの人間は隨分みつともないものだといふことを想はせる。

中に流石に女客はしほらしく、仰向けに寢た顏へハンカチなどをかけてゐるが、どうもその寢顏へかけた白い切の工合は、湯灌前の佛さま、そんなろくでもない樣が想はれもする。

「夜半の汽車なんていふものは、人間をみつともなくするものだね」

「ウム、まつたく淺猿しい氣がするね」

「お互ひは眠らない事にしやうよ」

斯樣言ひ合ふ聲が既に眠い、見渡す討死の屍の壘々たる中に、生きて殘つた三人といふ體だが、生憎窓に月はなく、唯闇を走る轟々といふ音が、其の眠たく朦朧となつた頭腦へ響くばかりで、お喋舌も漸次に途切れ〳〵、遂に言ひ甲斐なき味方の奴原、三人が二人となり、二人が一人となり、一人もいつか打倒れる。

此の所車内全滅、記事の描き様がなし、唯汽車が走るとして置く。

澁い眼を擦りあけると、KもSも同じ様な顔つきで起きてゐた、うつゝながら二時間足らずは眠つたらうか、窓の外は、闇が薄墨にぼやけ、曉の大氣が野遠見を浮かせ、夫れが漸次にほの白く、やがてハッキリと明けてゆく、時計を見ると四時に近い。

『もうそろ〳〵郡山だらうよ』

『左様だね、何しても夜の早く明けたのが有難い』

『特別に明けてくれたのだつてね』

『何はともあれ、お互ひに夜の明ける所にお目にかゝるのはめつたにない事だよ』

『窓をあけてしみ〴〵と眺めて置くかね』

『其の事さ、這麼時に充分新鮮な空氣を吸つて置くんだね』

『違ひない』

這麼事を言ひ合つてゐるうちに、澁い眼がハッキリとして來る、窓の硝子戸をガタンと下すと、しんめりと袖もしとる様な露を帶んだ朝の風が吹き込んで、そちこちの屍が起かへり、

『オヤモウ夜が明けたのか』

『一體こゝは何處だらう』

などと夫れ〴〵に言つてゐる。

やがて汽車は郡山へ着く。

二

東山溫泉へは、郡山驛で磐越線へ乘替へて若松驛で降りる、そこまでまだ約二時間の丁場、上野を宵の九時に出て郡山まで、恰度夜明し、夫れからの二時間は、ヤレ〳〵と思はざるを得ないが、明けてゆく車窓の朝風に倦んだ氣を拂つて、郡山驛のプラットホームで顔を洗ふ時分、澄んだ大氣へほつかり朝日がさすといふ寸法は、すつかり心持を取返すといふものだ。

殊に此の日は素晴しい好い天氣で、日中の暑を想はせるだけ、朝の氣分が一層さわやかだつた。

平から來て新潟へ行く列車は、私等を乘替へさせて、やがて郡山を後にする。車窓の景色もズツト變る。

三人共此の線は初旅なので、あこがしま、上戸、關都などといふ、馴染の無い驛々の名がめづらしく、遠くも來にける感じがする。そこら邊りから右をのぞくと、頂から麓へ削り下した様な、

磐梯の巨岳が、ちぎれ雲一つない大空に聳えて仰がれる。

『ハ、アこれだね磐梯山は……』

『流石に凡でない山だね、僕等の少年時代だつたなア此の山の破裂したのは……』

『磐梯山の破裂と來ては其の當時賣れたものだつけね、先代の菊五郎が芝居で演つたり、緣日の覗きめがねにまであつたね』

『オイ〳〵年齢が知れるよ』

Kと私が這麼事を言つてゐると、Sはものに感じた樣な顏をして、

『其の當時を想ふと、忘られたる山といふものだね』

と言つた、忘られたる山！　私は面白く頷かれた、山にも流行廢りがある。現今は白馬、槍ケ嶽、常念、穂高、八ケ嶽、所謂日本アルプスの全盛期で磐梯などは全く忘られてゐる、左樣思つてみれば、氣の故か山も元氣な昔時を想出の愚痴に、乃公も若い時は威勢よく破裂もしたがとでもいふ樣に、謂はゞ其の老いをこぼしてゐるといふものだつた。

左りをのぞくと、田植殘りがこちこちに笠を並べた野面を越して、猪苗代湖が、浮繪に見える。私は獨り密かに其儘を句にして、

田植笠猪苗代湖の見えがくれ

などと吟じてみた。

活動作家のKは猪苗代から想起して嘗て自分が脚色した『白虎隊』の事蹟を、Sを捉まへて得意で述べ始めた――猪苗代湖畔の戦ひから逃れた十六少年が、抜穴から飯盛山へ出て、例の鶴城の災に涙を呑んで、健氣な最期を遂げた邊りを頻りと語る、Sは格別興もない樣な顏で、唯ウムウムと聽いてゐる。

Kとしては、机上に想像して描いた猪苗代湖を實際に見たのだから、想出る自作に深い懷かしみを持つてゐるのだが、聽かされてゐるSは、現在の商人といふ立場からは勿論、嘗ての俳人といふ頭から言つても、そんなに興を持ち得ない筈だ、Sは弟なるが故に聽いてゐるといふ態だつた、私は密かに其の態をみて、人間常識の窮窟さを思つたりした。

默つてゐても、磐梯山と猪苗代湖を振分けてゆく、若松までの此の一時間は飽きなかつた、いつか其の驛へ着いた。

家にゐてはまだなか〳〵起出す時分ではないが、陽はモウ宜い加減昇つてゐる、昨宵の九時から今までモシ家に寢てゐれば、唯スウスウと寢てゐるだけのものだが、其の間に會津の若松まで

とはイヤ隨分と來たものだと、改札口から驛前の日向へ出て、乘くたびれた體を伸しながら、寢不足のボーッとした頭腦で這麼ことを思つた。

Kが夫れを今更に活動に脚色しても當りを取るほどに知られた白虎隊の事蹟に依つて、土地を知らずも其の名の印象は深かつた。こゝ會津の若松は、當時約五萬足らずの人口を有し、此線目ぬきの都市として、其の特産の會津塗に於ても亦知られた所、流石昇降の旅客も朝から賑はつてゐた。

東山溫泉といふ暖かい湯が湧き、東北の三樂境の一として聞こえた景物をひかへてゐる事も、其の繁昌の幾分だから、卽ち私等は夫れに依つて遙々と汽車に通夜して、こゝに降りたわけだ。

若松驛から東山へ約一里。

『自動車にしようかね』

『無論さ』

其の賃金の廉い事を會遊子から聞いてゐるので、莫迦に景氣がいゝ——尤も前に能書く所を以てみれば、私等は不景氣を知らない人間なのだから……

警笛の聲は、東京の眞ン中を走る紳士のと變りはない、然も道路は、東京の夫れと違つて頗る

歌榮境東山

平坦で、タイヤの當りよく固まつてゐる。

昔時廿三萬石の城下、今其の繁昌の街を端れて田圃を分けた新道を、此方を向いて呼ぶ樣な山を望んで、警笛の鳴るほどに自動車の一里はわけはない。やがて路は山裾の崖の繁みを左りに仰ぎ、右に溪流を瞰下してせゝらぎの音を聽く所、鳥渡箱根の塔の澤といふ感じがする。

『お宿はどちらへ着けます』

と速力をゆるくして運轉手は振返る。

『ウム向瀧だよ』

と聞いて來た心得を、さも私等は馴染らしく答へれば、把手は鳥渡曲つて山裾添への路をさらに溪流に臨んでダラダラ路を下りて橋を渡る。溪流といふよりはモウ其所は湯宿の軒を兩岸に相對へた川で、岩疊の底

が透いてのぞかれる。其の橋を渡つた三層樓が向瀧だ。

三

若松からは自然登つてゐるが、着いてみた此の湯の町は、間の川底が淺く、對岸の背山が低いので、とりつきの塔之澤といふ感じは、入つて伊豆の修善寺と云つた感じに變つた。

總じて明るい氣分で、山の湯宿と云ふ樣なオットリとした所はない、向瀧の玄關を入ると、モウ直ぐ、女中でない物腰の仇ッぽいのが、廊下でチラホラと行交ふ、ハ、アこれだな、と三人密かに頷き合ふ、聞き及ぶ東山溫泉の特產、宿藝者！　元來私達は其の總てを心得ては來たのだが、その心得からの想像は、もう少し山深い感じのおちついて、而して其の色彩も懷かしみを持つてゐる樣な氣がしてゐたのだつた。が、鄙びた色はあるとしても、私達の期待は聊か裏切られた。

湯宿といふよりは田舍茶屋といふ氣分がする。

『明るいだけ淺い感じだね』

『悠りとした心持になれさうもない所だね』

『歡樂一點張の所らしいね』

『廊下を富士見町氣分のが歩いてゐたぢやないか』

『男連れ三人などで來ては勢ひ淸遊で濟まなくなる所だね』

座敷へ通つて脚を投げ出すと、這麼言葉が交された、まつたくあからさまに左樣いふ所なのだ。

通された其の座敷は、川に臨んではゐないが中庭を見下した二階で、高欄に凭つてのぞくと、緋鯉の刎る池の右添ひに彼方座敷へゆく通ひの廊下があつて、そこを例の代物が容姿を賣りながら往つたり來たりしてゐる。所謂そこが『見るまいとすれど目に着く緋縮緬』で、ツイ氣になるのが人情の然らしむる所だらう、殊に中でSは、

『兎に角晩酌には呼んでみることだね』

とそゝられ氣味で言へば、

『無論さ』

とKも一議なく贊成してゐる。が、玆に於て私はだ、納まつたり、聖人がつたりするわけではさら〳〵ないが、

『嫌だなァ』

と迷惑さうな顏をせざるを得ないのだつた。

東北の三樂歡境と言はれ、曰く、『出羽で庄内、最上で上の山、こゝは會津の東山』とある程其の情調に依つて知られてゐる所、こゝへ夫れを知つて遊びに來たくらゐで、私の其の迷惑さうな顔つきは、些我儘ではあるのだが、夫れを知つて來たとは云へ、左樣した氣分にテンデ興を持たなくなつてゐる私は、其の情調は餘所事に看過してゐたいのだつた。

そこで茲に、前の條に說明した私等の年齡を打明けた、其の故ある所に結びつくのだ、さて夫れを言はう。

よく俺は色氣なしに遊ぶのが面白いといふ人がある。私は何うも夫れが嘘の樣な氣がしてならない。色氣なしで遊ぶ所、却つて其のモテようとする色氣が伏在してゐるのではなからうかと想ふ。若い人は勿論、たとへゝ年齡の人でも、遊びの命は何うしても色氣にある樣だ。

あながち色氣と云つても、其のビリにこだはるとかこだはらぬとかいふ問題ではない、酒席を彩る艶、當りのやはらかい其のとりなし、所謂酌はタボの夫れだが、私には夫れがモウうるさく面倒臭くなつてゐるのだ、あまりにブッキラ棒の言草だが……言ふまでもない、夫れは決して以前からではない、四十といふ聲を聞いた。夫れ以來、夫れも未だ幾秋と過ぎたわけではない。いは〻嫌ひになりたてのホヤ〳〵だ。

人間四十越したといふ事は、社會的に働くには漸く是からといふ所かも知れないが、重ねた齡の上からは、早い子持なら若い藝妓程の娘もある筈だ。

ヘンな言をいふ樣だが、たとへ男としても變つてゆく面影は、正直に其の齡をうつたへて、莫迦にはされないが、モテない事になつて來る。

私は遲く妻帶したので、順じて遲い子持だが、今は三人の親である。汽車で走る時、自動車で飛ばす時、『子供等を伴れて來たら、どんなに喜ぶだらう』と、何かにつけて斯樣ばかり思へるのだつた。

そこへゆくと、Sは未だ若いし、Kは亦私と同年齡だが幸か不幸か子がないので、私程には——以前の樣に沒頭的では勿論無いのだが——遊び氣分が嫌ではないらしい、未だ〳〵當年の情調を遂はうとする華やかなほとぼりがあるのだ。

私は夫れが羨ましい樣な、又、左樣なれない私の心持が却つて得意の樣な、而して同じ人間で同じ仲のよい友達で、然かも同年齡でありながら、若い時代の未だ名殘りあるKと左樣した若さから絕對に離れた自分を、密かに想ひくらべて、深いものを感じたのだつた。

歡樂境の東山溫泉は、着くと直ぐ私に斯樣いふ感じを與へたのだつた。

四

其の溫度は、湯桶に手も觸れられぬ程あつい、清水をよんで之れに和し、湯加減は如何にも上燗た、滾々と湧き溢れる。廣やかな風呂に浸つて、乘疲れの體を伸び〳〵と浮かせながら、

『流石に湯は豐富だね』

『頗る透明だね』

『一體此の湯は何に效くんだらう……ねえ番頭さん』

と訊けば、

『さア何に效きますか？』

と番頭は樂つたい樣な顏をしていふ、湯の效能などを別に問題にしてゐない所、夫れが卽ち此の土地の氣分を證明してゐるといふものだ。

上るとやがて朝の膳が運ばれる、番の女中も普通の宿の夫れとは變つて、猶且歡樂境中の彩りとして、扱ひの總てが科れてゐた、藝妓の相場を訊いたり、此處に遊ぶ客振りなどを訊いたりしながら、朝飯を濟ませて、夫れからゴロリと午前中を一眠りすると、其のうと〳〵としてゐる耳へ陽氣な三味線の音が聞こえて來る。

中庭越しの向ふ二階の空座敷で、此方の二階から見通しに、客達をそゝる華美な浴衣の艶めいたのが、しなをつくつて爪彈きで淸元か何か謳つてゐるのだ、湯上りのうたゝ寢にうと〳〵と之れを耳にしてゐると、流石に私も、野暮ばかりも言つてゐられない樣な、其の情趣が夢にうつらふのだつた。

晝寢覺を高欄に顏を並べて、

『兎に角風情があるぢやァないか』

『今、彼の階下から一妓、三味線を抱へて上つて行つたうしろつきに、何とも言へない情景が描かれてゐたね』

『何しても晩には二三人招んでみることだね。』

とSとKとは言ひ交はしてゐた。

午過ぎ、浴衣に貸下駄といふ型の如きこしらへで、湯の街の散歩に出た、湯川を狹んで對岸の宿々の二階三階から、退屈さうな客の欠伸や、又三味線の音が、底の見透かせる流れの靜かなせゝらぎの音に響いて、湯の街の晝のつれづれ、往く三人の浴衣姿も、アマチヤア技師のカメラ

にい、構圖をなしてゐる。

向瀧、新瀧を先づ一流とし、不動瀧、福住などは二流に屬す所だらう。其の十數軒、二三流の宿には其れ〴〵内藝妓を置いて、卽ち流れに灯影の映ずる時分は、絃歌湧くといふわけなのだ。

要するに街は夫れだけ、晝靜かなうちにもどことなく陽氣だが、もの、十分も歩けば直きに盡きて、爪先登りに山路へ入る。

所謂歡樂境であるのだから、東山たる生命は其の街の氣分に於て盡き、遊客も亦夫れで滿足してゐると見え、街のところ〴〵に名所案内は掲示してありながら、人は夫れ程に夫れを言はない、自然私等も其の掲示を宜加減に見過ごしてしまつた、が然し、街を端れて溪流添ひに山路にかゝる其の風光が捨難いので、

『もつと行つて見よう』

『よからう』

とテクテク山路の日盛りを尻を端折つて進んでゆく。

陽に對して山が圍つてゐるので、所謂日溜りの暑さ、溪流の瀨音に耳は洗ふが、汗は額に襟頸にヂリ〴〵とにじんで來る、然し行く程に、山のたゞずまゐ、溪流を堰く岩の面白さに、却々に戻るが惜しく、暑さに物は言はぬが、湯の街の俗氣を拂つて知らず仙境といふ感じがして來る。

三人共默々として歩いてゆく。

と路は左りへ迂曲した、出た所、思はず、

『こりやァいゝ』

『ウム――いゝ景色だ』

『這麼な所があらうとは……東山に遊ぶ人があんまり言はなかつたぢやァないか』

『だからさ、東山の値打はこゝにないといふのさ』

這麼事を言ひ合つた、右手に添うて來た溪流が路を横斷つて左りへ斜めに、大瀧の落口に臨んでゐる。溪流に架けた木橋の欄干に寄れば、幾重にも瀨をなした岩疊を、磅けよと轟き落る瀧の飛沫が衣を濡らす、橋の名は天狗橋、其の橋際に寛に清水をよんでサイダーを冷し、目のショボショボした爺さんが茶店を出してゐる。

又、其の天狗橋から振仰げば、切削立つた樣な岩山が、恰かも傘を半開きにしたかの樣に、瀧に對して繪心に聳えてゐる。

曰く傘岩に雨降の瀧といふのがこれだ、と天狗橋の茶店の爺さんが敎へてくれた、瀧に面し

て腰掛に冷たいサイダーをぬいて、

『何うして之れを雨降の瀧といふのだい』

と訊けば、

『ハイ、風向きで瀧の飛沫がかゝりますので、オヤ雨か？　と思ふのでございます、夫れが名になりましたので』

『なる程、傘岩といふのは』

『恰度其樣いふ型をして居りますので』

『天狗橋といふのは……』

『さア夫れは何ういふわけでございますか……村會でつけたのでございますが、エヘヘ』

と爺さんは變に笑ひながら、困つた樣に言つた。

何しても絶勝である。東山へ遊ぶ人のために大きな聲で案内したい、湯の街から僅かに約十丁の所なのだ。

五

あやしげな縮緬の美が主になつて、風景の美はホンの添へ物の樣に扱はれてゐるので、歡樂崇でないまでが、猶且夫れだけの土地といふ氣で來たのだが、然し散歩に探り獲た絶勝は、來てはみるものだといふ感じを深くしたのだつた。

宿に戻つて、其の夕べ、SとKとの主張ばかりでなく、四圍の空氣が何うしても、晩酌には彼の色彩をほどこさなければならない樣になるのだつた。

晩酌の色彩、ヨリ進まない程度に於て、私もつき合氣を出し、所謂東山美をそこへ並べてみる事になつた。

やがて現はれたのは、小まん、君子、音丸、離れた座敷の三味線の音などをきいてゐると、鳥渡還俗したい樣な氣にもなつて來るが、さて斯樣招んで面と向つてみると、其の興趣に入り得ない、殊に前にいふ樣な私は……

小まんと君子とは、訛りにお國が表はれてゐるだけ却つて情趣もあり、藝も却々堪へがあるが音丸といふのは東京らしい調子の、夫れだけ薄つぺラで、藝も二番手の、二人に押され氣味で、神經は鈍いがイラ〳〵と座に落着かず、夫れで一生懸命に取廻してゐる所がいた〳〵しく感じられた。

招んだ限りは、

『何か聽かせたまへ』

といふ樣な言を言はざるを得ない。

『何にも出來ないンですわ、貴客方こそお聽かせなさいましよ』

と藝妓等も亦、招ばれた限りは這麼事を言はざるを得ない。

勿論私等は何一ッやれる人間ではない、と同時に實は藝妓に何かやられる事も有難くないのだが、當節の藝妓、殊にこゝらの藝妓に求めて平場で話一方は無理な事だ。で、何かやらせて聽いてゐる方が、却つて藝妓がテレないわけだし、私等も亦テレない樣につとめるやうな客としての面倒がないといふものだ。

近來東京へ遠い出雲から襲うて來た、彼の安來節が、此の東山にまで來てゐる、鴨綠江節などはいふまでもない、藝妓等は先づ用ひた、夫れから東山の四季の景色のドン〳〵節や、又會津の謠りとする例の白虎隊のドン〳〵節を、殊に得意としてやつた。

然し聽いてゐるのもかなり太儀なものである、私は漸々辛くなつて來た。で、私は中座して風呂へ行つた。

SとKとは、夫れでも流石に好んで招んでみるだけ、未だ〳〵遊びの常識を心得てゐる、藝妓等の土色を帶た藝に挾んで戯談を言つたりなどしてゐたが、然し夫れより以上の氣分情調にはとても入れないのだつた。

私が風呂から上つて來ると、程なく藝妓を歸して、三人は無事に枕を並べる事になつた。

『どうだい、あゝいふので耽弱ができるかい』

『些できにくいね、彼れで東山から電報爲替を呼ぶなどは無理だらう』

『まつたくだね』

と、夫れでもそれから彼れ等の噂さやしなさだめをするだけの興はあつた。

次ぎの朝早く宿を立つて、飯盛山の白虎隊の墓詣り、若松の町見物、それから汽車で、西那須まで、中一夜を鹽原に泊つて、悠りと三日の旅、のんきに樂しい其の中にも、亦夫れだけ年甲斐

の感じの多〳〵なつた事を想ふ。

現代奥の細道　飯坂の湯宿

一

芭蕉翁の奥の細道をみれば、彌生の末に江戸を立つて、松島邊りを歩いてゐたのは皐月の中旬頃だ、としてみると、そこまでゆくに約二ヶ月を費してゐる、そりやトボトボと、門葉の曾良と一人で、名所古蹟、道草をたべ〳〵だから、なるほどかゝつた風流をふッ飛ばしてゆく文明の世の有難さは、彼れの二ヶ月を二晩泊り、あとさき合せてたつた三日の旅ですむ。

『ねえ君、今度着くのが白河だよ「心もとなき日數重なるまゝに白川の關にかゝりて旅心定まりぬ……」と芭蕉翁の日記にある所だ、こゝまで來るのに日數を重ねたンだね、尤も道中のくさぐさ、那須の篠原に玉藻の前の古墳をたづねたり、殺生石へゆく道では「野を横に馬引き向けよ郭公」なんて、馬子に求められて句をやつたりしてゐるンだからね。』

『時は元祿二年と來た、大正とはチト違ふね、現代ならば芭蕉翁だつて、上野驛前の櫻亭でカレ

ーライスか何か食つて、曾良ちやん急行券を買つておくれよといふに違ひなしだよ』

『アハ、さもあらうテ、こゝらまで來て旅心定まりぬなんて云つてゐるが、現代ぢやアチョイと一句ひねつてゐるうちに來ちまふンだからね、却々旅心が身に沁て來ようもないといふものだ』

『旅心どころか、長い欠伸をしてゐるうちには來ちまふンだ、ハテ爭はれない……』

『何が爭はれないンだい』

『あくび千里と云つてね』

『えッ始めたよ、これからそろ〳〵奥の細道にかゝらうといふンだ、駄洒落は封じる事にしようよ』

『ウム駄洒落は封じる事だが、今の樣な名洒落はよからう、僕に洒落を封じるなどは、芭蕉翁に俳句を封じる樣なものだテ』

『いゝ氣なもンだ……アゝ道中が思ひやられる。』

いつもながらの二人連れ、一人は前名代地之介といふお馴染のヨタ者、此の頃根岸へ引越と共名も改めて呉竹初音之丞、なんかんと附たりな、さも艶々としに前髪立でもありさうに若返つても、さて腦天の薄すらを如何せんと、折角氣の着きかけた分別を、上野を出ると共に置き忘れ、

變つた了簡の色衽祃、連れなるは墨田和太郎と云つて、生れた所と埋まる所は別ッこながら、連れ立つて喋舌つてゐる時は、どつちがどつちだか分らない、紛らはしい代物、そこで作者は御有じのあわて者、アイヤ讀者諸君、よろしく判斷して讀みたまへ、笑ひたまへとなん。

『だがねえ和太さん、旅人はゆきくれ竹のむら雀、とまりては立ち〳〵なんてえからそこに情趣もありさ、まつた奥の細道といふ樣な風流の眞味ものこされたのだが、速い上にも焦れッたがつて、小さな驛なんざア振向きもせずに、モロに飛ばしてゆく急行なんてえケダモノは、便利ながら無風流なものだね』

『ケダモノはいゝアハ、、さりとて初ちやん降りてテクル程の風流義はなからう』

『ない事もないが、其れだけ暇があれば歐洲を一巡りして來ます、どうも一度行つて來ないと洒落の舞臺が狹くッて不可ないからね』

『ウブッ世界的の駄洒落と來たかい、イヤ恐しい事だ、然しまアまア惡い言は云はないから内地だけを惱ましてお置きよ』

『そこで奥州を利かして、其の空想を忍摺、精々ヨタを飛ばして巡らうぜ』

『オット奥州ぢやアヨタをあかはらといふぜ』

『違えねえ、さらばあかはらを飛ばすかね』

『何の事ァないわただるやの喧嘩といふものだァハ、、、、ュ』

『ウフムン衛生によくない皮肉だ』

例に依つて云ふ言が漸々解らなくなつて來る。

彼の能因の詠む所、むかし〳〵の其の頃は、都をば霞と共に立出でたればこそ、秋風ぞ吹く白河の關邊で殊に旅愁を沁々と感じたらうが、お晝過ぎの一時に上野を立つて、未だ日の暮れるには間のある頃、其の邊りをゴツトン〳〵と過ぎてゆく造作なさでは、却々旅愁なんといふ道中の味に入れ樣もない。

とは云ふものゝ、小さい驛を蹴飛ばす樣にして來た急行が、此所では鳥渡息を入れる奥州のとツつき、かなりに長いプラットホームを控へてゐる大驛、やがてガチンと着いて、

『白河々々』

といふ驛員の聲を聞くに及んでみると、其の、解らぬ冗言を云ひながらも、兩人例の半可だけに、古い白河の繪卷が自然頭腦の中で展げられて來る。

五分間停車の窓からお茶を買つて、

『だがね和太さん、能因の歌や芭蕉翁の日記にも賣込んだものだが、白河の關と來ると武者姿や僧形の杖と笠のゆくのが思はれるね』

『などと片附けた言をいふぜ、お互ひも此所を通る繪卷の末かね』

『左樣さ、戰人の家元の樣な八幡太郎だの右幕下賴朝だの、西行、能因、芭蕉翁と來て、それからズツト飛びの漫畫流行の現今と來てゐるンだから、僕等も相應な畫になるだらう』

『色氣の無い恰形に描かれるやつだ』

『尤も昔時だつて、白河と來ちやァあんまり色ッぽいのは通らなかつたよ、梅川忠兵衛、おかる勘平なんてえ所は此方の方へは出て來なかッたとさ』

『大きにね、精々色つぽい所で崩黃に石持の紋附といふ裝への頰邊を紅くした宮城野の妹信夫ぐらゐなもんだらう』

『然しね和太さん、僕等の繪卷なんざァ漫畫展覽會で特選になるやつだよ』

『名譽なこつてす。』

やがて汽車は白河驛を出る、開けたとは云へ、窓から覗く川に野山にさう〳〵は文明も踏込まず、それは流石に驛に近い田圃道には田舍娘の餘所行のバラソルなどが、毒々しい當世の色彩を

こぼしてゐるが、野山の春秋は幾昔同じに繰返して、芭蕉翁の見て行つたのも夫れだらう。

　茲で亦鳥渡彼の日記をかりるが――「とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る、左りに會津根高く右に岩城相馬三春の庄常陸下野の地をさかひて山連らなる」――云々とある。

　今汽車は鐵橋の上轟々と、文明の音を響かせてゆくが、覗く阿武隈の流れは、昔繪卷にも此儘だらう、驛を離れて、汽車と電柱と線路と鐵橋と廣告のペンキ塗を取拂つて了へば、芭蕉翁の日記がそつくりと活きて來る、呼べば答へもしよう懷かしい彼の山々。

『ねえ初ちやん、如何に世の中が開け切つたと云つてもだね、山だの川だのは矢鱈に片寄せたり埋たりはできないから尊いよ自然てえものは豪氣なものだテ』

『其れにつけても自然てえものをメチャ〳〵に搔き廻して、鳥渡通らないうちに道筋が變つたり無暗に堀ッかへしちやァ何か叩つ込んで、地盤をデコボコさせたり、女の子の頰邊の色なんぞを無理にボーッと染上げたり、鼻の低いのを地上げしたりするなんてえ、わしらが在所の東京といふ國と來ちやァ恐らく不自然なものになつて來たからね。』

『偶々旅に出て、自然の景色にお目にかゝると流石に暢然するといふのかい、時に初ちやん、自然を懷かしんで暢然としたのなら、折角の景色を駄洒落で搔き廻しなさんなよ』

『えッ亦駄洒落々々〳〵といふよ第一何も其麼に洒落を恐しがる事はなからう』

『イヤ恐しいよ、コレうや流感と違て駄洒落には注射が利きません……と醫者が云つたよ』

『止せよ此の男は、自分だつて惱ませない風かい』

『憚りながら、僕のなどは駄物ぢやァないからね、貴方のなら胃病患者などの持藥に用ひると消化によろしいと醫者が云つたよ。』

『イヤに醫者々々といふぜ、人間も醫者のいふ言などをきく樣になつて來るとそろ〳〵タガだぜ』

『タガやおむろの花盛りとは何うだい、先づチョイとが這麼もんで……』

『ウフ、其れが胃病にいゝといふ洒落かいヘエー消化とはどうだい、なんとコナレたものだらうアハヽアハヽ、』

『チョッだらしのねえ、洒落の粉がこぼれらアウフ、、、、』

　先づ今日は飯坂の湯に浸り、明日は松島から鹽釜詣りの仙臺泊り、あさつては眞直ぐに東京へ歸つて、夕方はモウ町内の錢湯で欠伸でもしようといふ行程、成程これなら三日ですむ、汽車も其の氣で上野から福島まで飛六法、大宮――小山――宇都宮――白河――郡山――福島と、大またぎにトン〳〵〳〵と、三等の武藏坊、陸奥の國へと、こいつ何處までも俄の旅。

『オイ〳〵初ちやん、今度汽車の歩きつきがのろくなれば福島驛だよ、そろ〳〵支度をしてもよかんべえぜ』

『有難えおいでなすッたかね、みちのくの忍ぶ文字摺誰れ故にと來た、ア、コラ〳〵』

『これさ都々逸と間違ひちやァ不可ねえ』

二

釣瓶落しの秋の陽の入り、福島驛へ着く。

『早苗とる手もとや昔しのぶ摺、』と芭蕉は奥で詠んだ、往古から其の風流たる信夫の里や忍ぶ摺に依つて知られてゐばかりでなく、東北屈指の都市として、縣廳をひかへ、國産生絲の取引は勿論、商業に、蠶業に、工業に、メキ〳〵と發展に及んだもので、驛前の廣場から鳥渡街の方を視た感じから何樣其の繁昌が想はれる

『ねえ和太さん、鳥渡街を歩いてみたい樣な氣もするが、縣廳の建物や銀行の支店の幾つもあるのを感心するでもなかんべえね』

『左樣ともさ、兎角縣廳に事なかれてえくらゐなものだ、歩くなら信夫の里へ行つて文字摺石で

飯坂の湯宿

も觀る事だが、此の日の暮れからトボ〳〵でもあるまい、とてもは急行奥の細道だ、福島へ降りたといふ事だけで此の邊は片附けて置かうよ』

『先づ其の事だね、夫れよりァ飯坂へ急いで、湯の町でもぞめく方が漫畫子の爲になるだらう』

『時に初ちやん、飯坂迄は約二里と聞いてゐるが、こいつもトボトボは御免蒙らうぜ』

『當前だよ、汽車を三等で來たのは、此所で自動車賃を生み出すやつだ、道中へ出たら任せて置きな、……オーイ自動車自動車』

と初ちやん心得きつて驛前の自動車を呼び、

『イヨウ暫くだね君、運轉手君、たしか此の前來た時も君だッたッけね。』

とさも馴染顔で言へば、運轉手君面喰つて帽子を脱

りながら

「へ、へい」

と變な顔をしたが、そこは地方の運轉手君でも稼業柄で如才はなく、

「しば、らくでございます。」

と考へながら切れ〴〵に斯樣言つてニヤ〳〵としてみせる。

「いゝかい、いつもの通り飯坂までだ、賴むぜ」

と、實は馴れない土地のボラレるのを恐れて、馴れきつた顔をしたもので、

「さァ〳〵和太さん乘つた乘つた」

と續いてヒラリと乘つたまではいゝが、根が利いた風の尻拔けで、自動車賃の相場も知らず行く先の宿の名も知らずと來てゐるのだから世話がない。

驛前から眞直ぐに見える街を横に、左りへ寂しい道をブーブッとゆく。

「オイ〳〵、初ちやん〳〵、大層心得た樣な事を言つたものだね」

と低聲で、和太さん襟つたさうに、

「いゝのかい」

と言へば初ちやんさも得意さうに、

「馴れてる土地の樣に言つて置かないと、兎角莫迦にされやすいからね、自慢ぢやァないが、こゝらが旅馴れといふものさ」

と顎を撫でる。

「君はこゝの自動車賃を知つてゐるのかい」

「ウンニヤ。」

「チョッ嫌だぜ、夫れぢやァ馴れてる顔をしたつてボラれても分りやァしなからう」

「大きに左樣だな」

「第一飯坂の宿の名を知つてゐるのかい」

「さァ。」

「何がさァだい、へッいつもの通り飯坂までが聞いて呆きれらァ。」

と和太さん大きな聲をすれば、初ちやんあわてゝ、

「シッ、シッ、折角馴染の顔をしてゐるのに、底を割りなさんな」

「何にも知らないでムダに心得顔をしたッて始まらないや……オイ運轉手君々々々々。」

と正面の硝子を上げて、
『君は此の人を知つてゐるのかい』
と訊けば、運轉手君案外正直に、
『知りませんです』
と來た。
『ウフ知らない筈だ、僕等は始めて來たんだよ』
と和太さん面白がつてスツカリぶちこはせば、初ちやん忌々しがりながら、
『ア、左樣々々、僕は東山溫泉と思違ひをしちやッたのさ』
と飛んだ苦るしい事をいふ。
『アハ、、、變な事を言ひなさんな、時に運轉手君、僕等は飯坂は初めての土地ぢやァあるンだが、實は兩人親の敵を尋ねて諸國を巡る者なんだからあんまり成金扱ひしちやァ困るぜ』
と和太さん斯樣言つて、初ちやんを顧へり、
『何うだい初ちやん言ふ事がオッだらう』
と云へば、初ちやん噴笑ながら、

『敵討とは大時代だ、巡りめぐつて飛烏山の花見の時でなければ出會はないてえ筋だらう』
『違えねえアハ、、、、』
何をいふのだか、時々自分達にも解らなくなるのだから、福島縣の運轉手君に通じ樣筈がない、されば唯正面を向いたまゝ、
『は、はい』
と空な返事をしてブーブッ。
『オイ〳〵運轉手君、飯坂の宿は何といふ樓がいゝのだい。』
と初ちやん、モウ何うせ剛染顏がブチ毀れて了つたので斯樣訊く。
『はい、先づ花水館か、角屋でございます』
『ウム左樣々々、言はれゝば思出すが花水館てえなァ聞いたことのある名だが、ねえ和太さん何方にしよう』
『左樣さね、聞いたことのある方は何れ誰れか知つてる奴の行つた所だらうから面白くないね、其の角屋といふ方にしちやァ何うだい』
『宜からう……ねえ運轉手君、其の角屋てえ樓は、僕等の樣な堂々たる紳士が行つてもいゝ樓な

んだらうね』

『ウブッ止しなよ初ちやん、いくら夜目だつて堂々たる紳士てえ柄ぢやアないぜ、まア僕は兎も角も……』

『えッ人を凹めて、僕は兎も角もたア何だい、いゝ氣な男だ……オイオイ運轉手君、明るい所へ出たらよく僕等の態度を見てお呉れ、何方が堂々たる紳士だか』

流石に運轉手君、莫迦々々しくなつたと見えて、

『ハヽヽ。』

と笑ひながらブーブッ、

『角屋なら貴客方ウフ、紳士方がいらしッても差支ございませんです』

『それ見ろよ初ちやん、運轉手君ウフ、紳士方と來たもンだ、憋アねえ』

『ウフ、夫れも尤もだ』

彌々とりとまりのつかない所を發揮してゆく程もなく、自動車の二里はわけはない、暗い村道をいつか町近い軒續きの、人の往來を把手が交してゆく、道は稍爪先上りの賑やかな氣分に喇叭のブーブッが稍忙しくなつて來る所、そこはモウ飯坂溫泉のとりつきだ。

『夫れでは宿は角屋に着けますか』

と運轉手は型の如く顧へつて訊く。

『左樣だよ、かどや向方でも待つてゐるだらうテネ』

と初ちやん亦解らない洒落をいふ――註に曰くさぞやときかせるつもりなり、ア、作者も骨が折れます！

ダラ〳〵と上りきつて出た所、所謂紅き灯の街といふのだらう、あか〳〵と浮いた感じで、往來も繁くどことなく艶めいて覗かれる。

『イヨーッ、來たな』

と初ちやん頓狂な聲を出して、

『こいつァ却々いゝ所だぜ』

と言へば、

『フームどれ〳〵』

と和太さん伸上り、硝子戸を忘れて窓から首を出さうとしておでこをゴッン、

『オウ痛えッ。』

『アハ、、、、和太さん嫌だぜ、紳士は些沈着いてありたいテネ』

『チョッ忌えましい。』

其の明るみへ出た所、十字街の右手は名代の十綱橋で、瞰下す幾丈摺上川の流れ、越して對岸が飯坂溫泉と繁昌を競つてゐる湯野の町で、懸崖に重ね上げた三層四層の湯宿の部屋々々の障子の灯影が怪かしい。

其れを十綱の橋際から斜めに望んで、其の儘眞直ぐにゆく、と其所に「若葉町」とある白ペンキの門柱が、街燈に景氣よく輝いて、軒並の樣子が又變り、安價に艶めいた氣分が漲つてゐる、自動車は其の門を潜つてゆく。

『オヤ〳〵オツな所へ入るンだね、ねえ和太さん、何だらう此所は、溫泉宿てえ家並ぢやアないね』

『ウーム見世格子に暖簾口と來たぜ……ハ、ア之れだな飯坂の遊廓てえなア』

『左樣々々湯の町の通り道に在るンだつてえ事を聞いたッけね……ねえオイ運轉手君こゝは遊廓だね』

『エヘ、、左樣でございます』

と運轉手君、音調をつけて喇叭を鳴らせば、簾暖口から塗くつた南瓜が卷煙を咬へた凄まじい顏を出し、鼠鳴きをしてゐる

『初ちやん苦が〳〵しいのが見送つてゐるよ』

『我々紳士の自動車が通る所ぢやアないテ』

『自動車で通る所ぢやないが、歩いてひやかす所だらうアハ、、、、、、』

『宿へ着いたら改めて來てみるかいウフ、、、、、』

三

道路はよく、自動車も東京の日本橋通り程には搖れず、福島驛から飯坂へ約三十分といふ丁場なのだが、ヨリ便利なのは福島驛のもう一ッ先きの伊達驛で降りる事、そこからならば道程は半分で、輕便鐵道が待つてゐるのだ、が然し急行列車は其の小驛を眼中に置かないので、卽ちそこで二人は福島驛から自動車を奮んだといふ次第——と烏渡此所に遊ぶ人の爲に案内として書添へる。

さて、宿屋の部屋々々へあか〳〵と灯の入つた宵の湯野の町を十綱橋の此方から斜めに見て、さ

らに氣分の變つた遊廓をぬけて出ると、夫れから稍落着いた感じの町並になつて、桝屋、花水館と、其の門々を覗いて通り越し、やがて其の先きの、門内深く砂利を敷込んだ角屋の玄關に自動車を横着ける。

ヒヨコリ〳〵と降りた客振り、あんまり揚つた風采ではないが、漸く閑暇な秋口の頭數にはなるとあつて、そんなに粗末には扱はず、

『お早いお着き樣でございます』

『お疲れ樣でございます。』

と番頭女中が、ズウ〳〵と音辨を濁らせて出迎へる。

『自動車賃を帳場からやつといておくれ』

『チツプもいゝ樣にね。』

と納まつていふ其の實は、宿で拂へば何れ規定の賃金、度外れにやる筈はあるまいと、鷹揚ぶつて括つたもので初ちやん和太さん、後も顧らずツーと通つちまふ。

いふ言は解らず、見恰好もよくないが、喋舌調子の意勢のいいのと、急行で來た東京の客といふので、運轉手君幾分氣前に預れさうな氣持もしたが、玄關へ昇ると共に捨白でツーと入つちまたので、丁寧に脱つた帽子の張合ぬけ、成程言葉多きは品尠しと云つた顏つき、

歸つてゆく氣の無い喇叭の音を、廊下できゝながら、案内の女中に聞こえよがしに、

『ねえ君、地方の自動車にしては存外乘れるね……そりや自家の自動車の樣なわけにはいかないがね』

と初ちやん片附けた聲を出せば、

『ウブツ飛ばすぜ〳〵』

と和太さん噴笑しながらいふ、女中も流石に客馴れてゐて、

『東京では大抵な方は自動車をお持なのでございませうね』

と音調は訛るが、如才なく煽りかける、左樣なると初ちやん擽つたくなつちまひ、

『ウム大抵は持つてゐるが、子供は毀すのが早いンでね、堪らないよ。』

と體を交し、

『自動車よりは三輪車の方がいゝつてアハ、、、、』

と言へば、和太さん亦其の上を搔き廻す樣に、

『夫れだつて隣家の子のを借りるんだらうウフ、、、、』

とメチャにする。

『面白い事ばッかりオホ、、、、、』

と、ガランと閑暇な樓中へ笑ひが響く。

此の宿は摺上川の上流に添うてゐて、懸崖を下へ〳〵と座敷が階をなしてゐるので、廊下を行つては階段を降り〳〵、やがて通されたのは、土地訛りでいふとズウ何番。

『どうぞ此室で……』

と天井の高いオットリとしたい、座敷、床には不折の山水がお茶代をきめさせる樣にか、つてゐる——案内の女中の引返すのを見送つて、

『ねえ初ッちやん、チョイとお値打のある座敷へ通したね』

『ウームン、やはりぞんざいな風をしてゐてもやんごとなき身は自然にわかるとみえるね』

『左樣ぢやァないよ、閑暇だから座敷の埃り拂ひに入れたンだらう、これがモット込んで、もゐて御覽、便所と對向ひの薄暗い三疊か何かへ放り込まれるやつだ。』

『アハ、其の方が體に適つてゐるかもしれないね、座敷が立派になると勝手が違つて嫌に寒い樣な氣がするぜ。』

『寒いのは其の故ぢやァないよ、北へ向つて遠く來てゐるンだ東京とは度が違ふンだ』

『火事が凍るッてえなァ此の邊からかい』

『違えねえァハ、、、、』

秋のとりつきも、こゝへ來るとズット深く、閑暇な宿屋の廣い座敷の寂として、

『まつたく寒いね』

『何だか妙に身に滲るぜ。』

『ウフ身に滲るのはお茶代の件だらう』

『えッ女中が來るよ』

ところへ火が來る、褞衣が來る、お茶を注しながら、

『あのお風呂をお先になさいますか、御飯を先になさいますか』

と女中が訊けば、

『イヨウ此段を伺えますヒャアと來た、樓婢さんが書抜き通りに言つてゐるが、どつちを先にしようね和太さん』

『左樣さ、腹も北山だし、薄ら寒くもあるしと、本文通りに風呂場へ膳を運んで貰ふ事にする

かい」

「ウム夫れがよかんべい、何うだい樓婢さん、左樣いふ事に賴まうか。」

と兩人眞面目な顏で寄席仕込のヨタをいふ、樓婢はキョトンと呑込み兼た眼つきをして、

「へえ、あの風呂場で召上るのでございますか。」

と、胸に手を當て八の字を寄せる。

「左樣だよ、東京ぢやァ此の頃莫迦に流行つてゐるのさ、お膳の脚へ紐を結んで首へかけ、風呂の中で一杯飲むンだよ、盃を湯に浮かせてイヨ御返杯ッとね」

「當時東京のい、料理屋ぢやァ大抵風呂で飲む樣に出來てゐるンだ、樓婢さんの前だが風呂場の宴會なんと來るとそりや盛んなものだぜ。」

と笑ひもせずにマジ〳〵と根よくいへば、案外樓婢は正直者で、

「へえー其麼事が流行るのでございますか……」

と變な顏をしながら、

「お帳場で伺つては見ませうけれど」

と起上る、兩人プッと噴笑し、

「イヤ樓婢さん嘘だよ！〳〵」

「樓婢さん君の正直を見ぬいたよ、どこかい、所へ嫁に世話をしようね」

とどこまでもチョックラ返せば、自然ふざけた調子に馴れたのと、今のヨタを眞に受けた口惜しさとで、

「オホ、」

と睨める樣に笑ひながら、

「其の節は風呂場で披露會をいたしますわオホ、、、」

と天晴な仕返し、兩人スッカリ參つて、

「イヤ大出來々々々。」

と喝采しながら起上り、

「一本參つた所で風呂へ行かうぜ初ちやん」

「其のうちお膳の支度を賴むよ、樓婢さん。」

と和太さん無事な事を言へば、樓婢は勝に乘じたといふ調子で、

「お風呂へでございますか」と來た。

『イヤあやまつた〳〵』

『逃ろ〳〵』

と襠衣に着替るが早いか、兩人喧ぎながら飛出して、

『アリヤア〳〵。』

と廊下を駈けて行つたはいゝが、

『オーイ樓婢さん、風呂場はどつちだアイ。』

と呼んでゐる。

風呂場は亦鰐ド德ひの階段を二ツばかり降りて、摺上川の流れに臨んだ崖際、華氏百三十二度といふ上燗で二ヶ所の湯槽にタプタプと溢れてゐる。

兩人例に依つて河馬の如く飛込んで、ブル〳〵と顔を振るひ、バチヤン〳〵と刎ちらかし、自然の湯加減で人間も自然にかへるのか、正直懸引無し生地からのヨタを發揮して、

『和太さん湯ぶくれダンスをやつて見せようか。』

『アハヽ、湯ぶくれ都々逸てえなァあるが湯ぶくれダンスは新らしい』

『新らしいにも何にも、今此の體の浮く所で考へたのさ、ソラ御覽、斯樣やるのだ、いゝかね、

チータラタラチータラタ、ブウーブー。』

と初ちやん湯槽に浸つた、片手片足を互ひ違ひに、調子に合はせて浮かせながら、妙な腰つきをしてグルグル廻る。

『チータラタラチータラタ、ブウーブー。』

どういふ所から調子を取つた音樂の眞似か奇々妙々な聲を張上げ、亦震はして、夢中になつて踊り刎かす流石に和太さんヨタ仲間ながら、こゝまでは奮發が出來ず、呆きれかへつて、

『オイ〳〵宜加減にしろよ、如何に何でも見つともないよ。』

『チータラタラチータラタ。』

『オイッてばオイッ。』

『ブウーブー。』

いくら呼んでも無我夢中、遂に初ちやん湯氣に上つて打倒れる。

『さァ大變。』

と和太さん面喰つてヘドモドしながら、

『誰れか來ておくれよウ。』

四

番頭樓婢が駈着けて、湯ぶくれダンスでぶッ倒れた初ちやんの天窓から水をぶッかけるといふ大騒ぎ、やがて氣は着いたもの、妙に初ちやんグッタリとして、座敷へ戻つても暫くは天窓を抱へてハァハァ云つてゐるので、

『貴客少しの間其の儘お寢みになつた方が宜しうございませう……只今お床をのべますから。』

と樓婢は氣を揉んで座敷の隅へ床をとれば、初ちやん不景氣な恰好をして這込んで、

『ウームン和太さん〳〵。』

と仰山に苦るしさうな息を吐きながら、

『もー も此の儘飯坂の土となる樣な事があつたら、あとに殘りし妻や子が……』

『心配おしでない、上さんは鎌倉へやつて尼にして、子供は僕が引取つて、左樣さな、大きくなつたら落語家にでもしてやらうよ。』

『噫ー　落語家とは頼りないことを云やァがるウーンウーン、死にきれない。』

と初ちやん心細氣に唸つてゐたが、其のうち樓婢がお膳を運び入れたのを見ると、

『ウゝーン、ウーン。』

と唸りながら起出して、お膳の前に坐わり込む。

『あらッ。』

と樓婢は呆きれて、

『もうお快しいでございますか。』

と云へば、

『ウゝンウーン。』

と唸りながら箸を取つて盃を取る。

『姐さん何うだい驚いたらう、此の男はね食物が出ちやァ、わづらつてなんざァゐられないンだ

から。』

と和太さんがコキ下す。

『イヤ何と云はれても食物が出ちやァ唸つちやァゐられない、お蔭樣で天窓も大分快くなつたよ樓婢さんお酌だ。』

『オホ、、、ほんとに快いンでございますか、風呂場へ行つた時は吃驚してしまひましたわ、眼を白くなすッてさ。』

『アハ、、、まつたくだなァ樓婢さん、情けない態だッたぜ、此の世の人の面ぢやァなかッたね。』

『えッ色氣の無い言を云ひなさんな。』

と初ちやん一杯飲んで、まつたく氣分が癒り、

『イヤ然し流石に僕もチョイと驚いたよ。』

とホッといふ。

『やつぱりあゝいふ事も此の頃東京で流行るのでございますか。』

と樓婢は亦フイ討に一本、初ちやん額を叩いて曰く、

『あいつァあんまり流行らねえウフ、、、、。』

『オホ、、、、。』

此所へ來るには遊廓をぬけて來る程なれば、勿論町には藝妓もゐる、東北目抜きの歡樂境として、會津の東山と艶めく繁昌を爭ふ所、自然氣分がこなれてゐる。

時に芭蕉翁の本文をみれば「五月五日の事なり其夜飯塚（卽ち飯坂）にやどる、溫泉あれば湯に入りて宿をかるに、土座に莚を敷てあやしき貧家なり、灯もなければ、ゐろりの火がけに寢所をまうけて——云々」とは、さて寂しかつたものかな。

無風流な頭腦に讀んでみても、芭蕉翁と會良が此所へ着いたさうして景色、圍爐裏の火かげにちまゞと寢た二人の姿など想ふと、何か知らず涙つぽろくなりもする、そこにこそ人の世の懷しみや、深いものが泌々味はれもしようが、變れば變る現今の賑かなこと、湯ぶくれダンスの湯氣あがり、初ちやん氣分が癒ると再び調子づき、

『和太さん、宜しく眼のふちが染つて腹ができたら、此の儘往生も曲があるまい、ぶら〳〵散歩ブラサン〳〵と出掛やうぜ。』

『ウム其の事だ、ブラサンこちら手の鳴る方へかね。』

と駄洒落ながら起上つて、對の褞袍のツンツルテン、貸下駄を突かけてふところ手、飯坂の町へぶらり〳〵と出掛ければ、褄を取つたあでやかな代物にチラホラと往交ふ。

「イヨウ行くぜ〳〵、和太さん滿更でもないよ。」

「ウムあんなのに打込んで身上を摺上川にする奴もあるだらう。」

「土地の名を讃込みと來たね、ヘン其麼のならわけはないや、御面相もいひざかで、チヨイとつな女とは何うだい。」

「何も其麼に無理に揑つけなくつてもいゝよ……オツト先刻通つて來た遊廓の所へ來ちやつたぜ。」

「一本道の羅生門といふものだ、然しねえ和太さん、如何に僕等が武勇に秀れたりと雖も、神島縣信夫郡飯坂町に於て狐退治でもあるまい。」

「狐退治よりは未だ猫退治の方が增しだらうが、これが案外手强くつて退治損ねるなんざア名譽にかゝはるからね、先づ君子危きに近寄らずとする事さ。」

「然し、先刻はブー〳〵自動車で通つちまつたので、飯坂名代の十綱橋をチヨイと覗いたばかりだつたから、あの橋の邊りまでは行つてみようぜ。」

「さうなると何うしても此の遊廓をぬけなければならないね……何も遊廓を恐れる風でもないが、宿の褞袍で此の中をゆくなんざア引張込まれやすいよ。」

「さう云へば先刻物凄いのが暖簾から首を出してるたつけね、流石の勇士も聊かおびへるね、してみるとやつぱり勇士より君子となつて宿へ歸つて清らかに寢る事にするかい。」

「見物は明日の朝早くといふ事にしようぜ、其れに明日は松島迄伸すといふ日程だぜ、早く歸つて疲れを休めて置く事だ。」

「ヤレ〳〵何といふ無事なこつてせう、ねえ和太さん、十年前に斯樣云つた了簡だつたら今頃は地所の二三ケ所も買つてゐるだらうテ。」

「さうさ北海道の端の方を只見たいうな値でウンと買つて、地主になつた二日目に熊に喰はれて死んでゐたつてねハハヽヽ。」

「ウフツ碌な事は云はないウフヽヽヽヽヽ。」

此の所、兩人ヨタ者の割に妙に潔癖で、泥臭い地方の遊廓にタヂ〳〵として宿へ引返す所、殊勝でもあり亦言ひ甲斐なくもあり、鳥度作者を手持無沙汰にするといふもの。

斯くして其の夜は宿にグツスリ、

明る朗、川添ひの雨戸を繰り開ける音に、欠伸をし腕を掻いて澁い眼を擦り〳〵起出して、廊下へ出て見れば、秋晴れの好い日和で、高欄に凭つてのぞく摺上川にモウいつぱい朝陽がさして清い流れの底が透いて美しい。

『夜る着いたので昨夜は此の景色にお目にかゝれなかつたが、好い氣分に眼を覺まさせる景色だね初ちやん。』

『ウム向ふ河岸は、昨夜來る時に見て來た湯野とかいふ溫泉町の端れなんだね、兩岸が山路に入つてゐないから感じが明るくッていゝね……何しろ一風呂飛込んで來よう。』

『一風呂はいゝが、モウ湯ぶくれダンスは斷るぜ。』

『ハヽヽア昨夜はチヨイと驚いたッけね、考へてみると我身ながらあんまりいゝ圖ぢやアなかッたね。』

『考へてみなくッたッていゝ圖ぢやアないや、熟々僕は情けなくなつたよ。』

喋舌ながら風呂へ行く、其の間に座敷の掃除の出來る事型の如く、好い氣持になつてあがつて來ると、梅干の小蒲物にお茶が入る、これ亦旅籠の朝の定式だが、そこに何とも云へない遊山旅の樂しさと、友懷かしい思ひが迫る。

『ねえ君和太さん、今更でもないが、湯宿の朝の此の心持はまつたく別だね。』

『平常天下國家の爲に頭腦を疲つてゐるからね、時々は斯樣いふ屈托から放れた暢然とした氣持にならなくッちやア毒さ。』

『然し願はくば、野郎同士でなかつたらと思ふね、女房でないのに丸髷を結はせて……』

『氣障な事を云ひなさんな……冗言を云つてゐるよりは、朝飯を食つたらさッさと此宿を立つ事にして、此の邊の名勝を見ながら伊達驛てえのへ行つて、松島へ走らせる事にしようぜ。』

『此の名勝と云つた所で、例の十綱橋から摺上川を振分けて見た所ぐらゐなものだらう、兎に角名勝を見るなら奮發して此樓の番頭でも賴んで案内させる事だ。』

『紫の小旗をかつがせし、後からキヨロキヨロして尾いてゆくやつか。』

『先づそこいらが役に適まるといふものだ。』

やがて、どんよりとした豆腐汁、飯坂名物のなめこのお椀、玉子の半熟といふ淡白とした獻立の朝の膳、喋舌ながら喰べながら、番頭を呼んで名所の詮議、近廻りを二三ケ所拾つて案内を賴み、

『と決まつたら、勘定をしてお呉れ、早いとこ〳〵。』

と飯を嚙み〳〵。どこまでも急行奥の細道。

五

旅の衣はすゞかけの露けき袖や絞るらんと、御馴染の安宅の關で、實用のヨタを飛ばして、ぬけぬけと此處へ落のびた、備山伏の源の義ちやん主從が、其の當時の衣裳小道具、卽ち直垂笈、太刀などが寶物として秘め殘されてある、名代の古蹟、飯坂在の鯖野にある醫王寺、こゝに寄つて由緒の骨董を觀た芭蕉翁は「笈も太刀も五月に飾れ紙のぼり」と詠んでゐる。

其れに、此の寺には義經の建立になつたとある、屋島壇の浦の波の泡と消えた嗣信、吉野千本の櫻花の中で散つた忠信、其の佐藤兄弟の墓があり、猶お添へ物と致しましては義經手植の虎の尾の松なんといふものもある、されば較派の旅行子だと此れ見逃すべからずして訪うて往時を偲びもしようが、玆に此の初ちやん和太さんなどに於いては說明だけでも欠伸の代物、殊にそこまで町から小半里と聞いて、

『番頭さん失禮をして置く事にしやうぜ。』

『佐藤君兄弟にお序に宜ろしく云つて置いて貰ひませう。』

とお茶らけて端折つちまい、宿から程近い赤川溫泉の谿谷の風趣、そこに隣りした千人風呂を覗くぐらゐな事にとゞめて、其の他名所の數々は番頭のズウズウと喋舌るに任せ、其のお國訛りの案內振りで知らず氣分が漂ふのだつた。

『用は無いが、急ぐ旅だから宜い加減な所で町へ戻つて伊達驛へ行く輕便鐵道へ乘る所まで伴れてッて貰ひたいな……時に何かい番頭さん、町へ戻つてそこへ行くにはやつぱり例の遊廓の所をぬけなくッちやァならないのかい、どうもあゝいふ所を通るのは恐れるよ。』

と初つちやん片附た聲を出せば、番頭ニヤニヤと笑つて、

『あれも飯坂の名物でございますがへゝゝ。』

と恐れるなどは片腹痛いといふ顏つき、

『何さ番頭さん此の人が遊廓を恐れてゐるのはね、東京の古い馴染の代物か何かゞ此地へ來てるるといふわけなんだよ。』

と和太さん冗言を入れる。

『成程、却々お安くないのでへゝゝ。』

と番頭氣障にまた笑ふ、初ちやん情けない顏をして、

『アゝ助けておくれよ。』

と、溜息をつく所、尤もでない樣にもあり、尤もである樣にも想はれる。

實際難かしい顏をして咎めれば、溫泉町への通り筋に、遊廓を拔けざるを得ざるなどは、眞面目な湯治客なら迷惑もさること、亦然らざる輩に於いては旅の恥はかき捨と飛んだ謀叛氣を起す事ともならう、何れにしても風紀上、場所もあらうにと、義理にも苦ッぽろい顏をするのが當然などと、作者まで這麼野暮な事を云へば、土地の粹士の粹なる事「溫泉の栞」とある案內書の中に、風流といふ小みだしを附けて曰く、摺上川に沿うて愛宕山と相對する景勝の地、兩門靑樓を劃して遊里に界す、（中略）町勢の發展摺上川の沿岸に盛んなるに及びて風景の美大に加はり、隱れたる一名所となれるなり云々と。

其の栞一册兩人から作者へ土產に貰つたので、其の道中話を聽き、其れを繙いて、すつかり感心して了つたり、もの序でに同じく其の項に記るす所、飯坂藝者を紹介した名文をお福分すれば、

先づ曰く、今樣白拍子と題して居るから面白い、さて本文には、浴客をして自然の風景を樂しむの傍ら、美人盛裝して歌舞音曲を以て客人を遇す、現時の所謂藝者なる者是なり（中略）飯坂湯野の兩溫泉の發展と相俟ちて將來は鎌倉時代の白拍子の如く、風雅にし遊藝の趣味豐富なるものを養成し、以て客人を厚遇せんとするの噂ありと聞く云々と來た。

如何に其の文章の巧妙、其の結びにいふ所客人を厚遇せんとするの噂ありなどに到つては、氣分情調、章句の外に溢れてゐるくらゐなもの彌々感心せざるべからず。

其れはさておき、一體兩人は口で莫迦を云つてゐる割に心が締つてゐるのか、其れとも客つたれなのか、或はどうせモテないと觀念してゐるのか、さうした所を避けたがる所が不思議とや言はんだ。

『番頭さん、願はくば違つた道を行きたいね。』

『實の所を云ふとね番頭さん、僕等は今まであんまり罪を造り過ぎてゐるンでね。』

『成程御尤樣でへ、、。』

と番頭は亦樂ぐつたさうに笑ふ。

『番頭さん其のへ、、はよくない笑ひ方だね……和太さん君が先刻變な事を云つたから番頭クンが信用しないんだよ、僕の剛染が此地へきてゐるなんてさ……ヘッ僕等と浮名でも立つたてえ樣な代物が、まさか這麼所へは來ないからね。』

と初つちやん言ひかけて、

『イヤ這麼所なんて失禮だが、ねえ番頭クン實の所がさ。』
『初つちやんあまり言譯は云はない事だよ、どう云つた所で番頭さんは柄ゆきで判斷するのさ。』
『何れに致しましても、旦那方は女の子の方で放つて置きませんなへ、ゝ、ゝ。』
『えッ氣味の惡い事を云ひなさんな……お喋舌よりチト急がうぜ初つちやん。』
『ウム其の事だ。』
『其れではこれから遊廓の通りへ出ませんで、裏通りの鯖湖の方から御案内致しませう。』
と、出て來た宿の角屋の通りの方へは戻らず千人風呂からダラ〳〵登つた桑畑の道を眞直ぐに默つて歩かうとしても何うしてもお喋舌のいがみ合ひ、言葉敵に番頭がからむといふ賑やかさでゆく程に鄙びていつそ懐かしい感じの溫泉の街へ出る。
『旦那方、こゝが鯖湖の湯と申しまして東北一と稱はれて居ります。』
と番頭が案内する、如何にも土色を帶び湯宿の軒並びに、路中に風呂家形を置いた共同湯、近鄕客の見得を離れた出養生で暢然とした繁昌さ。
『ねえ君初ちやん斯樣いふ所の方が、却つて溫泉場といふ氣分がするね。』
『盧柴や甘ッたれたのが來る所でないからね……時に番頭クン鯖湖ッてえのは判じ樣の無い名だが、そも其の由來といふのは何ういふンたい。』
『左樣でございます。何でもこれは昔時此の飯坂の附近一帶を鯖湖の里と云つたのださうでございます、此の邊に大きな湖がありまして、其れが恰度鯖の型に似てゐたのが其の名となつた元ださうで……』
『フームン、鯖に似てゐるから鯖湖か、もし鯛に似てゐれば鯛湖かね。』
『鯛湖が鳴つたら賑やかだと來たかいアハ、ゝ、ゝ、そこで和太さん、其の鯖湖なる名を附けた時の話を君知つてゐるかい。』
『知るにも知らないにも、今鯖湖といふ事を訊いたばかりぢやァないか。』
『僕は今鯖湖と云はれて思ひ出したンだがね、其の名を附ける時の話を訊いた事があるんだよ。』
『へーえ。』
『オイ番頭クン君も此の次ぎ客を案内する時に役に立つ樣に聽きたまへ。』
『へい有難うございます。』
『名は忘れたが何でもえらい修行者が何かだつたよ、其の大きな湖の周圍をグル〳〵〳〵と三度廻つて、其れから莨を喫みながら考へて附けたものだッてね。』

『チョッ詰らない、何も其れだけの事ならえらさうに話す事はあるまい。』

『其れがさうでないよ、いゝかね、三度廻つて莨を喫みながら考へたンだろ、是卽ち三遍廻つて鯖湖にしよとアハハハハ。』

『えッ眞面目になつて一杯喰はせやがる。』

『一杯ぢやァないよ和太さん一服だよ。』

『やかましいッ。』

先づは斯樣にどこへ行つても、巫山戲ること飯坂の名勝を荒削りに見物終つて、伊達驛から、其の日のうちに、松島、鹽釜、夜は仙臺に一泊、翌日歸京の道中のヨタづくし作者の筆もここらで端折る急行記、。

山水絶勝　鹽原と那須

一

山櫻、夫れから躑躅、さて新緣と來ると、いよ〳〵旅情をそゝられることだ。

時に、都會といふ、雨がチョイと降ると靴のうづまる泥沼の街、晴れゝば忽ち砂埃りが渦を捲く——東京で、抑へつけられて働いてゐる私等の樣な人間仲間は『もう新緣がいゝだらうね』と、偶と誰かゞ言つたのを聞いた日には、そりや矢も楯もない、出掛たくなる。

いゝな、山の新緣、聞いてさへ氣が澄む樣だ、軒まで綠りの滴る樣な、溪流添ひの湯宿の二階か何かに寢そべつて、せゝらぎの音を聞きながら（僕は今こゝに來てゐるよ）などと、友達へ便りの繪葉書を書いてゐる心持といふものは、まつたく何とも言はれない。

だが——その都會の埃りの中で抑へられてゐる、やたらには閑暇のない私らは、東京からさしての遠い山水美をいふ資格も材料ももたないが、世間に一番多い私等とおんなじ樣な忙しい閑暇のない人々の爲に、土曜の午后から日曜かけてとか、たか〳〵中二夕晩といふ程度の日取で、悠

然した左樣いふ氣分に浸り得る山水の勝地を、嘗ての旅鞭からひろけてみたい。

東京から最も近くて、最も勝れてゐるのは箱根だ、が其の近いだけに、それほど山水美のまつたき勝地でも、いふのが所謂つきなみの樣な氣もするし、夫れに現今の交通は、山のあらかたを巡つても日歸りでよいといふ程なので、やたらに人が出るのと其れから山水美の自然を彩るに蹴出しの紅る、さう云つた代物が彼方此方したりするので、旅心といふ樣なしづかなものを味ふとするには、どうも邪魔になる。

で私は、稍遠い鹽原の溪流と那須の山とを玆にいふことゝした、が、夫れも然し、きのふはけふの昔といふ樣に、ドシ〳〵變つてゆく所謂文化の勢ひは、茂みからのぞいてゐた茅葺屋根が、いつか芋羊羹の樣な建

物になつてゐたり、又交通の便なるものが、風趣の眞ん中を遠慮なく切ひらいて走つたりするから、どこにしろ、久し振で行つてみると、イヤ便利になつたなと思ふと共に、景色までがちがつて感じられることさへある。

去年恰かも新綠時分、私は久々で鹽原へ行つてみてさう思つた。

上野を出て約四時間、東北線の西那須驛で汽車を降りると、驛へ横づけに電車が待つてゐる、西那須から鹽原まで約四里といふ丁場で、其の電車が三分の一ほど往つて新鹽原といふのへ着く——これがツイ以前までは鍛冶屋の直しもの、樣な輕便鐵道といふやつで、やつと鹽原まで半分の關谷といふ所までしか往かなかつた、だから其の時分は、關谷から足弱は俥かガタ馬車で二里程の山路を登つたのだ、が然し、左樣した不自由の時分の方が、たしかに風情が深かつたと言へる。

恰度此の關谷からが山のかゝりで、漸次に鹽原の風光に入つてゆくのだから、よし便利になつた今日でも、電車や自動車をかりるよりも、ぶら〳〵歩いてゆく方がいゝ。

山路と云つても、自動車がゆれずにゆく平な爪先登りで、急かなければ足弱でもさして草臥はない。

然し前に言つた樣に忙がしい身の、土曜から日曜といふ日程だとすると、新鹽原まで電車で往き、夫れからの約一里を歩くか、ヨリもつと疾く目的の宿に着いて悠乎しようとならば、西那須から一氣に自動車を飛ばして了ふ事だ。

だが、土曜も朝少し早く上野を立つとして男同志でもあれば、關谷から歩いて、暢氣な事を言ひながら往つても、正午少し過ぎには彼方へ着き、其の中食の一酌には既に觀つゝ來た鹽原の風光が話題にのぼる事となる。

お出掛けなさるなら左樣おしなさい……と私はいひます。

關谷を過ぎると、右に山を見上げ左りに谷を見おろしてゆく、と唯左樣言へば、よくある山徑だが、ゆく程に漸々ありきたりでなくなつて來る、自然な岩疊の幾曲り、崖の茂みから下ゆく流れの音、其の總ての感じが、山が次第に深くなつて行つても、あかるく而してやはらかく、自然が這麼も造り得るものかといふ樣に美しい。

流れ、夫れが名代の箒川で、紅葉の時、新綠の頃、彼の時の錦の綾、此の頃の綠りの茂み、葉越の〳〵下を縫うて岩にせく水、夫れが徑の曲折の度に風趣を變へてみせる。

『成程い、ね鹽原は……。』

初旅が這麼云へば、馴染のは又そこがこゝがと呼び合うて懷かしがる。

新鹽原ゆきの電車は、恰度箱根の强羅ゆきの夫れの樣に、窓から溪流を覗かせてゆく、で其の終點からしばらくゆくと、そこに佗びた二三軒の湯宿がある、夫れは鹽原十湯のとりつきの大網溫泉といふのだが、こゝは都會人などの榮耀で遊ぶ宿ではない、が、ほんたうの出湯といふ氣分は斯樣いふ宿にこそあるのだと思はせる。

二

道筋から言つてゐると長くなるから、少し急ぐ事にするが、大網を過ぎるとさらに景色がすぐ

れて來る、水聲淙々と響く所、そこには必らず橋があり、欄に凭つて振仰げば、樹間を分けて幾丈の絶壁から落下する飛瀑、さらに、欄を左りして瞰下せばまた幾丈、懸崖に激して箒川の清流が落ちてゆく、左樣した大瀑布、小瀑布が幾ヶ所となく、中にも其の名高きは、回顧瀑、布瀑などいふのだ、また物語ある名所の稚兒ヶ淵や、左り靴や、夫れから名代の白雲洞や、何れも大網から鹽原の中心になつてゐる福渡戸へゆく其の間の道並にある。

白雲洞、夫れは岩山の洞をぬいて、道を通した小半丁の洞門で、盛夏もそこは襟寒く、冷やりと清水が滴る――そこをぬけて、材木岩の奇勝を仰ぎ、ゆく程にやがて其の福渡戸に着く。

福渡戸、土地では稱んでふくわたといふ、恰度箱根で言ふと塔之澤といふべきだらう、鹽原十湯のうちの第一位で、旅舍は各々三層五層の軒を競うて、何れも其の大玄關は都會の客を迎ふべく光らせてゐる、所謂ブルヂョア向きだ。

道として通つてみれば、兩側に左樣した高樓や、例のおみ土産店がつゞいてゐるので、唯湯の街といふだけだが、地層は海拔一千五十尺とあり、こゝが一番箒川に相接してゐる所で、左り側の旅舍の湯槽の背を、盆石の夫れの樣な石を洗つて清流がゆく、されば其の旅舍の裏手の欄に凭ると、今來た道の夫れと又風趣を變へた、鹽原の絶勝が叫ばれる、七ッ岩、昇風岩、野立石、夫れ等は何れも呼べば答へる其の中流に屹然として立つてゐる。

が然し、私の言ひたい鹽原の美は、もつと先きにあるのだ。

其のふくわたの軒續きを出端れると、ゆく鼻の先きに、初旅の者は思はず聲をあげる、幾百仞の巨岩が雲に聳え、翠を疊み、眞に觀る一幅の畫圖をなしてゐる、卽ち夫れが天狗岩だ、道は其の岩角を曲折して、夫れから鹽釜、畑下戸、門前、古町と道筋の飛々に、何れも夫れは湯の湧く所、各旅舍をひかへてゐる、言ふまでもない何れも十湯のうちだが、其の邊りは案外平凡で、湯浴として旅舍に奢つた構へを見かけぬのをよしとするが、景色としてはいふほどでない。

私の言はうとするのは、鹽釜（俗に鹽原高尾といふ高尾の碑のある所）を通りして箒川に架した鹽湧橋といふ木橋をわたつて山の小徑を左りへ辿る、箒川へ落ちる溪流のせゝらぎを聞きながらゆく其の邊からだ。

負うてゆくのを桝形山と言ひ、前に望むのを前黑山と言ふ、秋は紅葉に、夏は綠りに、其の山裾が相迫つてゆく所、溪流に添うて幾曲りすると、そこに二三の旅舍があり斷崖を下へ幾階、其の階段を降りてゆくと、清流に臨んだ石風呂があつて、夫れがその石疊の境界一重に、岩にせかれてゆく水の夫れと平行して、加減のいゝ湯がタプ〳〵と湧いてゐる――鹽の湯といふのが夫

れだ。

氣取つて言へば淵水漾々として翠緑をたゝへ……とでも來るのだ、淙々の響颯々の聲てなものを耳に、其の石風呂の自然の湯加減に浸つて、首を浮かせてゐる心持は、そりや何とも言へない。

去年行つた時、夫れは餘所からの歸るさだつたので、急いだ爲に、こゝの旅舍を訪はなかつたが、曾て一二度此の湯に浸つて、其の景色の中に浮かんでゐた心持は忘れられない。

そりや材木岩や天狗岩やを云へば、振仰ぐ嶮崖數千仞とやら、また彼の七ッ岩や野立石やの邊りを言へば、激流岩をかんで何とやら、凄い形容を用ひずばなるまいが、總じてみる鹽原の風光は、やはり靜かに、やはらかな所にあると思ふ、山水にやはらかとは變な言ひ樣だが私にはどうも左樣感じられる、謂はゞ、夢にでもみる景色の樣な、そこがいゝ。

殊に此の鹽の湯から出て、さらに緣りの繁みを分け、山の小徑を須卷溫泉へゆく邊り、倒れた櫻の樹が其の儘、チョロ〳〵流れの丸木橋になつてゐるのを、小鳥の囀りを聞きながら、宿の貸下駄で危く渡る其の氣分、私の言ふやはらかなとは其樣云つた所からだ。

關谷から登つて、大網、福渡戸と來る迄、なか〳〵に見飽きぬ景色を、さらに鹽湧橋から此の山路に入つて、其樣變つてゆく風趣は、よくも斯樣まで自然が描き盡したものだ、と感じられる。

然もゆく所必らず湯が湧いてゐる。

そこで、二日程で鹽原に遊ばうとする初旅の人に案内しようにに、大方は今書いて來たのにダブル樣だが――西那須で汽車を降りたら直ぐ電車に乘り關谷まで走らせて、夫れからブラ〳〵歩きにして鹽の湯へ來てしまふ、左樣した所で上野を朝早く立つたとすれば午后二時には着く、で、其の日は石風呂に浸つたり、烏渡出て門前古町畑下戸、夫れに鹽釜の高尾塚（塚は福渡戸から來る眞直ぐの通りの郵便局の背後に在る）などを見物して戻つて來ても、もゝ二時間とはかゝらないから、其の日の泊りは悠乎としたものだ、で翌朝早く起きて、前にいふ山の小徑を須卷溫泉から其の他二二の名所を探ねて晝食迄に宿へ戻り、晝過ぎゆる〳〵歸り支度をして、新鹽原までまたブラ〳〵、夫れから電車で西那須驛へ――で東京へ歸るのは晩の八時とみれば確かだ。

夫れで、鹽原の山水美を語るに十分といふものだ。

三

さて次ぎは那須だが、那須は其の山水美の勝に入らうとすると、鹽原よりは些くどい、日のある旅なら何でもないが、土曜から日曜程度では、湯本泊りで例の那須野ヶ原の殺生石を觀て來る

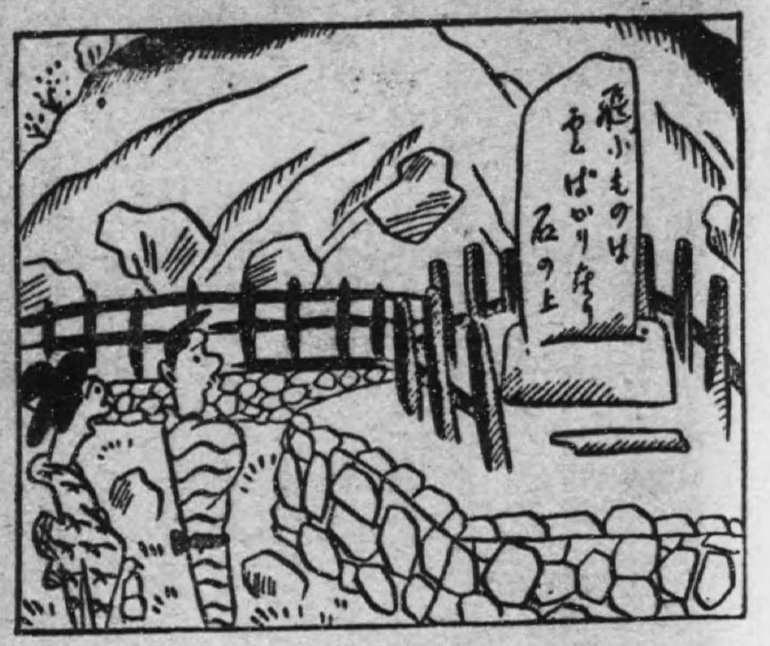
ぐらゐなものだ。

彼所まで出掛て夫れだけではつまらない、中二夕晩泊るとして三日の旅ならば、あらかた那須の山巡りがして來られるから、とてものついでに奮發をする事だ。

本來は鹽原からさして山隣りの那須なのだから、兩方かけて四五日の旅に恰度よい、然も鹽原は私のいふやはらかい美しい景色で、那須と來るとまるで變つた雄大な景色なのだから、同時に廻つても山に飽きず變つた自然のおもしろさが感じられる。

鹽原へ往く西那須驛の二ツ先の黒磯驛で降りて夫れから、こゝも四里餘り山へ向つてゆくのだが、此の途には未だ輕便も電車もない、自動車かガタ馬車によるより爲方がない、夫れに此の途は、那須獄の麓湯本のそこへ着くまで、自然に登りにはなつてゐるが、見渡す果もない那須野の平原で、歩いては些飽きる。

自動車で小一時間、ガタ馬車で二時間ばかりかゝるが、四里の平野のところ〴〵に馬立場の、松子、田代、守子坂などといふ小さな部落があり、其の立場々々で息を入れて、彼の旅の哀れを想はせるトテートーといふ喇叭の音を流してゆく、其のガタ馬車の方に却つて風情がある——勿論經濟でもある。



湯本は卽ち遠く〳〵平野を來た那須獄の麓で、硫黄の泉香が漂ひ、狹い路の兩側に相對つて三層四層の旅舍の軒が何にもなかッた平野を來た眼には、如何にも賑やかに感じられる。

長逗留の所謂湯治客は、二階三階の欄からつれ〴〵の首を出して、入つて來る自動車やガタ馬車の客を懷かしさうにながめてゐる、こゝは箱根の塔之澤、鹽原の福渡戸と同じに都會客の入込む所だが、然し彼所らから入れば、よし設備は調つてゐても總てが鄙びて、夫れ程客に贅澤振りを見かけないのがいゝ。

だが何れにしても都會人に依つて賑ふ所は自然俗氣をのがれ難い、夫れに山に突當つて旅舍や夫れに準じた家並で一廓を成してゐる夫れだけの所だから、景色としてはこゝらでは求められない。

尤も此の湯の街の正面に在る溫泉神社の裏山を降りると、思はず「オヤッ」と叫ぶ程、意外な景色が展界する。

そこは切落した硫黄山の崩れ石が、見渡す限りの曠野にひろがつて、踏度も無氣味に重なり亂れてゐる、遠近の山から落て來る清水は其の灰色の石原の間を硫黄にさびて赤く生ぬるく流れてゆく、鼻をつく硫黄の香、彼の名代の殺生石は其の眞ん中に在り、例の蕉翁の行吟「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」の碑が其の傍らに建つてゐる、此の邊りは硫黄の氣壓で、飛ぶ鳥が落ち、人も茫乎してゐると死ぬといふ。

私は初めて此所を觀た時、地獄の景色を想つたものだ。

此の物凄い野を越して、清水の落る澤に添うて、赤土の小徑を胸突きに登り、山路を左りにゆくのが那須探勝の歩き順だ。

交通は湯本限りで、山の湯にゆく湯治客は強力に荷を背負はせ、嬢さん連れにもしろ歩かざるを得ない、辿る夫れもホンの小徑で、ところ〴〵に知るべの杭は建つてゐるが、夫れをウッカリ見過ごすと、どう行つても果しがない樣な事になる。

夫れに山は晴れと見て登つても、直き雲霧に立塞がれるから恐るべしだが、亦然し、迷ひ迷つて、思はず溪谷の茂みに湯煙りの立つ宿の草屋根を見出したり、いつか拭ふ樣に雲霧が去つて、眼界が一時に展けて山の頂上へ出てゐたりするそこに山巡りの妙がある、私は此の山巡りに左樣した思ひを味つた。

見出した宿は大丸の湯と言つて、溪流を折曲し、蒼樹に圍まれた佗しい軒の、大きな一軒家で、勿論内湯だが、崖の横腹から湧出す湯が、溪流の岩間を其の儘の浴槽にしてゐるなど、之れに浸つて仰向てゐたら、暫時は原始時代の人間にかへれるだらうと思つた。

鼻の先まで立込てゐた霧が、漸次に晴れてゆくと、そこは那須ヶ嶽の頂上に近く、思はず息を呑んで立止まる。海拔六千何百尺を一望に瞰下す所へ來てゐた。

頂上の噴火口を背にし、なだらに山裾まで瞰下す曠野一望、さらに雲表に聳ゆる旭大倉の峻嶽間を遙かに斜陽に光る豆粒程に見ゆる所、夫れはそこまで六里と聞く白河の關だつた。

其の山の湯の幽邃と、其の展望の雄大さは以來何處へ旅をしても、山を觀る度の想出となつたのだ、此の山に湯の湧く所は總て七ヶ所、湯本、高雄股、板室、大丸、三斗小屋、北の湯、辨天とあり、湯本の他は那須嶽の中腹一帶、巡りゆくところ〴〵に見出すのだ。

尤も板室、三斗小屋は些遠く、一度行き二度と行くまい三斗小屋などゝ麓邊りでいふ所、何れ

夫れだけに風趣も深からうが、そこまで伸してみる程日の無い私の旅は、漸く其の他の湯を探ね探ね、北の湯へ來て日が暮れ其處で一泊したのだつた。

前に言はなかつたが、此の行程では前夜は湯本へ泊らなければ不可ないのだ、で玆に北の湯へ泊つた其の宿の感じや四邊の風趣も云ひたいのだが、こゝには端折つて夫れよりも、二夕晩泊りとしての那須探勝順序を一寸書き添へて此の記を終る事とする。

朝早く上野を立つて黑磯まで汽車は約五時間、夫れから馬車として湯本まで約二時間だから、宿に着けば何うしても午后三時頃にはなるだらう、一風呂して一休みして湯本の街をブラリと觀て來るぐらゐで其の日一杯、翌朝、其麼に早くなくても、殺生石から山巡りをして、北の湯泊りなら少しは山路にまごついても大丈夫、翌日は北の湯で小半日ぐらゐはゴロリとしても、其所からならば湯本へ下りの一里だからわけはない、あとは馬車を借り汽車の時間にムダをみなければ少し遲い晩飯が東京で喰へるといふものだ。

旅のたより（上）道了樣から

═喜代子さん御許へ═

第一信

喜代子さん、あなたは未だ御存じなかつた樣でしたね、小田原の道了樣を……妾もけふ初めて出掛けましたの、連れはね良人ですの、新婚旅行といふわけぢやありません、だつて最早半年も經つてますわ、笑つたり、ひやかしたりしないで頂だい、あなただからこんなお便りしますのよ、今朝八時の汽車で東京驛を出ましたの、今丁度藤澤を過ぎまして、二人して、窓から富士を眺めてゐますの、ちぎれ雲一ツ見えません、何だか富士が妾達を迎へてくれる樣に思はれますわ。（汽車中にて戸塚驛投函）

第二信

國府津を通ります時、いつかあなたと箱根へ行つた時の事を思出しましたわ、あの時分は面白

うございましたわね、强羅の遊園地でオスベリなんかして妾もあなたも隨分おてんばでしたわね……けふはほんたうに好いお天氣です、小田原の海が靜かで、伊豆の初島がハッキリと澄んで見えますの……良人は初島へ一度行つた事があるといふので、島の傳說や何か面白い話をしてくれました、それは今度お目にかゝつた時にいたします、只今松田驛に着きました、午前十一時少し過ぎ。(松田驛前の茶見世にて)

第三信

松田驛前の掛茶屋には、講中札だの奉納手拭だのがたくさん軒にかゝつてゐまして『道了詣り』といふ氣分が漂つてゐます、乘合の馬車だの自動車だのが、參詣客を喧さく呼んでゐます、良人は見得の嫌ひな人ですから、ガタ馬車がいゝよと、それからガタ馬車へ乘りまして、一里程の田舍道を道了樣のお山の麓に着きました。(麓の茶見世にて)

第四信

麓からお堂の所まで廿八丁の登りで、そんなに急ではありませんが、夫れでも女には却々骨が折れます、高い〳〵杉並樹の間をどこまでも〳〵振仰ぎながら登るのですが、其れがいくら行つても盡きない樣な氣がします、足弱の人は籠か馬かに乘るのですが、そこは以前のおてんばに復りまして妾は裾をからげて登りました、おまへはなかなかエライよ、此の分なら日本アルプスぐらゐは平氣だらう……なんて良人にひやかされました。(道了樣にて)

第五信

喜代子さん、一度は來てもいゝ所です、千年杉とでも云ひませうか、道了樣の御身體は天狗樣だと云ふ事ですが、如何にも其の天狗樣でも住んでゐさうな杉の梢から日洩れがして溪流のせゝらぎに蒼い影を落してゐます、お堂も立派です、そしてお詣りをして護摩札を頂きますと、其の頂いた者には道了樣からお精進の中食が出るのです、妾達も其れを頂きましたが、其のお中食の具合が如何にもめづらしふございますのよ、次ぎの便で又申し上げますわ。(お堂の內にて)

第六信

お堂の右手に受付所がありまして、そこへ護摩札を願ひますと、お中食を頂くお座數へ通され

るのです、廣い〳〵黑光りのする廊下を通つて行きますと、そこは百五十疊ばかりの廣間で、そこにズラリとお膳が列んで參詣者一同が揃つて頂くのです、私達は斯樣いふ所に出ましたのは初めてゞすからほんたうにめづらしうございました、夫れでお膳には冷酒が一本宛附くのです、御菜はがんもどきが一個に青豆の小皿にきりぼしの煮たのが尠しばかり、良人ッたら、平民食堂よりひどいな……なんて勿體ない言を言ふンですオホ、、、、。(中食を濟まして)

第七信

登りは、いくらおてんばに復つても骨が折れましたが、下りは面白い樣に樂でした、麓の茶店へ直き着きまして、そこで一休してから、またガタ馬車で松田驛へ戻り、これから直ぐ歸京するつもりだつたのですが、良人が急に箱根へ行きたくなつたと申しますの……今夜は湯本へ泊ります。(松田驛にて)

第八信

喜代子さん、國府津で眞鶴行に乘替へて、小田原驛で降り、それから電車で、例のちんりうだのういらうだの、店の前を懷かしい幾度かの旅の想出に浸りながら、夕暮少し早く湯本に着きました、いつに變らず早川の瀨音にあたまが洗はれます、福住の川に添うた二階で只今浴衣に着代ました、良人の背丈が高いので浴衣がツンツルテンでございます、其れも旅の氣分でございますわねオホ、、、、。(湯本福住にて)

第九信

ほんたうに妾達の爲の樣なお日和です、今朝も晴々としてゐます、宿の女中さんよりも早く起き出して、相變らずではありますが、玉簾の瀧から早雲寺へ廻つて、それから宿へ戻つて朝御飯を頂きましたの、それでけふは最早どこへも行かずにドン〳〵歸つて、良人は會社に出勤するのだと申して居ります、妾は折角箱根へ來ましたのですから、山上の方へでも行つてみたいのですけれど、きのふ日歸りのつもりで出て來たのですからそんな暢氣な事は言つてゐられません、で、これから歸ります、歸つたら直ぐお訪ねして猶悉しくお話を致します、では左樣なら。(歸へりが

旅のたより（下）

赤倉溫泉から

――松子さん御手許へ――

松子さん、先日は道了樣からのお便りを、幾度も〳〵有難う存じました、旦那樣とおふたり連れで、まア〳〵どんなにお樂しみな事でしたらう、まだひとり身の妾は、羨ましいやら、口惜しいやら、ほんたうにイラ〳〵しちまつた程ですわ……まつたくあなたは幸福ね。

其後かけちがつてお目もじ致しませんが、急に妾もきのふから此地へ來ましたのよ、父とふたりで……あなたとはちがひ過ぎますわ、キャラメルをしやぶりながら父のむづかしい顏を見ながらの旅ですもの。

ですけれど、先日のお便りのおかへしに此地の景色をお知らせ申しますわ、あなたの樣に筆まめでありませんから、一々あゝいふ風に羨ましがらせる樣なオホ、御免なさいお便りは出來ませんから、一ぺんに書いて了ひますわ。

たしかあなたはまだいらつしやらなかつたでせう、此地は越後の赤倉といふ山の溫泉なのです。

きのふの朝早く上野を立ちまして、午後の三時頃に漸つと着きましたの、隨分遠ございますわ、ソラよく冬になると汽車が立往生をするので有名な、信州と越後の境の田口といふ驛で降りまして、それから二里ばかり登りますのよ、自動車も登れますが、何だか危い樣な氣がしましたから、妾達は俥で登りましたの

○

其赤倉の溫泉と申しますのは、越後で名高い、妙高山といふ山の中腹にありますので、そこまでも海拔二千五百尺もあるのださうです、登りはそんなに峻しくはありませんけれど、何しろ其れ程高い山ですから、俥も隨分骨が折れます、途中一里程來ました二股といふ所から後押が附きました、で、其の二股といふ所は、直江津の方へ行くのと、赤倉へ登りますのと道が分れてゐます所で、如何にも閑靜な小さい部落でございます。

ねえ松子さん、妾はかういふ靜かな山路の間の部落が大好きですわ、飛々に草葺の家がありまして、道路の兩端には淸い水が細く流れてゐます、田舍の子供等が眞黑な裸でポシャ〳〵と其の流れの中で遊んでゐました。

其の二股といふ村の若者が俥の後押に附くのでした、父は話好きですから俥夫だの、其の後押

の人といろ〳〵な話をしながら登つて行きます、山路には樹は尠なふございますが、背丈よりも高い草が見渡す限りに生え茂つて居ましてて、それに時々山霧がかゝつて來ます、妾は何だか夢でみる景色の中にゐる樣な氣がしてなりませんでした。

やがて、湯宿の香嶽樓といふのへ着きました、で、此の湯宿のあります所は、今まで妾等の行きました他の溫泉場のやうに宿の者達がワイ〳〵いふ樣に客を爭つて迎へたり、土產物を賣る店がうるさい樣に並んでゐるのでなく、ほんたうにおちついた、何となく大まかな氣分のする所です、妾もいつかあなたの樣なよい旦那樣を持ちましたら、再び此地に來たいと思ひましたわオホ、、、。

松子さん、そこで此地の景色を申上げますが、其れは〳〵實に何とも云へない大きな〳〵眺めでございますのよ。

背後に信濃を踏んで、前に日本海を望んでゐます、今朝妾等が起きますと、宿の主人が參りまして、

『御覽なさいまし、今朝は佐渡ヶ島がよく見えます。』

と申します、成程、朝晴渡つた窓から北を望みますと、山の裾から越後平野を見盡した果に、白く光つて見えますのが、其れが日本海で、其の水平線上に薄紫色に浮いてゐますのが、佐渡ヶ島なのです。

○

ねえ松子さん、ソラ佐渡は四十九里波の上……といふ歌がございましたわね、其の佐渡ヶ島が呼べば應へる樣に見えるのです、宿の主人は亦そちこちと指さしをしまして、

『東の方に寄つて高く見えますのが、名代の米山でございます、それから彼の佐渡の浮いて見えます海の出端の所が直江津で、其の一寸手前のゴチャ〳〵とした所が高田の市街でございます。』

と案内してくれました、其の米山といふのは彼の米山甚句の米山でございますのよ、廣い〳〵其の眺めの中に、恰度雲を帶の樣にして米山が聳へてゐるのです。

それから宿の主人は望遠鏡を持つて來まして、さらに玄關の方に寄つた東南に向いた廊下へ案内をしまして、

『これを覗いて御覽なさいまし、野尻湖がツイそこに見えます。』

と申します、成程、覗いて見ますと、班尾だの、黑姑だのといふ信州の山々の間に恰度鏡の樣に見えますのが野尻湖なのでございます。

周圍が三里あるのですッてね、そりや涼しい所ださうですわ、ですから近頃は外國人の別莊や何かゞたくさん出來まして、輕井澤からみんな引越して來るさうです、望遠鏡を放しますと、其の野尻湖は遠くボッチリ白く浮いて見えるのでした。

何しても赤倉は好い所ですわ、東京ではきのふあたりは隨分暑かつたでせう、こちらでは昨夜は袷羽織を被ても寒いくらひでしたの……來年の夏はあなたと御一緒に來たうございますわ。

イエ妾とよりは、旦那樣とお二人で是非御一緒にいらッしやいまし、それではあんまり長くなりますからこれで筆を止めます、何れ歸りまして、たまつてゐるお話をたくさんいたします、御機嫌よう、旦那樣に宜しく。（赤倉香嶽樓にて）

隱れた避暑地　久里濱

此間、久里濱といふ所へ行つてみました、其れは、横須賀の先の、浦賀の先きの、三崎街道から鳥渡左りへ入つた漁村で、向ふ路、卽ち房總の山と相對し然も一番相迫つた灣の首つ玉になつてゐる所です。

左樣、見渡した入江一里餘りで、遠淺の穩かな波打、左りの岬に岬をちぎつて浮かせたといふ樣な小島があり、右の岬には住吉神社の石段が望まれます、而して其れから……嘉永六年六月、米のペルリ總督が此岸から上陸したといふので、其の房總の山と相對した砂上に、故伊藤公の書になる仰ぎみる程の大きな記念碑が建つてゐます。

宿屋としては其の記念碑の傍にたッた一軒あるきりですが、北の窓から其の碑を覗かせ、二階の正面は其の濱一帶を取入れてゐます。

緣先から直ぐに波打際へ飛んでいけるのですから、海水旅館として申分がありません。

宿の各は海濱館と云ひます、間數も大してはありませず、行屆いてゐるとは云へませんが、其れだけに純朴で、氣象もなければ見得もいりません。

夏のさかりは相應に避暑の人等が來るのですが、交通が聊か厄介なのと、其れに未ださほど知られてゐないのとで、湘南一帶や、房總程には込合はないのです。

其れで、客の多くは漁家の間借が多く、宿は其の海濱館一軒ぎりで、間に合つてゆくのですから、其の込合はぬ程度もおわかりでせう。

私等は鳥渡半日ばかり其の濱に遊んで、中食をしたばかりですが、其の厳い事に於ておどろく位ゐでした。

酒は呑みませんでしたが、茶碗に、あらひに、鹽燒で、三人が充分に御飯を喰べて、勘定が計金參圓といふので、隱れたる避暑地として、私は大いに紹介します。

現代

膝栗毛

日本橋から川崎まで

北八『ねえオイ彌次さん、特急といふやつの棚の上下でグッスリ一寢入りして眼をこすつて欠伸をして、二の腕をボリ〳〵搔く時分にやア京都へ着いてゐやうといふ御時世に、たとへボッ〳〵でも東海道をテクッて見やうなんざア、御用とお急ぎが無さ過ぎたね。』

彌次『これもね、都路は五十次あまり三ッの宿なんといふ悠長に道中を並べたお手本で育立つて來た阿母の腹から生れた僥倖といふものさ。』

北八『產の時も隨分ゆつくりしたものだつたらうね、何しろ僕等の公達時分には、さほど西洋ッ風に煽られなかッたから、まだ〳〵世の中がオットリとしてゐたものだ、阿母の事をマ、ちやんとは呼ばなかッたからね。』

彌次『阿母をマ、と呼びやア世間から可愛想がられたもンだ。』

北八『違えねえ……マ、そんな事は何うでもいゝとして。』

彌次『えッ狹つこい所で駄洒落なさんな、』

北八『そこに油斷をしない所が商賣々々だテ、何は兎もあれ、もしこれがズッと伸さうてえ氣になつて其の都路の驛々を拾ひ〳〵饒舌々々行かうもんなら、折角京女に東男を見せ樣といふ時分には、白髮になつちまふぜ。』

彌次『心配しなさんな、京都まで行きやァ染物の本場だからね……』

北八『ウブッ白髮を友彈に染るかい、こいつァ新しいやフ、、、、然しまァ彌次さん、交通の便を勝手に走らせるのも口惜しいから、程よく乘つて程よく歩くッてことに願ひたいね、ねえ彌次さんイヤサ親分。』

彌次『うむ。』

北八『親分と云つたら、納つてうむと來た、其の氣で賴むぜ。』

彌次『其麼ことは云はないでも、勿論と無論でもちむろだよ。』

北八『其のもちむろを逆さまにして室町から電車に乘るべえ。』

彌次『もちむろを逆さまにすりやァ室町ぢやァなからうむろもちだぜ、車掌だつて左樣は誑らないよ。』

北八『車掌ならむろまつウだろ。』

彌次『次ぎが日本ばすウかァハ、、。』

北八『其れにつけても江戸辯なんざァ通りが惡くなつて來るンだね、然し同じ誑りでも市街自動車の女の子のは鳥渡オッだね、次ぎは日本橋でございますッの其のございますッが腦天から黃色く出て刎る如に尻を上げるだろ、あすこが恰度手の平へハンケチを揉込で御覽に入れる奇術師のコッテリ孃と同じ調子だから嬉しいよ。』

彌次『詰らないことを嬉しがつてゐやァがる、オットそら電車が來たよ。』

北八『ウフ何うだい室まつウと云つてゐらァ。』

彌次『い、からサッサと乘つたり〳〵。』

紺暖簾を折廻した呉服店の越後屋が、洋館の七階建と伸上つて、昔時駿河町の面影は、横丁から覗く遠見の富士ばかり、頂上に雪を殘した富士の裾へほかし、名所圖繪を僅かに偲ばせる。

田舍で云へば荒物店、呉服は勿論、桶小鉢から漬物まで賣つてゐる其の七階の洋館前、盧榮のかたまりが一たて降りたので、めづらしく空いた電車に、兩人樂々と掛てトボケタ顏を車窓へ並べ、

彌次『電車も此くらゐ樂に乘れて往復を二人でちぎつて品川まで持つて、貰へるとなると有難味

があるね。」

北八「年中無法に押込まれてゐるンだ、稀に腰がかけられたつて何もそんなに有難がる事はないよ、嫌に電氣局におべつかりなさんな。」

彌次「誰れが電氣局におべつかる奴があるい、車掌用語の懸賞で回數券でも貰やァしまいし。」

北八「こいつァいゝアハ、、、、。」

彌次「えゝオイ北クン、魚河岸から出て來る阿兄のこしらへを御覽よ、近頃ァ耳白の鯉口なんてえなァ見られなくなつたね。」

北八「まつたくだね、もう梅が咲くといふのに、押戻しの着込の樣なムク〳〵とした毛糸にコール天の半ズボンなんざァ鰹のイキを惡くするといふもンだ。」

彌次「魚河岸も愈々追拂はれるわけだね。何れ此跡へビルデングてな窓だらけのものが建つンだらう。」

北八「其の事だ、生命保險にブロカーに、緣の下で洋食が出來るとサ。」

彌次「イヨー日本橋を渡りまァす、繪で見る昔時の日本橋と來ると、きつと奴が槍を立つて片足を持上げてゐるが、今だつたら忽ち轢殺れちまふね。」

北八「ムダな氣を揉んだものだ……ねえ彌次さん僕等おぼえてまで此所に立場つてえ茶漬屋があつたッけね。」

彌次「ム、此の村井銀行の所さ、村井と云へば此の緣の下の洋食なんざァ、緣の下の方ぢやァ草分の方だらう。」

北八「緣の下の草分はい、、時に地口の傑作がありやす、よしかね、フライは村井の緣の下とは何うだい。」

彌次「古い尻取文句を地口つた處は買つてやるが、上の文句の尻から結んで來ると通じないぜ、剝身蛤ばかはしらからフライはなんざァ無理だらう。」

北八「そこをアクセントで聞かせる所が極意といふもんだよ。」

彌次「とんだ惡セントだ同じことなら剝身蛤ばかはしらはしらのフライは緣の下と云たいね。」

北八「はしらはフライにするより天麩羅にする方が旨いとさ。」

彌次「まァ食ふわけぢやないからどつちでもいゝや、天麩羅と云やァ白木の五階で天麩羅そばが出來るなんざァ文明は人間を意地汚なにするもンだね。」

北八「兎角世の中はくらひもの勝とは何うだい。」

彌次『はてね何のこつたい』

北八『イヤ解らないかい……さア實は僕にも少し解り憎いんだよ。』

彌次『止さないか莫迦々々しい。』

北八『オイ御覽よ〳〵彌次さん、相變らず此の四ッ角の眞ン中でお巡査さんが九字を切つてゐるぜ、當世の名所繪だと奴の代りに彼れを描くッてね、間違ッて轢殺されない樣にと彌次さんが心配しまア す。』

彌次『其の事だアハ、、、。』

お江戸日本橋七ッ立ち、初上り、高輪夜明て……なんといふ、悠乎とした時代でも、馬の目を拔くと云つたこゝらの通り、まして況んやの現時、いつまで電車の空いてゐる筈はなく、急ちの込合に兩人膝頭をグイ〳〵押れながら、其れでも北八の前の吊革に新造ッ子とあつて目尻を下け、車窓へよけてゐた首をネジ戻してだらしもなく、其の新造ッ子の鼻の穴を見上げれば、と北八の顏を見おろして、イケ好かないと云つた樣についッと吊革を持替へて横を向いちまふ、北八口惜しさうに口のうちで、

北八『ヘン女の癖に鼻毛を伸ばしていやアがる。』

と聞こえない樣に云つたからいゝ。

彌次『オイ〳〵何をぶつ〳〵言つてゐるンだい、オツト中將湯の前へ來たぜ、餘所ながら挨拶をしていかう』

北八『ヘエー不思議な所に彌次さん借があるンだね』

彌次『えッ人聞きの惡い、中將湯だの實母散だのは他人とは思へないンだよ』

北八『はアてね、君が藥の行商をしたなんざア知らなかつたよ』

彌次『一々碌な言ア言はねえ、話の通じない男だぜ、女で食ふのは中將湯に僕に實母散だといふことさ。』

彌次『ウブいゝ氣なもんだ、女の鼻毛をよむ事も知らねえ癖によ』

此の込合でもヘラズ口は休まず、先祖の彌次北から幾代の孫ぶり、傳來の瓢輕を發揮して、凡そ見てゆく軒並の一々、車窓から吹込む埃りから、是れ砂はちと洒落になるのが家の藝だと得意なり。

北八『オヤ芝口へ來た、ねえ北クン此所の萩の餅やも江戸時代からの名物だか、彼の硝子戸の貼札を御覽、コいア洋菓子ありとしてあるぜ』

北八『成程ね、萩の餅が木鉢の中で揑られながら嘆ずらくさ、新しい仲間が入つて來たンで横文字を知らないと交際が出來ないとね』

彌次『ウフ、こいつァ秀逸だ』

北八『そりやァいゝがね彌次さん、振出しから斯樣乘つて脚に樂をさせてゐるとヨタリながらもこくいめに歩いた先祖の彌次北に濟まない樣な氣もするね。』

彌次『などと義理を知つてゐるなら、どこからでも降りて歩くことだが、芝源助町だの、金杉、薩摩原なんてえ所を歩いてみた所で、御贔屓が喜びもしまい、本家の道中記だつて高輪邊りから書き出してあるぜ。』

北八『すると彼の輩もこゝらは電車で通つたのかい。』

彌次『ウンニヤ市街自動車へ鳥渡一丁場乘つたンだらう』

北八『何故々々』

彌次『だつて作者は一區と云ふからね、ァハ、、、、、。』

北八『違えねえウフ、、、、』

何が違えねえのか、とても判じのつかないヨタの限り、然し電車の中だけに、音調はまさかに低めてゐるが、唯時々笑ひ聲を頓狂に刎ねかして乘合をびつくりさせる

彌次『オヤもう高輪へ來たぜ、右は高輪泉岳寺ッ、四十七士の墓所ッ……』

北八『オイ〳〵彌次さん年甲斐もない聲を出しなさんなよ』

彌次『高輪と來ると道中氣分に入るンで鳥渡調子づいたね、だが此の歌は却々よく出來てゐるよ

北八『チョッ鐵道唱歌に感心してりやァ世話ァない、近來は子供でもそんなものは唱はないよ、少し新しい空氣を吸はしたいなァ。』

彌次『新しい方だつて心得てゐるさ、つまり歌右衛門が熱にうかされた樣な含み聲を張上げて、フヒエーフーフヒフヒフ――てなことを言やいゝンだろ』

北八『ブッ、オイ〳〵オイッてば彌次さん、電車の中だよ』

彌次『アハ、左樣々々。』

北八『冗戯ぢやァない顏から火が出らァ』

うか〳〵と調子づいた彌次さんの脫線に、流石の北クン面喰つて、噴笑ながら汗を吹く、こゝへ來て再び乘合が空いただけ、かへつて他の乘客がびつくり呆きれて、

○『氣が變なんぢやァないのかい彼の人は』

△『さあ、正氣のとこもある樣だがね』
などと、無氣味さうにヂロ〳〵視ながら囁やいてゐる。
北八『靜かにしようぜ彌次さん御乘合の評判が惡さうだぜ』
彌次『あいよ〳〵。』
北八『どうぞ皆さん御安心下さい、漸く少し鎭まりました。』
と、眞顏で乘合へ挨拶をする、彌次さん忌々しがるまい事か、
彌次『ヤイ〳〵莫迦にするないッ、遂々氣狂ひにして了やァがる、這麼わけのわかつた氣狂ひが何處にあるッ。』
北八『左樣さ、氣狂ひにしちやァわけのわかつた方だテ』
彌次『勝手にしやがれッ。』
時に又見物曰く、
○『オヤ〳〵又やつてるますな』
△『春先はよく起る病ひですよ』
と來た、遂々すつかり氣狂ひ扱ひ、そこで彌次さん昔時なら矢立といふ所を、インキの出澁る

萬年筆を振りながら首をひねつて、手帳の端へ、
彌次『時に北クン斯樣もあらうかと』
と記した所を見れば、
氣狂ひと見られて何と泉岳寺
とあるに、北クン受けて
聲高輪に恥を流して
と下を駄句る、そこで作者も古い調子で、斯く口ずさみ打興ずるうち、いつか八つ山の終點へ着く、と書く。
蒲田、花月園、大師邊り、咲いたとある梅のたよりに、折柄の日和はよし、八ッ山の終點から市電ほつたい、京濱電車のつながりへ、ぞろ〳〵と人の繰込むこと、夫れを横眼に兩人品川の宿へ入る。
北八『どうだい彌次さん、彼の人の出ることは。』
彌次『何だか知らないが目の敵の樣に人が出るンだね』
北八『大師で危を除けて、穴守で商賣繁昌を祈つて、蒲田で梅を見て、花月園で福引を當てよ

うといふ、遊びと慾のふたり連れを廻遊切符一枚で片附ようッてンだからね』

彌次『なァる程ね、廻遊い所へ手が屆くッて遊び方といふものだ。』

北八『アハ、込合つた洒落をいふぜ、時に久し振りで此の宿へ入つて來たが、取つきに奥から海を望んだ茶漬屋を並べて、兩側に歴然と貸座敷の存在してゐる所が懐かしいね』

彌次『ウム四宿のうちでも、のつけの指に折る所だけに昔型を殘して置くのかも知れないが、現時風紀のおきびしい時代に、堅氣の商店が繁昌してゐる間に變り色の暖簾から、時々あやしげな長襦袢に羽織を引つかけたのが顔を出してゐるなんざァあんまりお爲にならなからうテ』

北八『などと堅いことをいふ御人體ぢやないや、顔を出してゐりやァ衣紋を造るやつだらう、オツトツトそらそらそこの暖簾口から蒼白くふくれたのが、此方を覗いてゐるぜ』

彌次『どれ〳〵』

と彌次さん振顧る背後を、肥桶を積んだ朝鮮牛の車がスレ〳〵にゆく。

彌次『えッ臭え、危ねえッ』

とよろけながら鼻を押へれば、北クン嬉しがつて、

北八『宿場氣分々々々々、女ッ子を見ようとして、肥桶の車にぶつかり損なつたのはいゝァハ、ハ、、、』

彌次『笑ひなさんな、それよりは女ッ子は何うしたい』

北八『此の天日にいつまで覗いてゐるものか、お巡査さんに叱られるとよ。』

彌次『ヤレ〳〵此方は見たくもないが、折角好い男を見損なつた彼方が氣の毒だ。』

北八『左樣思つてゐるといゝ心持だね、品川心中てえ落語のモデルは、彌次さん君だつたのかい』

彌次『莫迦にするなよ品川へ來ると思ひ出すなァ、久しい前の事だつたが、島崎で角力と喧嘩をした事があつたつけ』

北八『ヘエー知らなかつたね、そんな事があつたかい』

彌次『取的の奴等が甚句なんぞ踊りやァがつて此方の襖を倒したから合點しねえ、飛込んで滅呵を切つたン

日本橋から川崎まで

だが、それから騒ぎが大きくなつたね』

北八『まてよ聞いた樣な話だぜ』

彌次『左樣よ此話を知らなきやァ唐變木だ、島崎の返しが八ッ山の暗闘と來て、大詰は神明の大立廻りさ。』

北八『えッうつかり引懸つちやッた忌々しい、珍らしさうにめ組の喧嘩の筋書を聞かせられりやァ世話はァねえ』

彌次『オット其の島崎の前へ來たよ、彼の時の店つきから見ると大分變つたね。』

北八『まだやつてやァがる、もうわかつたよ。』

彌次『そこへゆくと君なんざァ居殘佐平治の方で品川を心得てゐるのだらう』

北八『へッ何の彼ンのと品川で知つてるだけの通をさらけ出したもんだ、もう種は夫れッきりかい、迚も十五日は持た無え眞打だ……然し戯談は戯談としてねえ彌次さん、流石に御時節で斯樣して歩いてみると貸座敷の數が減つたね。』

彌次『ウム左樣あるべき筈だて、夫れにしても島崎、太田屋、相模屋の土藏の壁の殘つてゐるのが生命だよ、夫れがなくなりやァ品川も只の町といふものだ。

北八『えゝオイ彌次さん、僕ァ先刻から氣にしてゐるんだが、此の通りの菓子屋ちやァどの店でも爭ふ樣にシュークリームを賣つてゐるが、何ういふわけなんだらうね』

彌次『別に何ういふわけでもなからう、夫れとも此の頃品川の海でシュークリームが漁れるのかしら』

北八『ウフ、、莫迦アいふぜ。』

彌次『オヤもう南の橋へ來た、此の橋向ふてえのが少し下司だが、道樂飽きの輩の遊ぶとこだッたのさ。』

北八『へッ飽きないうちからこゝらへばかり來てゐたのだらう……だが折角なから此方へ來るとく々貸座敷の影もなくなつちやッてゐるね。』

彌次『貸座敷はなくなつたが、此方でも菓子店でシュークリームを賣つてゐるだらう』

北八『變にものが解らなくなつて來たね、貸座敷がなゝなつて矢鱈にシュークリームを賣つてゐると……何とか洒落になるまいか』

彌次『ウームとお持ちよ、貸座敷の貸を菓子に洒じゃせりやァ何とか洒落られない事もないが、うつかりシュークリームを揑返すと始末がつかないからなァ』

北八『洒落がべタ〳〵するッてねァハ、、、、』

莫迦を言ひ〳〵振出しからころがした賽の目の一と出た品川ももう宿端れ、妙國寺をたづねて縁起を問ふよりも、故桃中軒の銅像を覗いて浪花節を唸り、千體荒神の門前をぞんざいな挨拶で通り越し、海晏寺では寄席藝の當振りを眞似、漸く東側の家並に路次から船の往來、沖の色、海苔そだなどの覗かれるに、すつかり都會からぬけた氣分、さなきだにノホンノホンの、そいつが更にサァこれからと來た道中の氣散じ振り、

北八『時に何うするぇ彌次さん、これでざつと品川といふ一驛は片附いたんだが、こゝらで鳥渡乘りは何うだい。』

彌次『左樣さね、歩いてみりやァ朱引外だけに鈴ヶ森で野外劇なんてぇお慰みも出來るが、先づ川崎まで乘る事にしようか。』

北八『川崎と云へば、そこは鮫洲の川崎屋だが晝食は何うしたもんで……。』

彌次『ウンと寢坊した遲立ちだが、品川まで電車で來て宿を通りぬけたばかりだ、時間にしたら振出しから未だ漸つと二時間しか經つてゐやァしない、些早からうよ』

北八『だがね太い柱を磨き込んだガッシリとした店つきで、土間の踏込みに腰障子てぇ構へは有難いぢやァないか、昔時の道中だと此所まで仲よしが送つて來て、「オウ水變りを氣をつけなよッ」てな事を言つて鼻をつまらせたもんだらう、こゝで一杯やつて其の時代を懷かしみたいな』

彌次『それが偲べりやァい、がね、當時は此家は品川藝者の出場所ッてンだから、嫌に俗滿で嬉しくないのさ、夫れよりモウ一伸次ぎの川崎で晝食とやらかさう』

北八『川崎なら萬年屋か、夫れも道中味があるね、だが彌次さん現今でも萬年屋てぇ家があるのかえ』

彌次『さァそいつァわからないが、道中記にやァ附け落せない家だ、名殘ぐらゐはあるだらうよ』

北八『もし夫れが衰へずにゐりやァかへつて時代と共に發展して、川崎町民の宴會場所ッてな堂堂たるものになつてゐるかも知れないぜ。』

彌次『何とも知れないね、もし左樣だつたら豪奢な晝食をきめる事さ』

北八『そんなら何も此所で品川藝者にお酌でもさせた方がオッだらう、一驛違へば夫れだけ藝者も泥臭くなつて來るといふものだ』

彌次『道中氣分ッてのは泥臭い方にあるんだよ、まァ第一萬年屋の存在も判らないンだ、正直に聞きなさんな、豪奢をきめる樣な顏をして、實は萬年屋の立派になつてゐない事を密かに祈つて

るるンだ、時節柄道中は節約しませうッ』

北八『へッいふ事だけ景氣をつけませうッか、いやだ、いやだ……オット乘るなら此の横丁を入つて鮫洲の停留所から乘らう』

彌次『イヨー音がする電車が來たやうだ、急がうぜ』

と駈出して、兩人セイ〳〵言ひながら停留所へ入る途端、忌に氣短かな警笛を鳴らして京濱の性急電車、止るが早いか、出るが速いかといふ樣に失禮氣もなく去つちまふ

北八『ナヨッ何てえ愛嬌の無い電車だらう』

彌次『ヤーイおぼえてゐやァがれッ』

と兩人線路の眞ン中で見得を切つて、電車の後を睨めれは、旗振のをぢさん番小屋から首を出し、

旗振『コラオイッ。』

と來た、そこで彌次さんの吃きがいゝ、

彌次『へッ自分の線路の樣な顏をしてゐやァがる』

莫迦氣た文句宜しくある所へ次ぎの電車が來た、あたふた乘込んで、

北八『彌次さんやつぱり乘つた方が歩くより疾いね』

と、兎角やつぱり乘るのが便利、さて川崎へ着いて萬年屋を訊ねれば、

×『もうとうになくなりましたよ』

と呆氣ないこと、そこでそこらの中食に腹をこしらへ、宿端れまでまぜッ返して、又乘る、饒舌る、さりとは口の廻り壽語六、それから何所まで伸したやら。

實は作者が大師詣での道すがら、見かけた二人の瓢輕男を持前のヨタに捏返して、振出しの日本橋から賽ころの二ッ三つ斯樣にころがしてみたばかり。

旅は道連　戸塚の松並木

仲よしが氣散じな旅行する事を、一言に彌次喜多で行かうぜなどといふくらゐ、即ち遊山旅の代名詞になつてゐるが。茲に京橋邊りの會社員にして、青木クンに黒田クンといふ比較的悠然としたあたまの持主、其のカフエテリヤの晝食にホークをかまへて、

青木『ねえ黒さん、明日の日曜を利用して、眞の彌次喜多氣分を味はふと思ふンだが、君贊成しないか。』

黒田『贊成しないかなんて、かだのとてだのッてそんな仲ぢやァないから、無論盲從するさ』

青木『そんな仲ぢやァなくッて盲從はお言葉だね、尤も君は當世男だ、平常重役に盲從してゐる癖があるからなァハ、、、。』

黒田『えッ止せよ、身に沁る言をいふなよ。』

青木『せまじきものは宮仕へかね、實はそりやァお互ひの事だが……つまり其樣した平常の息拔きに、現代離れのした一日を送つてみようといふ趣向なのさ』

黒田『だがね青さん、日を重ねる旅行なら知らず、發車の鈴に追込まれる樣なたッた一日の旅行ぢやァ現代に離れ樣がないぢやァないか』

青木『そこが趣向だよ。つまり東海道五十三次を一割ばかり歩かうといふのだ一日上手に歩いたら五驛ぐらゐは往けると思ふのさ、そりや全然歩くとなると平常銀ブラの格ぢやァ無理かも知れないから、少しは交通の便も借りるとして歩けるだけ驛路を拾つて、彌次喜多の草鞋の跡を踏むでみようといふのだ、昔時の膝栗毛を一割だけ試みやうッてのさ』

と忽ち相談は決つて其の翌朝、あそぶとなると滅法早起き、御約束通り日本橋から振り出して汽車と電車とよりがらみの東海道をチョイと乘つたり、歩いたり、やがて神奈川へ着く。

神奈川驛を出ると、横濱街道を突斷つた、恰度驛の改札口と相對ひの東側に、時代かぶれのしない舗つきで、本家龜の子煎餅、若菜屋と染た紺の抽暖簾が目に入る。

黒田『青さん御覽、現時に有難い舗つきぢやァないか、神奈川名物龜の子煎餅といふのはこれだね。』

青木『こいつァ一ッ買つてみよう』

と兩人店へ飛込んで、

青木『お煎餅を下さい』
上さん『ハイおいくら』
青木『黒さんいくら買はふ』
黒田『左様さ馬力を頼んで積むのも厄介だから三十錢ばかりにして置くさ』
青木『アハヽ其れぢやア見本に三十錢だけ貰ひませう』
上さん『オホヽヽヽ。』
上さん笑ひながら時代のついた桐の抽出しから煎餅を出して袋へ入れ、
上さん『お待遠さま、有難う存じます』
と人柄な調子、青さん受取りながら、
青木『ねえお上さん、鳥渡訊きますが、こゝから程ケ谷の方へ出るには何う行きますね。』
と訊けば、上さん汽車なら一飛びの丁場を歩くのは氣が知れないと云つた顔つきで、
上さん『お歩きなさるンですか』
と訊き直す。
青木『イヤ實は、東海道を歩いて京都へ上る者、俺は栃面屋彌次郎兵衛、これなるは北八と言ひます』
と青さん眞面目くさつて言へば、上さん思はずプツと噴笑しながら、
上さん『まアお樂しみでいらッしやいますわね』
と莫迦々々しさうに世辭を云つて、
上さん『程ケ谷へは手前共の前を右へいらッしつて、左りへ線路の上の鐵の橋を御渡りなすつて眞直ぐいらッしやれば宜しいのでございます。夫れが東海道の通りで……』
と敎へて呉れる。
黒田『イヤ大きに有難う、其の順で眞アー直ぐに往つたら、今日中に京都へ着きませうか』
青木『えッ黒さんムダをまぜちやア不可ない、向ふ脛へ特急と書いて駈出したッて左様はいかないよアハヽヽイヤ大きにお邪魔』
黒田『其のうちに馬力で買ひに來ます、ハイ左様なら』
と愈々油がのつて彌次喜多振りを發揮しながら、神奈川驛を見おろした線路の上の鐵の橋を渡つて、東海道をテクリ始める、然しこゝから程ケ谷までは、横濱の發展に市の部とあり、昔時汐入の見晴し　神奈川の臺の眺めも、所謂金港のゴチヤ〳〵とした藁の込合、自然此の街通筋も軒

續きに、先刻の六郷邊りよりはグット開けて驛路ッ氣などはなくなつちまつた。

黒田『何うだい青さんスッカリ開けちやつたものだね』

青木『ほんたうだな、何しろ横濱市の内だからね……オヤ追分といふ所へ來たよ』

黒田『ウムもう程ケ谷のとつきだね、何でも昔時はここらを帷子の里と言つたと聞いてゐる』

青木『今でも慥か町名となつてゐる筈だ。時に黒さん、君は帷子といふ名の由來を知つてゐるかい。』

黒田『嫌だよ亦ヨタを飛しちやァ。』

青木『イヤヨタぢやァないのさ、知らなきやァ知つて置く事だ、昔時誰れだッたか何でもエデイ武士だがね、關東へ下向の途次、こゝを通つて、里人に帷子といふ名の由來を尋ねたンだとさ、すると答へて曰く、此所は海邊にありながら浦がないからだと……』

黒田『ウブッ眞當かい夫れは、ウラがないから帷子なんざァあんまり甘過ぎるね。』

青木『イヤ嘘ぢやァない慥か名所圖繪に出てたンだよ』

黒田『昔時は悠然してゐたンだね、此の間日本橋の西川で、防寒用袷の蚊帳ッてのを見たが……現今だと帷子だつてウラがないとばかりは言へないよ』

青木『そりや左樣だ、見る通り現今ぢやァ帷子の里も軒續きの上に、裏から裏へと家が二重にも三重にも建つてゐるからね』

黒田『帷子の三枚重ねはいゝァハ、、、』

くだらない事を言ひながら、神奈川の龜の子煎餅を嚙り〳〵ゆく程に、やがて帷子川の邊りへ出る、朽た板橋の帷子橋、夫れは名所圖繪にもある所、下ゆく流れの色だけは昔時もやはり斯樣だらう。橋も古々と朽たまゝの、架替へてペンキでも塗られぬうちは先づ先づ風情が偲ばれる

青木『漸くこゝらで氣分が出るね。』

黒田『欄干で一服やらうよ……神奈川からこゝまでどのくらゐあるだらう』

青木『さァ、一里あるかなしだね』

黒田『ウム其麼ものだらうか、やつぱり平常自動車でばかしお出ましになつてゐると、くたびれるね』

青木『漸く氣分の出た所で弱い音を吹いちやァ不可ない、程ケ谷驛はモウ直きだらう』

黒田『夫れぢやァ程ケ谷から亦一丁場乘せて貰ひたいな、慥か程ケ谷と戸塚の間は汽車でゆくとトンネルがある所だから、歩いちやァ山坂で些へコタレるよ。』

青木『ヘコタレて戸塚で日一杯なんぞは、少し呆氣ないから、夫れぢやァ戸塚まで乘つて、夫れから先をまた歩く事にしよう』

黒田『其の事〳〵、其の事袷に帷子の里か』

青木『乘るとなると元氣が出るやうぢや、たうてい暇があつても、膝栗毛の本文通りの實行は出來ない』

黒田『やつぱり寢臺でムニャ〳〵言つてゐるうちに京都へ着くといふ方がいゝね』

青木『チョッ東海道を一里歩いて考へちまふなんざァ情けな過ぎるなァ』

喧嘩面で電車にブラ下り、市街自動車の飛上りで天窓を天井へブッつけても、歩くに無精な東京者の、偶々健氣に斯樣した旅に出掛ても、停車場を見かけると直きに乘りたくなつちまふ、

黒田『ねえ青さん歩くのも程ケ谷にして、さらば乘るかね』

青木『其代り今度降りたら戸塚まへても歩かせるよ』

と駄洒落ながら、恰度來た横須賀行へ乘込んで、歩けば名代の信濃坂、漸く景色のよい所を、トンネルの暗にゴト〳〵　通り越せば、程もなく、

『戸塚々々ッ。』

と、汽車は着く。

黒田『速いなァ』

と黒さん莫迦々々しくも感心して、

黒田『這麼速くつて、脚のくたびれないものゝある世の中に、たとへ一割でも歩かうなどは惡い洒落だ。』

と言へば、青さん忌々しさうに、

青木『オイ〳〵亦歩きたくない樣な前置きをいふよ、さッさと降りて歩いた〳〵』

と戸塚驛を出る。

黒田『なァに覺悟を決めれば何程でも歩くさ、殊に戸塚と云へば鳥渡想出のある所だからね』

青木『フーム戸塚に想出があるとは初耳だ……平常汽車ぢやァ通るものゝ、普通では降りてみる所ぢやないが……』

黒田『左樣さ普通ぢやあんまり用のない所だがね、僕は鎌倉からお輕坊といふ女を伴れて顚かゝがら通つた事があるのさ、さァ彼の時は隨分歩いたつけ、何しろ女の故郷の山崎まで行つたンだからね』

青木『えッうつかり眞面目に引懸つちやつた、會社の創立記念の園遊會に君の勘平は受けたものだッけな』

黒田『アハヽ、彼れは我ながら悪だッたよ、然し何しろ、「落人」の臺詞に、此處は戸塚の山中石高道でさぞや其方、足は痛みはせぬかといふから、お輕勘平は此處を通つたに違ひないね』

青木『淨瑠璃の舊跡として嬉しがるかい、鷺坂伴内などは立枠模樣の四天を着たのを大勢連れてヤレコイヤイッとこゝらを駈て行つたのだらう』

黒田『現今ならば戸塚町聯合賣出しの廣告屋と間違へられるよ』

青木『大きにアハヽヽ』

莫迦を言ひながら戸塚驛前の通りを鍵の手に突當つて街道筋へ出る、流石に道中も此所まで伸すと、家並の工合も、衆の往來も、オットリ閑として、現代を離れようとする今日の企てに、自然から適つて來る。

黒田『オイ〳〵青さん此所にも名物俵煎餅といふ店があるよ』

青木『成程……神奈川の龜の子煎餅の樣に聞こえてはゐないが、名物とあれば買つてみやうぢやないか。』

黒田『夫れにも及ぶまい、何れ似たものだらう』

青木『へえ、煎餅は煮たものかね。』

黒田『えッ悪い聞き樣だ、似たものといふのは同じものだらうといふ事だよ』

青木『すると龜の子煎餅も煮たものだといふ事になるね』

黒田『焦れッたい、つまらない言ひ懸りをいふよ……まアいゝから買ふなら買ひ給へな。』

青木『兎に角買つてみよう……ハイお煎餅をお呉れ、廿錢ばかり。』

婆さん『へい〳〵。』

青木『時にお婆さん、君の所の煎餅は煮たのかい。』

と青さん巫山戯て訊けば、煎餅店の婆さん變な顏をして、

婆さん『へゝへッ。』

と笑ひながら、

婆さん『みんな燒いたのでございます』

といふ、青さん黒さんを振顧つて、

青木『オイ〳〵黒なん煎餅は煮たんぢやない燒いたのだとさ』

とどなつてゐる、黒さん流石にあんまり莫迦々々しいと云つた顔で、

黒田『解つたよ〳〵』

殘つてゐる龜の子煎餅と、今買つた俵煎餅を嚙分ながら、やがて戸塚の宿端れ、途見ると、恰度家並の盡きた兩側に、參觀交代の大名が戸塚泊りの昔時を偲ぶ見附跡の石崖に松と楓が植分けてある。

青木『こいつァ珍らしいね』

黒田『ウム慥か上りには此宿が初の泊りで、下りには此宿一晩で明日は江戸へ着くといふのだらう、何しても德川期の名殘りのあるのは懷かしいね』

青木『惜しい事をしたベストを持つて來ればよかッたなァ。』

黒田『ウフ、持つて來ないからいゝんだよ、これを折角バチリッと撮つた所で、歸つて現像すると見附の石崖が雲の如く煙の如くなどは心細いよ』

黒田『莫迦にしちやゝ不可ない、近頃腕を上げたのさ』

黒田『一ト頃は隨分君の家の奥方に愚痴を聞かされたものだよ。曰くさ、モデルになる爲に嫁に來たのはございません……と』

青木『つまらない棚卸しをするなよ、アハ、、、、』

見附を後にすると左右は野邊の見晴しで、ゆく手に小山の繁みを割つた。大きな坂が見上げられる。

黒田『オヤ〳〵坂だよ、青さん、坂と來ると堪へるなァ。』

青木『また始めたよ、少し喋舌る方を脚の方へ融通するといゝんだ』

黒田『夫れは大學病院でも考へたとさ』

青木『何しても景氣よく登らうよ、どうせ融通が出來ないのなら、饒舌る方を發展させて唄でも謳ひながら登るンだね。』

黒田『唄なら何でも心得てゐるからな、左樣さ坂へ登るンぢやァ、長持唄か、馬子唄だ先づ不常用ひなら、箱根八里はよウ馬でも越すがよウ……か。』

青木『シャンコ〳〵とやつてえ來ウる。』

と往來のまばらなのに、彌々人間のバネを脱し、莫迦な喧ぎで登つてゆくと、坂上から降りて來る赤ン坊を脊負つて男の兒の手を引いた在方らしい上さん、魂消た顔つきでキョロ〳〵視てゐたが、

上さん『見なよ〳〵金坊やをかしげなをぢさんが來たぞ。』

と男の兒に云へば、金坊なる涕ッ垂らし小僧、ゲラゲラ笑ひながら、

小僧『ワアイ〳〵。』

と囃し立てる。

上さん『こらよ金坊、其麼事をいふぢやないおつかねえぞ。』

と、金坊叱られて、ビックリしてゐる所へ青さん近寄つて行つたので、猫ビックリしてベソをかく。

青木『いゝよ〳〵坊や、食ひつきやアしないよ、アハヽハヽ好い兒だ〳〵。』

と云ひながら、青さん袂から煎餅袋を取出して、

青木『そら〳〵、これが神奈川の龜の子煎餅、こつちが戸塚の俵煎餅だ、喰べな〳〵。』

と二三枚づゝ出してやる。

上さん『あれま、有難うごぜえますよ、これよお低頭するだア。』

と上さんがヒョコ〳〵頭を下げれば、小僧も一緒に涕を横にこすりながらヒョコ〳〵する。

青木『時にお上さん、此の坂の名は何といふのですね。』

上さん『此の坂ですかね、これは一番坂と云ひますだが、此の先にもう一ッありますのが二番坂と云ひますだ。』

青木『イヤ左樣ですかい、有難う。』

と別れて、

黑田『黑さん〳〵、坂の名を訊いて來たよ、一番坂に二番坂だとさ。』

青木『子供に煎餅をやつて何を云つてゐるのかと思つた昔時馴染の女でもあるのか知らと……。』

青木『オイ〳〵止して呉たまへ、少し怒るよ。』

黑田『怒る事はなからう、東海道は戸塚の一番坂に於て昔馴染の女に會ふなどは、烏渡人情講談にでもありさうぢやないか、彼の兒が君のかたみでね。』

青木『えッもういゝよ、くだらない陳腐な創作をするなよ。』

青木『オットまた坂へ來た、これが一番坂かい一番坂に二番坂なんざァ智恵の無い名だね。』

黒田『智恵がないッたつて僕の故ぢやァない。』

黒田『あれが昔剛染の女とすればいつかはめぐり逢坂のと來るだらうウフ、、。』

一二番坂を登り切るとズッと見渡す松並木の其の松の幹の太さ、脊丈の高さ、幾百年の齢に見る街道筋のうつり變りを語りたけにも想はれる、左りに連なる小山の起伏、右は野面の盡きる所に薄墨の山、雲の帶して富士ケ峰が、西へ廻つた陽を斜めに、何といふ色ざしか、とても、繪ではみられぬ美しさだ。

黒田『青さん、何といふ好い景色だらう。斯樣なると院展だの帝展だのッて、何うあがいても繪ぢやァ出ないね、まつたくのび〳〵するなあ。』

青木『だからやつぱり歩いてはみるものだ、廣重の相場が一ト頃莫迦々々しく騰つた事があつたが、此の富士の色などは、描けるものぢやァないよ、何しても豫想以上の好い景色だ、街道の松並木などといふものは、何處にでもあるのだが、此の松の一々にも風情があるぢやァないか、見てゆくうちに富士のあしらひを樣々に變へて見せるからね。』

黒田『まつたくだ、平常汽車で通る戸塚と藤澤の間なんざァ氣の止め樣もなかつたが、斯樣してみると遊山旅なら此の間は誰れにでも一度は歩かせてみたいね。』

青木『何うだい君、くたびれないかい。』

黒田『くたびれなんかどつかへ去つちやッたよ。』

スッカリ感心しきつて、暫時はヨタも飛ばさず、うつとりとした心持でゆく後方から、空の荷馬車を曳いた馬士が、手綱をゆるくッ

馬士『旦那方ァ何處まで行くだかね。』

と、見れば時代なナタ豆の煙管を横に咥へて吹かしながら、暢氣な調子で話かける、お誂への道中氣分。

青木『五十三次を一割だけ歩かうといふので、彌次郎兵衛喜多八此所へ差掛つたといふわけさ。』

馬士『そいつァ珍らしいだね。』

黒田『現時僕等の樣な瓢輕者はあんまり通るまいね。』

馬士『通らねえともなあ、汽車なんてえハアケダモノが迫走るだから、俺等毎日藤澤から横濱まで荷イ積むで往復してゐるだが、彌次喜多なんて衆に出會つた事ァねえさ、稀にハァ東京だの横濱だの、輩が通る時はオートバイなんて八釜しいものうブッ飛ばしやァがつて埃りべえ立て手に

負へねえでさァ。」

青木「して見ると僕等の樣なのが通ると並木の松も懷かしがるだらうね。」

馬士「さうだともよ、喜んで松の枝が動いてゐるだ。」

黑田「アハヽ、少し風が出て來た樣だな……そりやさうとねえ君、此街道に何か面白い話でもないかね。」

馬士「面白え話かね、さア……イヤあるだね、もう少し先へゆくと影取ッて所があるだが、そこに凄い話がありまさア。」

青木「フームンそいつァ聞きものだね、青さん一ッ聞かせて貰はふぢやないか。」

黑田「ウムいゝ土產になるね……一ッ聞かせて呉れたまへな。」

馬士「現時彌次喜多さんに出會ふなんてのも懷かしいだから、一ッ話すべえかね眞面目の話だよ笑つちやァ不可ねえだ。」

馬は溫和しくポクシャク〳〵。

馬士「これから一村越て其の先きの並木の所だがね、東ッ手の方の田圃の所にハァ昔時は影取の池てえのがあつてね、そこに恐しい大蛇が棲んでゐたでがさア。」

青木「はァてね。」

黑田「こりやァ話が大時代だ、フームン。」

馬士「影取ッてえのは、何でも其の大蛇が、此の街道をゆく旅人の影を見ると池の中から現はれて、並木の松へどたまァのつけて毒氣を吐つかけておッ殺すンだァ其れで影取ッて名ァ附いたンださうでがす。」

青木「成程凄いね、其れで現今でもそこを影取といふンですかい。」

馬士「現今でも字影取といふでさア。」

黑田「すると實說らしいね。」

馬士「ほんとうの事だともさ、ところでね、藤澤の宿に藤森長者ッてえ、えれい大盡ッこがあつてね、其の時分其の影取の池の所を買込んでハァ田畑ァ作るべえッて事になつての其れぢやァ大蛇ァ打殺さにやァなるめえてんで、恰度藤森長者の家へ旅の武士の泊り合はしたのを賴んで、池の中へ鐵砲さブッ放して貰つただ、するとハァうまく當つたゞか何うだかしんねえが、池の水が急かに荒波イ立つて雲が下つて來たかと思ふと、大蛇がグル〳〵廻りながら雲の中へ入ッちまつたゞ……何と凄いでがせうが。」

黒田『ウムウム大道具大仕懸だね。』

青木『そ、それから何うなつたンだい。』

馬士『そこでハア大蛇はもう天上したに違えねえッてンで、直ぐ人足ウ出して池を埋ちまつたンだがね、それからがおつかねえ話になるのさ、……旦那方、話賃に卷莨一本よばれべえかね。』

青木『イヤ旨い所で一息入れて、お客を焦らすね、卷莨なんざア何程でも上げるよ、さアさア。』

馬士『有難うがす、二本べえ貰はふかね。』

黒田『此方にもあるから青さん其の卷莨は其悉皆遣つちまいよ……其の代り、話の先をさッさと頼まア。』

馬士『するとね旦那方、おつかねえぢやねえか、其の影取の池をスッカリ埋ちまつた晩の事だよ藤森長者の屋敷へ一人の女ッ子が訪ねて來て、わしア影取に久しく暮してゐた者だが、居所が失なつたから泊て呉れろと涙ア溢して頼むンださうだ、此の時にやア藤森長者の家の者もみんなゾッとしたさうだが、斷るのも亦恐しかんべえ、そこでハア何しろ女の姿ぢやアあるしまあ〳〵泊らッしやいといふわけで、其の晩泊てやると其の次ぐ日にやア朝ア早、起き出して家中の用を獨りで片附る樣に何から何まで働くさうだ、そこでみんなも始めおつかなかつたのも漸々落着いて、其の女ッ子が調法になつたもんだから三日五日と經つ内ニハアまるで家の者と同ジ〳〵なつちまつたゞ……』

青木『左樣なると、話が凄くなくなるね』

黒田『夫れでモウ化けず仕舞かい』

馬士『何さ、夫れから別に化はしなかッたのださうだが不思議な事は其の女ッ子が物を食ふ事がえれいンださうだ。始めの内は左樣でもなかッたゞが、漸々居馴るにしたがつて、食ふの食はねえのぢやアねえ、食つて食つて食らひぬくだ。遂々藤森長者の身代を半分も食らひ倒して了つたてえからね』

青木『成程、食つて恨みを晴らしたといふわけだね』

黒田『夫れで結局何うなつたのだい』

木木『つまり藤森長者の身代を半分、食ひ倒して了つたさうだ。其の先は何うなつたか話はハア夫れだけさ』

其の影取の池の邊りを通り。がら、面白い馬士の話上手、盡きない興を藤澤の宿へ入つたのが

恰度其の日の日一杯、先づはこれで五十三次の一割分、歸りは藤沢から東京驛へたッた二時間がとこゴットン〳〵。

横濱名所　弘明寺　井土ケ谷

一

喜多『ねえ君、彌次さんの前だが、先祖の柝面屋の兄弟分は東海道で賣出したので、夫れから隨分とそつちこちフザケた道中をして歩いた樣たが所變れば品變るぢやァない、時代變れば土地變るで、今日思つきの横濱道中なんざァ、先祖の夢にも知らなかッた所だね』

彌次『左樣さ、名所圖繪を見ても、芒新田横濱村と來て、其圖柄を御覽、松林の所々に岩をあしらつた海の見晴し、今日は同じ横濱でも行くのが臆劫なくらひの本牧の十二天などの方が巾を利かして海岸一帶を代表してるンだからね』

喜多『芒を刈込んで江戸が生れて東京となつた長の年月から考へると、横濱の開け方なんざァ早いものだね、家の阿母が新造ッ子の時分が恰度異人館の出來始めで、緣故を求めて見物に出掛たものだとさ、阿母が一ッ話によくするがね、異人が欠伸をしたのを見て喰ひつかれるのだと思つて逃出したもんだとさァハ、、、、、』

彌次『ウフ、、、異人は日本人の生血を吸ふと心得てゐた時代だからね、まだ汽車ができずに結へ草履でテクッたやつだらう』

喜多『其後に漸つと汽車が出來たンだね、イヤ汽車とは言はなかッたよ、陸蒸氣と言つたもンだ』

彌次『左樣々々僕等子心の耳に殘つてゐるね。然し想へば其時代の人間である君の家の阿母が今日猶洒呆々々と婆婆塞げをしてゐるなどは剛情なもんさね』

喜多『オイ〳〵人の阿母だと思つてぞんざいに扱ひなさんな「阿母は勿體ないがだましよい」ッて惡友として札附の君なんざァ共に隨分とだましたものだぜ』

彌次『と言はれりやァ面目ない樣な見はするがね、僕等の道樂の年貢を納め小口とみえて、朱引内ぢやアモテない樣な事になつて來てみると、手傳つて君の阿母をだました御盛ん時代の事なんざァ忘れちまつてゐるからね、無論だまされだ阿母の方だつて忘れてゐるだらう』

喜多『だましはしたが、朝歸りに日本堤のきんつばを阿母には買つて歸るのを忘れなかつた程、元來僕は孝行者だつたンだからね、僕の事なんざァ忘れてゐるさ、だが君の事は今でもあんまりよくは思つてゐない樣だよ、今日も出掛に左樣言つてゐたからね』

彌次『何だッて……』

喜多『お伴れが惡いからお氣を着けよッと』

彌次『勝手にしやァがれ、喜多八の伴れに彌次郎兵衛が何で惡いンだい、彌次喜多と言やァ道中どこでも通り者だ、チト先祖の道中記でも讀んで聞かせろよ』

喜多『聞かせないから未だいンだ、泊り〳〵の旅籠屋でばか〳〵しい女出入だの、道中でヘンな痰呵を切つて失敗ばかりしてゐたなどは、阿母の安心する筋ぢやァないや、夫れよりはねえ彌次さん、歸りに龜樂煎餅でも買つて土產に屆ける事さ、左樣すりやァ阿母は口をモグ〳〵やりながら彌次さんも流石に年齡だね、以前の樣ぢやなくなつたね……と來る事請合だ』

彌次『ヘッ有難い仕合はせだ、お伴が惡いまで言はれて伴の代りに上產を買つて歸りやァ世話アない』

喜多『其れで僕はふところ手で歸るなんざァいゝ都合だ。』

彌次『御免蒙らう莫迦々々しい、僕の阿母は道樂最中に苦勞死にをさせたから、今日想ひ出すといさゝかベソをかく一件で、もし生きてゐたら龜樂煎餅の一枚でもモグ〳〵やらせたい氣になるかも知れないが、土臺伴の質のよくないのを棚に上げて僕ばかりを惡友扱ひをして、然も死ぬの

を忘れてゐる樣な君の阿母に、今更オベッカル氣はないね。』

喜多『だがね、そこだよ、さりとても石に布團は被せられずサ、お互ひに斯樣して彌次喜多の名跡を勝手に襲いで兄弟分になつてゐる限りは、僕の阿母はつまり君の阿母といふものだ、死んた君の阿母を想ひ出したら其のつもりで僕の阿母に土產でも買つてくれるのが君の罪ほろぼしなり心ゆかせといふものだよ』

彌次『都合のいゝ事はかり並べるなよ、土產の一つも貰ひたければ貰ひたい樣に、君の阿母だつて左樣ぢやァないか、件れが惡いなんて憎まれ口をいふことはなからうぜ』

喜多『夫れが老人の癖なんだよ、別にいふ氣でいふンぢやァない、うつかり言つたものなンだよつまり平常腹の中にあるからだねえ』

彌次『えッ宜い加減にしろッ、誰れが土產なぞを買つてやるものか』

喜多『あゝ、僅かな事で君はいつまでも惡友扱ひをされるのかい、えゝオイ彌次さん罪ほろぼしとか心ゆかせとかいふものゝ、實を言へば未だを互ひに、斯樣して朱引外へ出て來りやァ、鳥渡武士の戰場といふやつで、家を忘れ身を忘れッてえ氣分にならないといふわけぢやァないからねやつぱり阿母存生の限りは共にごまかして置いて貰ふ必要があるのさ』

彌次『何の彼のと土產を買はせる魂膽をしやァがる、惡い伴れとは此方でいふ事だ』

喜多『と言つた所で、結局買ふ風ぢやァない。』

彌次『左樣解つてるなら、初めッからヘンな文句を言はねえがいゝ、第一たとへ一日だつて氣散じの道中をしようといふ矢先に、阿母を引張出して問題にする事はなからう』

喜多『ウムン何うして這麼に阿母が問題になつて來たのだらう、お待よ……家の阿母が異人の欠伸をしたのを見て、喰ひつかれるのだと思つて逃出した……といふのが始めだつたね』

彌次『左樣だ、其時代の人間の君の家の阿母の婆婆塞げ……てえな所から次第に阿母が問題になつて來たンだが、考へてみれば何も問題にする程の代物ぢやァないや、所謂チン猫婆ァといふだけのものだからね』

喜多『どうも口汚ないな、もう少し口綺麗に言つて貰ひたいね』

彌次『そりやァ無理だよ喜多クン、君の家の阿母の眼をショボ〳〵やつて背中を圓くした恰好なんざァあんまり綺麗には言ひ憎ひよ。』

喜多『へッどうせ左樣だよ。』

彌次『オイ〳〵もう宜加減に阿母の事は止さうぜ、ヘンな問題が止りがなくなつて仕樣がない』

喜多『アハ、阿母が妙にこんがらかるなんざァくだらない、第一何う云つた所で君が土産を買ひッこはなしと……まア何は兎も角も異人に喰ひつかれるかと思つた阿母が猶健在でゐるといふのに、今日の横濱の開け方といふものは何うだらう。』

彌次『ほんたうだね、だが然し、彼の阿母の伜である君が……』

喜多『ヤレ〳〵未だ阿母が離れないのかい』

彌次『ものが行懸つて來ると却々引込みがつかないて……喜多クン其伜である君にしろ、又僕にしろ彌次喜多の名跡をそつくり用ひてゐる程、當世の所謂悪い頭腦の持主でありながら、何うだい今日のお互ひの洋服拵らへなんざァ、如何に世の中が變つたかといふ所を、ハッキリと現はしてゐるぢやァないか。』

喜多『そりやァ左樣だ、お互ひが洋服を着やうとは、鳥渡思ひもよらなかッたからね、だが何だね彌次さん、君が其妙に腰を落して胸を突出した工合なんざァ、猿が與一兵衛の身振をする樣であんまり新しくは感じられないな』

彌次『えッ嫌な見立をしなさんな、平常古渡唐棧か結城紬のきりゝとした所ばかり見馴てゐるから、一寸洋服だと變に感じられるかも知れないが、初めて會つた人なら此最新型の五分もすかさないスタイルに、近頃歐洲を一廻りして來た少壯紳士と見る事請合だ。』

喜多『ウブッいゝ氣なもンだ、ネクタイが指人形の樣に踊りを躍つてゐるなんざァ新型に違ひないやハ、、、、』

彌次『オイ〳〵人のアラばかり見なさんな、君の其阿母そつくりの猫脊んざァあんまり洋服のうつる柄ゆきぢやァないぜ、何とかもう少し反返れないものかね』

喜多『えッやかましい亦阿母を引合に出すよ、斯樣いふ恰好が英國で流行つてゐる事を知らないかい』

彌次『ウフ、、洋服を被て屈むのが流行るのは初耳だね』

喜多『だから交際し僧いよ、元來英國人は鼻が高くッて大きいから、その重味で自然顔が俯向きかけんになるだらう、夫れで體も屈むといふやつさ。』

彌次『えゝ莫迦々々しい宜加減にしろよ』

喜多『アハ、、、、まアお互ひ樣にいゝ氣な事をいふ樣なものゝ、世の中に誘はれてフラフラと洋服を着た所だけがお慰みさ、どつちみち適る柄ゆきぢやァないてね。』

彌次『正直に言へば其通りだよ、これで横濱行きといふンだから、合方は野毛の山からノーエと

いふやつで、ヒョコスカと花道から出て來るといふ型だね』

喜多『お互ひに顧みると人中で澄ましちやァるられなくなるよ』

彌次『だから眞正な氣を出して顧みたりなんかしッこなしさ、左樣窮屈に世の中を暮らすなァ先祖からの言傳へでないからね、何でも洋行歸りのつもりでるりやァいゝ』

喜多『外國人にぶつかつたらイエスとノーで立切やァいゝのかい』

彌次『イエース』

喜多『ウブッ、お饒舌をしてるるうちにモウ大分過ぎた樣だが、もう直き横濱かね』

彌次『ノー』

喜多『あゝ氣味が惡い、お止しよ莫迦々々しい横濱へ着いてヘンな片言を言つてるると、車夫に笑はれるぜ』

彌次『大きに左樣だ、横濱の車夫は英語が達者だつてね』

喜多『ウム、横濱の車夫習はぬ英語讀むと云ふのは其れさァハゝゝゝ』

滝車と駈ッ競をして、一緒になるとどつちが駈てるるのだかわからなくなる、省線京濱電車の櫻木町行き、驛々で電車の歩はチョイ〳〵停まるが、二人のお喋舌は東京驛を出發したまゝ六郷の鐵橋の轟きにもめけず、のべつ直行停車せずと來た。

二

みやびて言へば、都路は五十次あまり三ッの宿、卽ち膝栗毛の五十三次、道中記の方でも東海道と來れば勤進元といふものだが、其東海道の振出し近くへ、文明の耳の穴を開けたといふのが横濱の港で、世界的の出船入船、野毛の山から見渡した金港一帶の繁昌といふものは、先祖の彌次喜多は知らなかつた、其時分は神奈川の臺から三度笠の庇を上げて鳥渡のぞいて通り過ぎた一漁村、然も夫れが開港して現今で僅かに六十年餘りとは、時の力の大層さ驚きの至りだ。

などと今更らしく横濱を並べるでもないが、然し此横濱といふ土地が、其貿易港として開けだけ、物質本位の無風流な土地とのみ想はれて、世辭よく稱ぶに金港といふ程だから、開港當時は、怖いもの見たさといふ心持で所謂異人屋敷を見物に行つた樣な、珍らしがつたそんな時代を通り越すと、改まつて見物とか、あそびとかいふ樣な人足の向く所ではなくなり、商用、勤務の通ひ、洋行の送迎、と云つた樣な外、まァ僅かに根岸の競馬、グランドホテル、南京街のチャン料理、オデオン座の封切物、港橋のいんごうや、太田の牛肉、と云つた樣な所が其趣味と食道樂

に於て稍誘ひをかける樣なもの、、夫れらは、多くは土地の人の行くところだ。

何れにしても開港の其根本が、暢氣な行樂などを意味しないわけだ、が然し、其横濱も少し遠い端れまで伸すと、行樂の勝地がチョイとある。

曰く本牧、磯子、弘明寺の其れだ。

貿易の港、金港と云つた氣分は、勝地としても、流れの花のあくどい色彩に、露骨な情調を漂はしてゐるが、夫れでもそこらへ行くと、漁家に假寢、磯馴れ松の横濱村と云つた昔時を偲ぶ風趣がないでもないといふものだ。

其處は何れも、神奈川を起點として横濱市内を駈巡る電車の終點で、方向にも本牧、弘明寺は其儘、磯子だけが八幡橋行きとあり、夫れから降りて五六丁の所だ、尤も本牧は其名勝の三渓園に於て、磯子は亦海岸に磯子園階樂園といふ、屏風ヶ浦を見晴した離座敷の清濁共に適す遊び場所のあるに於て、一般的でないまでが、京濱の通子は既に知る所、これなる新彌次喜多の兩人も、通がる事に於て五分でもひけをとらないだけ、本牧氣分や、磯子情調は心得てゐるが、未だ知らないのは弘明寺といふ所だつた。

そこで卽ち今日の横濱行きは、弘明寺探險といふ思ひつき。

喜多『ねえ彌次さん、横濱も斯樣横ッちよへ入つて來ると、マドロス氣分がオワイヤ氣分に變つて來るから面白いね。』

彌次『停留場の名からして、お三の宮なんてえのは何うしても田舍といふものだテ。』

弘明寺行きの電車の窓から顏を出して、横濱開港の土の犧牲として傳はるお三の宮の傍を今通る。

彌次『一體横濱といふ所ば落着のない氣忙しない所だが、夫れだけに亦こゝらへ來ると、ポカンと氣の脫けた樣な、往來も家並も何となくダラケテ見えて來るね』

喜多『東京の郊外とは亦違つた感じがするからふしぎだ』

彌次『別にふしぎな事はない、土地が違つてゐれば違ふ感じのするのが當然ぢやアないか、もし同じ感じがすれば其方がふしぎといふものだ』

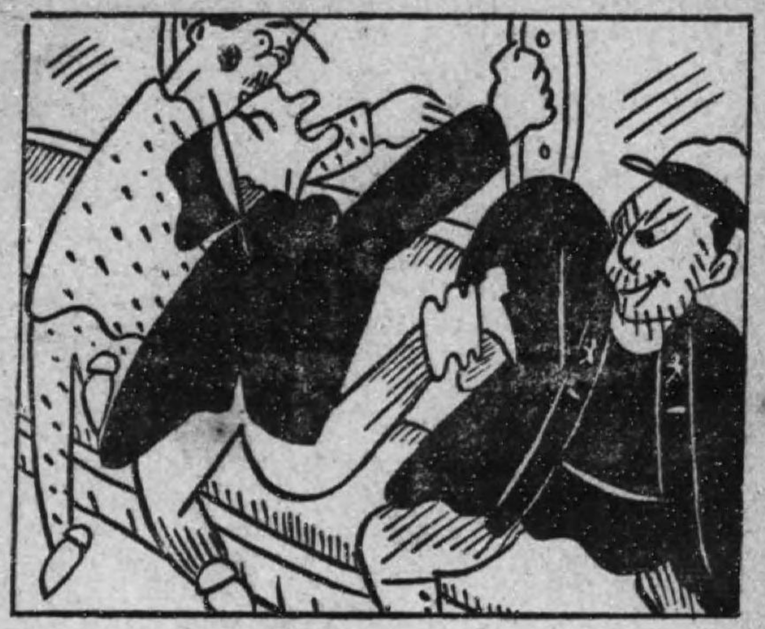
喜多『くだらない理窟を揑るなよ、雨の降る日と日の暮れ方は田舍も東京も同じ事ッて都々逸を知らねえな』

彌次『ブッ變な事を持つて來たもんだ、別に今雨も降つてなければ、日の暮れ方でもないぜ』

喜多『焦れッたい、つまり物の譬へだよ』

彌次『譬へたとへでも、そんな譬へは、たとへ……ア、切がない』
喜多『アハ、唇から譬へがダラ〳〵垂れてゐるぜ』
彌次『譬へたとへが……垂れ樣ともたとへ』
喜多『わかつたよ〳〵』
彌次『何だか此方がわからなくなつて來た。』
喜多『アハ、、世話アない……オヤ蒔田といふ所へ來によ、あんまり馴染の無い名の所だけに探險氣分がするね、オヤ〳〵妙々、御覽ッてばさ彌次さん、たゞ者でないといふ代物が彼方を通るぜ、所謂白首といふのにしては出來過ぎてゐる、兎も角もエスには違ひないよウームン。』
彌次『どれ〳〵、イヤ成程々々。』
と喜多八の脊中へ重なる樣に乘掛り、彌次郎兵衛グイと首を窓外へ出すと、身輕な洋服の足の方が持上がつて、靴の腫が前に掛た土方の親分らしい虎髭のをぢさんの半ズボンの膝へぶつかる
親分『えいッ何イしやがるだ。』
と色で云へばドス黑いといふ樣な聲で、鳴つける樣に親分斯樣いふと、いきなり彌次さんのズボンの足頸をウンと攫んで逆に廻した。

彌次『あッ痛々〳〵々ッ。』
堪つたわけのものぢやアない、彌次さん悲命を上げながら、攫まれた脚をヤケに蹴つける樣にふるつたのだ、流石の親分も手を放した、とたんにふるつた靴の泥が遠慮なく飛んで、喜多八と親分の眼口へ入る。
喜多『ペッペッオイ〳〵彌次さん惡戯ぢやアないぜ。』
親分『ヤイ〳〵野郎ッ、ウウムン。』
と喜多八は顏を獅嚙て撫で廻はせば、親分指先で眼をひろげ、髭の中から厚つたい下唇を三角形に反らせて、頻に上へと吹き上げる。
彌次『イヤ勘忍々々。』
と面喰つて、彌次さん喜多八の方へ向いてペコ〳〵お低頭をすれば、流石に喜多八自分はどうでも、物凄い前の親分の方を頤でをしへて、あやまりな〳〵といふ樣な難しい顏をしてみせる。
彌次『どうも相濟ません、お眼へ何か入りまして。』
親分『何も糞も此野郎……』
と其顏つきと云ひ、體と云ひ、普通なら彌次郎兵衛ぐらゐは折ベショリもし兼ないのだが、御丁



寧に兩方の眼へ泥が入つたのだ、呶鳴ながらも始末がつかない。

親分『ふッふざけるァがつて、あゝ痛え……』

彌次『親分、あんまり擦ると不可ませんよ。』

親分『えッやかましいやいッ。』

彌次『何うも濟ません勘辨して下さいまし……僕も惡かつたかも知りませんが、親分が脚をおひねりなすッたもンだから僕も堪らなくなつたンでッイ……。』

撫次さんはおひねりなすつたなんかんと變な調子で對手の風體にオビエながら下手に詫て出る、が何しても、途端に喰つた泥の目潰しで、怒鳴るより擦り出すのに手間がかゝり、ゴシ〳〵とやつとの事で眼は開いたが、虎髯の上へホロ〳〵と涙が溢れるだらしなさに自然親分氣勢がダレちまひ。

親分『氣を着けやァがれ、チャップリン奴ッ。』

と呶鳴つたゞけの事で、案外平凡に片がつく。

喜多『成程親分、此男をチャップリンはいゝァハ、、、。』

親分『ねえさうだらう、チャップリンに違げえねえだろ、友達だつて文句はあるめえハッハッハ、、、。』

と思の外此親分おめでたい、誰れでも言ひさうな、珍な恰好の洋服姿をチャップリンと云つたのを、大層な皮肉のつもり、然も喜多八、機嫌を取る氣で感心らしくおひやつたので、

親分『多くの子分を綽名ァつけちや呼んでゐるだからな、綽名なら俺ァ巧えもんだな。』

と大納まりだから罪がない。

彌次『へえチャップリン……成程御尤もで……。』

と彌次さんも、喧嘩になれば彼方が強いにきまつてゐるから、言はれる儘に逆らはず、殊には生れたる瓢輕なる點に於て、敢てまつたくチャップリンに讓る所がないのだから、寧ろ此れを面白がつてチャップンさんの身振か何かでヒョロ〳〵とあやまつたもの、そこで親分氣勢のダレた所へ、おひやられてすつかりとゆるみ、ゆるむだ所へトボケた身振を見せられたので、虎髯をゆす

ぶる樣に笑ひ出し、

親分『アッハヽヽヽ面白え輩だ。』

と御機嫌になつちまつた、ところで親分ハッと氣が着いた樣な顏をして、

親分『オヤ不可ねえ、今のは蒔田だつたンだな俺ア降りるんだ。』

とあたふた起上つて、

親分『オウ車掌降してくれ〳〵。』

と車掌臺の方へ出ながら呶鳴つたが、いくら横濱の横ッちよの田舍氣分の電車でも、途中で止める筈もない、親分焦々とした顏をして、踏段へ降りれば、

車掌『あなた危いです。』

と車掌が注意をする、親分忌々しさうに振返つて、

親分『止ねえから勝手に降りるンだ、ヘッ。』

と、痰呵一番、ヒラリと飛降りかけたが、足が地につくよりも手を放した方が遲かつたので、一二間タッタッタッとよんどころなく一緒に駈けて、それからドシンと尻持をつく。

車掌『ソレ御覽なさい。』

と車掌は密かにさまア見ろと云つた顏つきをすれば、例の二人は車窓から音を出して、

彌次『親分々々〳〵、どどうしました。』

喜多『今日はおまえさん星が惡いんだ。』

彌次『僕の脚をひねつたまではよかッたが、後惡しと來たねヤレ〳〵、チャップリンにまけない圖だね。』

喜多『虎髯の嚴めしいだけ滑稽が深いやアハヽヽヽヽ。』

彌次『オーイをぢさん確固おしよウッ。』

と對手は尻持をヨヂ〳〵と起上つてゐる所だし、電車はドン〳〵と走り去るのだから、モウいくら威張つても大丈夫、安全地帶と云つたわけで、云ひたい言を車窓から吐き飛ばすが、離れるほど彼方へは聞えない、案外おめでたい例の親分、起上つて腰の泥を拂ひながら、氣まりの惡い樣な顏で笑つてゐるから世話がない。

三

蒔田といふのは、横濱が其のホンの僅かの漁村だつた昔時、金澤への街道筋で、ズット其亦昔

時には吉良左兵衛佐の城があつたといふ程だから、現在は横濱の田舎とでもいふべきだが其當時こゝらから見た横濱は、別にお話になつた土地ではなかつたのだ。

が、時世時節は遂に其れをあべこべに、現今横濱の歡樂境、伊勢佐木町の賑やかさから、眞金町の廓の此方を通り越して、此邊へ入つて來ると、電車通りの軒並を田舎の風が吹いて、繁昌過ぎた息詰りが段々暢然として來る、とは云へ亦、何處も同じ住宅難といふやつが、斯樣して電車の通る限り、響くとギシつく新建のヤツこいのを並べて、新開氣分を漂はせ、而して抜目のない思惑子が土地繁榮策に、淺猿しい樣な花柳界を拵ち上げるといふけれど、卽ち此れなる兩人が電車の窓から覗いて、喜劇の一節を起した樣な、チヨイと目につく白ッこい女の子がウヨ〳〵するといふものだつた。

彌次『女の子を覗いたおかげで、莫迦な　慰みを重ねちやつたぜ。』

喜多『アハヽお慰みで濟んだからいゝ樣なものゝ、彼の虎髯のをぢさんの顏つきぢやア、事態容易ならずと思つたよ、君をチャップリン扱ひぐらゐな所で事濟みは意外だつたね。』

彌次『チャップリン扱ひはいゝが、君が何も感心面をしなくッてもよささうなものぢやアないか。』

喜多『そんな文句を云ひなさんな、僕が感心してみせた所で虎髯クンスッカリ納まつて、卽ち事件が穩便に片附いたといふものだ。有難うといふがいゝ。』

彌次『だが何だッたよ初め脚をひねられた時はびつくりしたよ、痛い勢ひで脚をひつぷるッたのが目潰しとなつて虎髯をダレさせた所は亦自然の大出來といふものだッたね。』

喜多『何しても、段々つき合つて見ると僕等よりは餘程善人だね、然も飛降り損ねなんざア愛嬌があり過ぎらア。』

彌次『然しマア〳〵弘明寺道の大活劇ッてな事にならなくッて宜かッたよ。』

喜多『と安心をしてゐると、おめでたく穩かに濟ませたと見せかけた虎髯の親分、これから子分を集めて先へ駈ぬけ、僕等が弘明寺へ降りる所へ竹槍をしごいて待構へてゐるといふ筋かも知れないぜ。』

彌次『フッとんだ田舍芝居の口立狂言だ、さう來りやア洒落もんだ。』

喜多『そこで臺詞があるね、千里一飛び虎髯が、先きへ廻つて待つてゐた、恰度所も弘明寺の、愚にして妙な意恨の達入れ……』

と喜多八乘地になつて七五調子、物日でもない弘明寺行きの、電車の中は空いてゐるが、さり

とで二人ッきりではない、稍離れて掛てゐる二三の乗客が、先刻の珍景から引續いてのふざけ方に呆きれたり面白がつたり、車掌まで鞄と共に口を開ッ放しで眺めてゐる。

彌次「オイ〳〵喜多の字、ヘンな臺詞を捏ちなさんな、みんないゝお慰みにしてヂロ〳〵と視てゐるぜ。」

喜多「視るのが當然だ、電車の中で茶番と芝居が一緒に觀られるンだからね、おまけに横濱の電車は東京のより往復二錢安で、斯樣いふ餘興があつちやァ此位る安いものはないや。」

彌次「其つもりで乘客の御機嫌を取つてりやァ世話ァない、御覽、車掌まで此方を觀て停留所の名を呼ぶのも忘れてゐるから。」

喜多「とんだ車掌慰安會だァハ、、、、。」

彌次「車掌慰安會はい、、、成程洋服の工合と云ひお恰好の藝人だテ、其れでハンケチを手の平へ揉込んだり、銅貨の使ひ分けでもすりやァ申分無しといふものだハ、、、、。」

喜多「そこで藝名は天勝の高弟で天どんといふッてね。」

彌次「ウフ、天どんはい、、どつちもタネで苦勞をするといふ落だらう。」

喜多「後見曰く、その通りだハ、、、、。」

暢氣な喧ぎに氣を取られて、電車が停まつてから車掌クン氣が着いた樣に、

車掌「大岡々々。」

と間抜な聲で呼んでゐる。

彌次「何だい大岡だッて……はゝァこゝだな。」

喜多「何がはゝァこゝなんだい。」

彌次「大岡越前守が餘世を送つた舊蹟よ。」

喜多「ブッ眞面目な顏して止さないか莫迦々々しい。」

彌次「かも知れないと思ふのさ、名所舊蹟なんてえやつは得てそんなものだよ、大抵昔時のヨタの固まりが舊蹟になつてゐるからね、彼の賣込んだ大岡捌きだつて半分はヨタだといふぜ。」

喜多「ぢやァまァ何だね、僕等が此地を大岡越前守の舊蹟だと言ひ觸らせば、後世さう傳へられるかも知れないといふわけだね。」

彌次「さうだよ、だから其つもりでヨタを飛ばさうよ、どうせ僕等は、後世ヨタでも殘さなくッちやァ外に殘すものがないからね、でその何だよ喜多の字、越前守が此横濱で有名な小僧殺しといふ事件の捌きをつけて、其れから間もなく公職を辭し、此地へ來て餘世を送つた……といふ事

にして置かうぜ。』

喜多『アハ、、、いくらヨタでも横濱の小僧殺しはヨタ過ぎるよ、時代だけはまことしやかに顧ひたいね。』

彌次『其時代の合はない所が、捌きの手懸りになる所だよ。』

喜多『フッ苦るしい洒落やうだウフ、、、。』

彌次『アハ、ヨタも斯樣なると筋があるから難かしいよアハ、、、、、、。』

莫迦なお饒舌の行止まりが、恰度弘明寺の終點。

喜多『オット彌次さんお見當へおいでなすッたよ。』

彌次『然し思へば變な所へやつて來たもんだ、遙々東京から此所だけへ見當を着けて來るなんざア一寸素人のやらない事だね。』

喜多『ウムヨタ歩きも玄人になると、ひねつた土地を思ひつくからなア。』

彌次『土地をひねるなアいゝが、先刻は脚をひねられたンだから驚いたよ。』

喜多『ウフ、、、彼れは些凝過ぎたッけなア。』

終點で降りると直ぐ突當りで、其れから右へ三四丁、見通しの櫻並木、折柄は青葉の茂みの其の兩側は商家の軒續き、而して其正面に高い石段と櫻門が望まれる。

彌次『フーン彼れが卽ち弘明寺だね。』

喜多『さうらしいね、町の工合は櫻樹も若いし家並も新しいので、新開氣分は脫がれないが、見込んだ石段から樓門は大時代だね。』

彌次『ウム鳥渡、眞間の弘法寺と同じ樣な感じがするぢやアないか。』

喜多『さうだ、弘法寺と弘明寺ぢや寺號からして似てゐるからね……時にねえオイ彌次さん〳〵。』

彌次『えゝ何だい頓狂な聲を出すぜ、聾ぢやアないよ。』

喜多『ねえ彌次さん。』

彌次『何だよ、いやにキョロ〳〵しながら喧さい男だな。』

喜多『だつてさ、弘明寺藝妓てえ事を嘗て横濱の通から聞き及ぶ所だが、其れらしい型のものも其れらーい家も見かけないぢやアないか。』

彌次『ウム其れなら僕も先刻から密かに八方へ視線を投げてゐるンだが、ペンといふ稽古三味線の音も聞えなければ、プンと鼻の穴へ入る樣な白粉臭い代物に出つく會はさないね。』

喜多『探檢の本意はそこにあるンだ、何事を置いても其方を發見する事に力めようぜ。』

彌次『だが何だぜ、此通りは睢見た儘の一直線で弘明寺へ突當るばかりぢやァないか、此通りで發見しなくッちやァ見込なしだよ。』

喜多『だつて、今通つて來た蒔田なんてえ所にさへ、藝妓みたいのがウロ〳〵してるンだから乘て聞き及ぶ此土地にないわけがない、まゝよ彌次さん卷莨でも買ひながら訊いてみよう。』

彌次『同じ訊くのなら、嫌に苦笑ひをされない樣に訊きなよ、下手な訊き樣をすると擽つたい樣な顏で見られて、御存しの癖になんて言はれるやつだ。』

喜多『さう〳〵いつか甲府へ行つた時、廓を訊いて冷かされた事があつたッけな……然し今日は洋服でスウと構へてゐるから、先づ御役人の土地視察とでも思ふだらう。』

彌次『まァ何しても巧く訊く事さ。』

喜多『心得てゐるッて事さ。』

と喜多八其所の煙草店へ飛込み、敷島を買つて早速一本ふかしながら、

喜多『ねえお婆さん、一寸調べ物があつてお尋ねするのだが、此弘明寺町の花柳界といふのは何處にあるですか。』

と唐茄子に手裏劍といふ型で卷莨を咬へ片手をズボンの隱袋へ入れて、大いに片附けて訊いたはいゝが、煙草店の婆さん、商賣の莨の名前なら客の口つきでも何うにか解るのだが、其外は少少遠いので、

婆さん『へえ、何でございますかね。』

と耳を傾むけて考へた顏つきまるッきり聞こえないわけではないが、花柳界なんといふ詞が既に解り憎い所へ遠いのだから、とても一遍では通じつこない。

婆さん『はァ……弘明寺町の、か、か、火事でございますか。』

喜多『火事ぢやァないよ、ハゝァお婆さん遠いンだね。』

婆さん『はゝァ、遠い火事なんで……。』

喜多『えゝッ焦れッたい、面倒な事になつちやッたな、火事ぢやァない花柳界だよ。』

婆さん『へ、へえ……。』

喜多『やりきれないなァ、藝妓々々ッ。』

と喜多八大きな聲で云ひながら、三味線を彈く眞似をして見せれば、婆さん漸つと解つてニヤニヤと氣味惡く笑つたもので、

婆さん『はァ、はァさうでございますか、嫌ですよ旦那、藝妓さんですかね、へゝゝゝゝ。』

と來た。

喜多『さうだよ〳〵。』

と氣の利かない顏をした云へば、婆さん猶ニヤ〳〵を續けながら、

婆さん『藝妓さん達は、此土地を此間追拂はれましたですよ、まア御氣の毒さんな。』

と――喜多八、頓狂に大きな聲を出して、

喜多『えッ何だつて、此土地を追拂はれたッて……ウームン。』

と唸つた、手間がかゝるのと變な恰好をしたりしてゐるので、彌次郎兵衛焦れッたさうに、

彌次『オイ〳〵喜多クン何うしたンだい。』

と呼べば、

喜多『何うも忘うもないンだ、まア烏渡此方へ來てくれ、大事件だ。』

と八の字を寄せ、片手で三味線を彈く眞似をして、片手をあげペケ〳〵と振つてゐる。

彌次『何だい、手なんか振つて、藝妓はゐないといふのかい。』

喜多『ウムゐないンだ、追拂はれたンだとさ。』

彌次『そりや亦何うして。』

喜多『其のわけは未だ訊かないが、訊くのも手數がかゝるンだ、此婆さん曖昧なんだよ。』

と喜多八が云へば、其曖昧といふ文句だけはハッキリと聞えた、とみえて少し婆さん機嫌を損じて、

婆さん『どうせ曖昧でございますよ、はい。』

と皺くちやの頰邊をプッとする。

四

彌次『お婆さん僕も敗島を一個買ふから、まア勘辨する事さ、そこでねお婆さん、何ういふわけで藝妓が追拂はれたのかぬ。』

と這度は入代つて彌次さんが訊く。

婆さん『なアにね旦那、此弘明寺町の電車が着く側の所へ此頃女學校が出來ましたでね、藝妓なんぞ置くのはよくないといふ事で、立退かされましたですよ。』

彌次『ヤレ〳〵、尤もの樣なつまらない事だね、其れで何かい、追拂はれて其藝妓等は何處へ行つちやッたンだい。』

と頗る熱心に彌次さん、婆さんの耳の側へ顔を突出して訊けば、

婆さん『へ、ッ旦那方、教へますから貰をモウ一ッ三ッ買つても宜うございませうね、へ、、、。』

と亦ニヤ〳〵を始めて、婆さん却々以てぬからない、ッイ此間までこゝらが其花柳界の中心であつたらしいだけ、煙草店の婆さんも宜加減人を喰つてゐる。

彌次『貰は幾らでも買ふがね……其れで何處へ追拂はれて行つたのだい。』

婆さん『直き此弘明寺樣の山の彼方の井土ケ谷といふ所へ行つたのでござんすよ。』

彌次『へえー井土ケ谷、變な所へ追こくられたものだな、えゝオイ喜多クン聞いたかい。』

喜多『何だつて井戸替へだつて……井戸替へで猫が揚がるなんざァ洒落もんだァハ、、、、。』

彌次『何でもいゝ井土ケ谷でも井戸替へでも構はない、山越をして押出さうよ。』

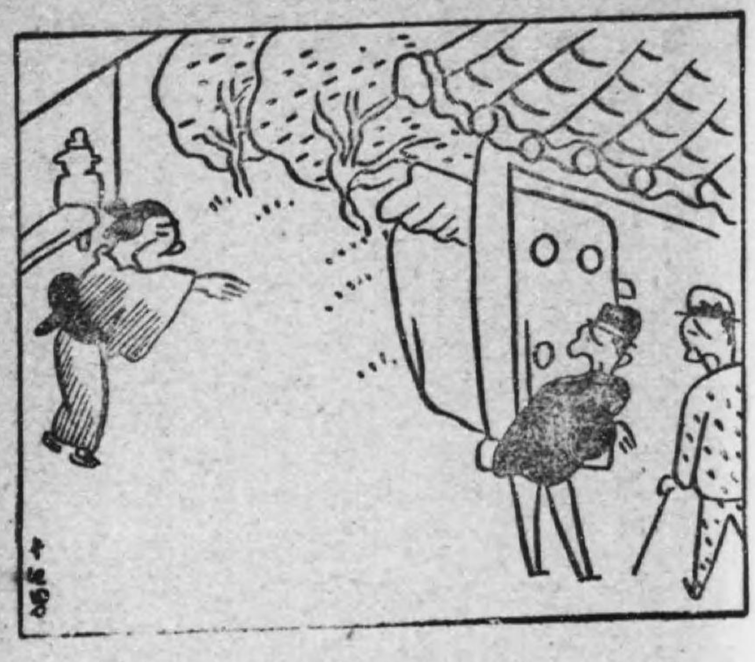
喜多『勿論だ。』

彌次『イヤお婆さんおやかましう、歸途に寄つて貰の買占をするよ、ハイ左樣なら。』

と兩人煙草店を出て、兎もあれ弘明寺の石段へ向つて歩きながら、

彌次『聾の癖にいやにこなれた婆さんだね。』

喜多『つまり花柳界などがあつたお蔭で、あゝ調子附いちまつたンだね、成程彼れを見ると女學



弘明寺——井土ケ谷

校などが出來ちやァ花柳界が追拂はれのも無理はないね。』

彌次『そりやさうだ、晝日中から僕等の樣な女ころしが俳徊をするのも、花柳界があると思つたからなんだからねどうせ浮氣な藝妓なら遠慮なく惚れさせてもいいがね、女學生に罪を作る樣な事はよくないからな。』

喜『ウブッさう思つてゐるといゝ心持だね、虎髭のをぢさんにチャップリン扱ひをされてヘイコラしてゐる工合なんざァまつたく女學生の思ひつきさうな圖だつたよ。』

彌次『アハ、先刻は聊か仕損つたッけな。』

喜多『そりやァこゝが彌次さん、其井戸替へとかはどの位ゐあるのだい道程は……。』

彌次『ウムそいつァ訊き落したが、ざうさないのだら

う、弘明寺の山向ふだといふんだから。』

喜多『さうかね、彼の山がチョイと見ると手ごろの山の樣だが、踏込むと莫迦に奥深くッて、大薩摩宜しく山卸しになりといふ凄いのぢやァないか。』

彌次『探檢なんだから其位ゐな事はあつた方がお話になるがね、然し見た處チョイと一またぎで彼方へ下ると麻布の二之橋ッてな感じの花柳界のある所へ出るンぢやァないかい。』

喜多『六本木と間違つちやァ不可ない。』

彌次『六本木ぢやァないが、一本氣で弘明寺のエス探檢といふ思惑で來たものだ、山が深からうが、道程が幾らあらうが、兎に角弘明寺へ參詣をしたら、山越をして井戸替へまで伸さうぜ。』

喜多『そりやァ無論、云ふにや及ぶだがね、然し、ムダな道で汗をかくより、モウ一度そこらで訊いて見ようよ。』

饒舌る程に石段下の仁王門へと突當る、此仁王門運慶の作とあり、骨董商の店の隅々欠伸をしてゐる仁王とは流石に違つて有難いが、却々そこらには目も止まらず、石段を急か〳〵と昇つて何か知らず物寂て靈蹟を語つてゐる本堂へ、義理ばかりの禮拜を濟ませると、

彌次『喜多の字、そこの茶見世で一休みしながら訊く事にするかね。』

喜多『山道を踏迷つて、狼だの山賊だのと立廻りをやるのもヒルムが古いから、やつぱり念入に訊いて行く事さ。』

本堂から斜めの左り寄りに在る小さな住居建の茶見世へ入る。

喜多『お上さん少し休ましておくれ』

上さん『ハイいらッしやいまし』

と此の上さんが亦、活字で組むだ樣な切口上で、笑つて損をした樣な顏つき、商賣柄にはめづらしい、彌次さん低聲で、

彌次『オイ〳〵喜多クン、何だか氣の重い上さんだぜ、輕く訊けなさうだよ』

喜多『ズウフラ人種に似合はずお互ひに神經過敏でいらつしやるからね、直きに人の顏つきで悄氣るからをかしいよ。』

とコソ〳〵文句を言つてゐる所へ、上さん面倒臭さうに茶を汲んで、ムッツリと出す。

喜多『ねえお上さん』

と喜多八はオッ〳〵と訊けば、

上さん『ハイッ』

と其の切口上、骨々とした調子で眞面目に顏を覗詰られたので、井土ヶ谷方向を訊くことが氣輕に出そびれ、

喜多『此の弘明寺は隨分古いものだね』

などとつまらない事を言つてゐる。

上さん『ハイッ、左樣です、御本尊は國寶になつとるくらゐですから』

と來た、なつとるなどといふ詞は日本も此の邊の出來ではない、第一茶見世の上さんの詞ではない。

喜多『へえ國寶かね』

と喜多はよんどころなく感心した樣な顏をしてゐるうち、あんまり物を言ひたくない樣な上さんは店の隅へ行つて外の方を向いちまふ。

彌次『チョッ喜多クン賴むぜ、弘明寺は隨分古いなんざア、ムダな台詞だぜ、焦れッたい』

喜多『ウム我ながら詰らない事を言つたものだと思ふがね……嫌に手懸りが惡いんだ』

彌次『何も道を訊くのに其麼に手數をかける事はあるまい、女の子のゐる國へ行くンだといふ氣で訊くから氣がさすンだ。』

とコソ〳〵言ひ居ぢながら、這麼は彌次さんが、

彌次『ねえお上さん』

と言へば、上さん振向いて例の、

上さん『ハイッ。』

と來る、喜多八低聲で、

喜多『あのハイッてえやつが不可ない。』

五

名所圖繪を見ると、「瑞應山弘明寺は金澤道より十四丁ばかり右の方へ入て弘明寺村にあり、坂東順禮札所の第十四番目なり、當寺は弘法大師開創の佛刹にして云々」とある、猶當山の緣起には「人皇四十四代元正天皇の御宇養老五年、印度善無畏三藏遠く密敎有緣の靈土を尋ねて、支那を過り我國に至りて廻國巡遊を企て給ふや、先づ大和久米の塔中には七軸の大日經を鎭め、以て未來因緣の熟するを待期し給ひ、夫れより山河を跋涉し行程幾月、遇々當山の麓に到り其妙境靈域たるに感じ、遙か印度より齊し來り給へる七珍萬寶を埋め、七箇の磐石を建て大誓願を

籠め……云々」とある。

而して其本堂に秘せられる卽ち國寶たる御本尊は行基菩薩一刀三禮之作にして十一面觀世音菩薩、尙納まる寶物佛像の數々、亦境内の鐘樓の前にニューと首を伸し羽をひろげた樣な舞鶴の松さては七ツ石、飛龍の梅と、問へば其れ〳〵故事來歷、眞面目な探勝子ならノートの頁を幾枚か埋める所だが、例の二人はそんな方は根はなく、菩薩の生きたのを尋ねればこそ社所弘明寺へなど出て來たといふわけなれば、無愛想な茶見世の上さんを捉まへ、柄にもなく訊き憎さうに、

彌次『ねえお上さん、井戸替へッてえ所は何う行けばいゝのかね。』

と云へば、上さん彌々變な顏をして、

上さん『井戸替へ……そんな所はございませんですよ。』

と、井戸替と云つて井土ヶ谷と通じない所、彼の活版で組んだ樣な返事をする上さんにして然あるべきだが、兩人ヨタを飛ばし莫迦を饒舌りながら朱引外の生菩薩を尋ねては來るものゝ、お互ひにあんまり若いといふ年齡でないだけ、謂はゞ幕明きの茶見世の場といふ樣な取かゝりから調子の惡い這麼上さんに出ッこはすと自然里心がついたり、氣が腐る。

喜多『彌次さん〳〵、何でも此山を越しさへすりやァいゝに違ひないから、もう訊かずに行つて見やうよ。』

彌次『ウム……だが這麼所で迷子なにりたくないからなァ。』

などとグズ〳〵云つてゐると、上さん不愛想だが其れが別段惡氣であらう筈もなく、暫時してから氣が着いた樣に、

上さん『旦那方、井戸替へぢやございますまい、井土谷でございませう。』

といふ。

彌次『左樣だよ〳〵その井土ヶ谷さ、實はそこに少し尋ねる人があつてね。』

喜多『遙々東京からやつて來たンだが、そして其井土ヶ谷へは。』

彌次『何う行くンだね。』

少し勝手がつくと、眞ぐ眞面目から離れて仕出しの臺詞を渡る樣な調子で訊く、然し上さんは例の通りで、くだけッこはなく、

上さん『ハイッ。』

と亦一ッ用ひて、

上さん『井土ヶ谷へ御出なら、此山を越しても行かれますが、其れよりは此右手の庫裡の門から下

へお降なさつて、山裾を左りへ左りへととつてお出なされば其方がわかりようございます。」
と漸々つき合つてみれば、思つたよりゾン氣でもなかッたのなり。
彌次『イヤ有難う、其れで道程はどの位あるのかね。』
上さん『七八丁もありませうか。』
彌次『左樣か、そんならわけはない、なア喜多クン、果して尋ねる敵は其井土ケ谷に居るかしらね。』
と彌次郎兵衛は、戯談ながら花柳探險といふ樣な顏をせず、眼をパチ〳〵させて這麼言を云へば、
喜多『さア我々兄弟兩人が此年月の艱難辛苦、尋ね〳〵て此れまで參り、もしも敵に出會はざれば、ハヤ運命の盡きる所。』
彌次『左樣いふうちも心が急く、井土ケ谷道のわかりし上は、遲るな弟ッ。』
喜多『心得ました。』
遂々莫迦な脫線調子になつて了ひ、兩人茶見世を駈出せば、後から上さんが、
上さん『旦那方、お茶代を願ひますッ。』
と大きな聲――弘明寺參詣の人々が兩人の方をヂロ〳〵と視る。
喜多『オット彌次さん亦仕損つた。』
彌次『見つともない大きな聲で呼びやアがる。』
流石の兩人面喰ひながら立戻つて、お茶代を置き出たらめに駈出せば、再た後方から、
上さん『もし〳〵旦那方ッ。』
と來た、
彌次『戯談ぢやアない何だいまたッ。』
喜多『茶代なら置いたぜ。』
と這度は喜多八焦れッたさうに大きな聲を出せば、
上さん『イエお茶代は確かに頂きました、そちらへ行つちや道が違ふのでございます、右の方へ庫裡の門から降りるのでございます。』
と上さん調子はブッキラ棒だが、根は親切なのだッた。
彌次『あいよ有難う。』
喜多『わかッたよ〳〵。』

と、兩人何となく總てが後手になつた樣で、モウ初夏の、然も何年振の洋服といふので、カラーで攻られた頸筋は汗でグッショリ。

庫裡は茅葺で、庭前の寂び、そこに名木の飛龍の梅が成程左樣稱ぶ枝振りをしてゐる。

喜多『ウム却々寂びのあるいゝ庭だね。』

彌次『そんな事は何うでもいゝよ、そらそこの門を出て石段を降りるンだ。』

喜多『而して左りへ〳〵と山裾を行くンだらう心得てゐるよ。』

と其れから兩人其通りに道を取り、山裾と云つても新建家屋の軒の續いた明るい感じの道、それを一二丁出ぬけると右手は埋立の廣やかな野面で、東へ斜めに小川の流れ、景色は平凡な水彩畫だが、初夏の大氣の晴れわたッたのは、何とも云へない活き〳〵とした歩き心。

彌次『然し喜多クン、思へば不思議な氣もするね、這麼道を通つて山の背後へ廻ると藝妓型の代物が居やうとはね。』

喜多『一體井土ヶ谷なんて、今まで聞いた事もなかつた名だが、つまり程ヶ谷の親類といふ樣な土地なんだらうテ。』

彌次『左樣さ、何れ昔時の金澤とか鎌倉とかへ行く道でもあるのだらうが、何しても變な所で絃歌が湧いたものだね。』

喜多『だが亦、行く奴も行く奴だね。』

彌次『そりやまつたくだ、東京からだからなア。』

と兩人顏を見合はせて、熟々お互ひに感じ入つてゐる。

成程、弘明寺の山をグルリと廻つた背後の見當、そこに御料理旅館なんといふ看板がチョイチョイと見え出して、田圃を見晴しの新道の長家から三下りの稽古三味線が聞こえ樣といふ、穩かならぬ氣分、光景。

彌次『イヨーおいでなすッた妙々。』

喜多『アラ有難し忝けなし、遂々敵の在家を尋ね當たといふものだ。』

と、これから勢ひにまかせ飛込んだのが井土ヶ谷館といふ御料理旅館、構への大きさと土地の名をつけた所卽ち一流、そこで亦兩人が亦土地に稀れなる大層な客のつもりで高をくゝつて大風呂敷をひろけ、勿論藝妓は一流處をと宣まふ。

彌次『樓婢さん、僕等は斯樣いふ土地は初めてだが、一體こゝらの客種はどういふ人等だね。』

なんかんと彌次さん納まつて訊いたはいゝが、樓婢はまことに正直者で、

樓婢『まア大抵貴客方の樣な方ばかりですわ。』

と云つたもの、ところへ驚て現はれた、卽ち井土ケ谷藝妓なる者、入るが否や、兩人の顏を視て、

藝妓『アラお見かけしたやうだわ。』

と來た、然も其れが大いにお世辭のつもりなり。

兩人互ひに息をついて、

彌次『辟りしてお呉よ喜多の字。』

喜多『さりとは〳〵。』

珍譯

彌次喜多　善光寺の宿

一

牛に牽かれて善光寺詣りといつた其の昔時でも、列車の食堂でビフテキを抉りながらゆく現今でも、信州信濃の善光寺さまが、お有難やの善男善女に依つて、御繁昌の程は彌增さうとも變りはないが、しかし、道中日を重ねて、驛鈴の音や馬士唄をあしらひに、夕べ〳〵を棒鼻へ繰込んで來る、道者の絲經、講中の菅笠、意氣な腰帶にお納戸の半合羽、女子は沿衣の上ッ張に姉さん冠りで、打興じながらと云つた方が、現今彼の、アタフタと駈込んで、後から扉をガチンと閉められ、ピー笛一聲、時間で追捲くられる樣なのとくらべると、疾いに於て申分はないとは云へ、御用とお急ぎ　ない、德の餘りの御信心の旅には、やつぱりその昔時の道中氣分がなつかしいといふものだ。

で、これは其の昔時、木曾路から來た善光寺街道の、もうこゝは如來樣のお膝元、ダラ〳〵登りの兩側に宿屋が並んだ、門前町のとりつき、代々の旅籠とみえた古びた軒に講中札を打並べて

御定宿松屋九十郎とある看板が今しがたあんどんと入れ替つた、頃は其の春の夕暮だ。

わや〳〵と差かゝつた田舍道者が六七人、宿引の女が二人後前になつて、

「お泊りなせえまし〳〵、松屋でごぜえます〳〵。」

「たしかおまえ樣方の御定宿はこゝでござえますが、さアさお荷物のウお出しなせえまし。」

「朝回向御參詣ならお早いお着きが宜うございます、お風呂も恰度宜うございます。」

「お泊りなされませ〳〵。」

まだ暮きらないので、あんどんの灯が淡く、其の女共の低い鼻の頭の白粉がいやに白く浮いてゐる。

「白ッけえ女ッ子に引張られたからちッて、だらけるなや茂十よ。」

「莫迦ァこくなや、白ッけえ女ッ子が珍しくもなかんべえ……これさそねえに引張るなよ〳〵。」

「お泊りなされませ〳〵。」

「泊らねえとは云はねえだが、旅籠は何程だか其れ次第だァ。」

「安くば泊つてもよかンべえや、なァよ女ッ子、俺ァ連衆はこればつかぢや無えでごぜえますだ

「安くまけろや〳〵。」

「俺ァ連どもはよけいなものは要らねえだ、飯のウ八九杯に汁のウ七八杯も喰ふかな、外に何も喰はねえだかンな。」

「其の代りにやあハァ、明日が中食さァ此の柳行李に一杯詰て貰ふべえや、其の外には何にも要らねえだよ。」

などと、鼻ッ張や氣前をいふ江戸道者と違つて、田舍道者の道中擦れのしたのは、亦別段とすさまじい。

「ほゝゝゝ其れだら外にハァ何イ要りますかの……なァおひろどん。」

「ほんとだァにほゝゝゝまァおまえ樣方のこんだから何杯でも盛つけますべえさ。」

「だァからさ早くお着きなせえまし、道中は早く着くが定でごぜえますがよ。」

「さァ〳〵お荷物のウお出しなせえましよ。」

と無理からに荷物を引張る、袖を捉へる、だがどうして、笠をあみだに背中に卷いた絲經を歪めながら、田舍道者はなかなか手强い。

「えゝッ何にするだァ。」

「そねえに引張るなッちば。」
「旅籠賃は何程だか其れさ云へちば。」
とまだやつてゐる。
「御定宿は百五十文でごせえますが。」
「知つてるくせにさ、なァおよせどん。」
「毎年の御宿だァに、さァさァ。」
「何んだと、百五十文だと、ホヽウ圖無えこんだ。」
「ウーム高えぞ〳〵なァよみんな。」
「飯さァ一杯づつ減して七十五文にまけろや、そんならば泊つてもよかんべ。」
「よかんべ〳〵。」
「まからずば先さ行くべえや。」
「左樣すべえ〳〵。」
と袖を振拂ふやら、荷物の引張ッこをやつし〳〵とやつてゐる。
「あれさお待ちせえまし〳〵。」

「惡さァ云はずにさ。」
と女共も、ヌッと太い腕に力を入れてグイ〳〵と引戻しながら、
「まけろ〳〵ッても東海道は二百文、こちら方は百五十文が、定宿のきまりでこぜえすがよ。」
「そんな言べえ云はつしやらねえでお泊りなせえましッてば、其の代りには飯の盛つけは御本堂の屋根さァ見る樣につけますだ。」
「あはゝゝゝ善光寺樣の屋根えほど飯イ盛るだつて……そんでハァ七十五文だら泊るべえや。」
「あれさまだ其麼惡さ言はつしやるよ、定宿を半分にはまからねえでごぜえますよ、なァおひろどん、廿文もまけて置くべえかの。」
「左樣すべえよ、さァ〳〵お客樣廿文まけて置きますがよ。」
「こりやあハァえかくまけたもんだ、みんな廿文なら安いもんだぞ。」
「あれまた莫迦ァ言はつしやる、廿文だけまけるといふでごぜえます。」
「何のこつた、其れでは駄目なこんだ、先さァ行つて何軒でも懸合ぶつてみべえや。」
「其れがよかんべ。」
「オーイみんなよウ、先さァ行くだよウ。」

と、先立のが野良聲を張上げれば、捉まへられた袖や、引張れた脊中の小荷物をヤケにゆすり上げ、わや〳〵騒ぎながら、振拂つて行つちまつた。

「チョッ嫌ァな道者面だよウ。」

「あれで白ッけえ女ッ子がめづらしくなんかべえだとよ。」

「ふんとにさ、これでも善光寺町で松屋のおひろッ子と云つたらお江戸の講中さァの評判だァに」

「ほゝゝ飯の盛つけが頼母しいッてかね……評判と云やァのおひろどん、家のおたよさんの評判もえれへこつちやねえかの、旦那さんはまだ氣ィ着かねえからいゝだが、兵作さんとの情交ッたらなァ、そらこそ御本堂の星根へ程高え評判だァね。」

と饒舌ながら、

「ハイお泊り樣、松屋はこちらでごぜえます。」

と繰込む旅客を呼んでゐる。

「ふんとだね、およせどん其れにさ此頃は二人共ハァえかく心配ばかしてゐる樣だが、間違ひでもなければいゝだね……お早いお着き樣でございます、御定宿の松屋はこちらでございます。」

「まァさ人の戀より、こつちは聲を嗄して呼んでりやいゝだよ……ハイお泊りはこちらでございます、お早いお着き樣で……」

と呼び立てる、其の聲々は兩側の宿々から亦負ず劣らず、道者のざわめきと打混じて賑はして日はいつかトップリと暮れて、軒並のあんどんの灯が陽氣にかゞやく。

二

また一群繰込んでゆく道者の後から、物思ひに沈んだ態で、悄然と來る娘ッ子、其れが噂の松屋のおたよ、今月十九の危といふ色ッぽい盛りだけ、土地は信州信濃でも鳥渡憎からぬ容貌だが噂を裏書く面庇れ、消えてゆく樣な歩きつきだ。

と其の後方から、前後をキョロ〳〵と何か探ねる顔つきで、やつて來たのは他でもない、東海道は五十三次、其れからグルリと木曾路を巡つて、こゝに善光寺參りと來た、十返舍の米櫃、栃面屋の彌次郎兵衛といふおぢさんだ。

物思ひのおたよとキョロ〳〵してゐる彌次さん、トンと脊中を突當つて、

「オット危ねえ。」

とクルリと廻る、おたよはハッとして、

『これは、御免なさいませ。』
と眞赧になつて會釋をする。
『イヨーとんだ道行の花道と來た、こゝで彌次郎兵衛さん……と來て、山臺で好い聲を絞ると來りやァほんものだが、通りすがりぢやァさうはいかねえあはゝゝゝ時にお娘、こゝらで年齢廿五六の、さうさ、あんまりキリッとはしてゐねえが、旅の江戸ッ子を見かけなかッたかい。』
『はい、ッイ考へ事をして居りましたので心着きませんでございました。』
と言葉遣ひも、流石にこゝらでも町娘で、泥臭からずしとやかだ。
『イヤさうかい、成程考へ事のありさうな年齢だ、へッ他の男なんざァ目に入らねえてえ次第かねあはゝゝゝ。』
『えゝそんな……そんな事知りません。』
とおたよは恥かしさうに、其れでもッンと斯樣云つて、裾もほら〳〵と駈てゆく。
『これさお娘、袖摺合ふのも他生の縁だよ、何もそんなに逃ることァねえ、待なッてばよ、へッやるまいぞ〳〵か。』
と彌次さんいゝ氣な調子で巫山戯ながら後からゆけば、やがておたよは店口を入つてゆく、見送りながら立止つて、
『御定宿松屋九十郎……とフーム此家のお娘か。』
と眼を細くしてゐる左右から、宿引の女は手ぐすねひいて、
『お早いお着き樣でございます。』
『お出なさいませ。』
と一人が笠を取れば、一人が肩の振分の荷へ手をかける。
『オットットまだ泊るとも何とも云はねえぜ……だが何かい、今奥へ飛込んだ彼のお娘は家のかい。』
『さうでございます、どうぞお泊りを願ひます。』
『お風呂も宜しうございます。』
『ウフ障子も此頃張替て、彼のお娘のお酌と來りやァ惡くはねえ。』
と彌次さんが云へば、女共は口惜い身振りで、
『お酌は私等では氣に入りましねえかね。』
『はい、私等も隨分評判な女でございますが。』

と來た、彌次さん額を叩いて、

「いかさまこいつァ悪かつた、成程おぬし等も女には違えねえあはゝゝゝゝ。」

と云へば、

「御挨拶でごぜえますだね、なァおひろどん。」

「ふんとだァね、私等ァ彼様な虫のあるのぢやごぜえませんだに。」

と、女共うか〳〵云つちまふ。

「何だ蟲がある、あのお娘にか……疳の虫か癪の虫か、まさか屁放蟲ぢやァあるめえあはゝゝゝ。」

「おほゝゝゝ。」

「へッ癪の蟲と來たな、癪に嬉しき男の力と……ふーむさてはお娘に男があるのか、なァる程先刻の態度が其れに違えねえ。」

「オヤ知つてるでごぜえますか。」

「一目見りやァわかるのが俺の稼業さ、然しさう聞くと聊か忌々しい。」

「だからさ、女子なら私等の様なのがお徳用でごぜえますだ。」

「お酌でも飯の盛つけでも道中一でごぜえます、さァ〳〵お泊りなせえまし。」

「お泊りなすつてお試しなさいかあはゝゝゝゝ、オツトさうだお娘にばかり見當をつけちゃつて紛れた伴を忘れちやッたい、泊るのもいゝが伴をまごつかせちやァ不可ねえ。」

「それなら笠をハァ目印にかけて置いて、私等が氣ィ着けてゐるでごぜえます。」

「おめえ様のお伴ならスツキリしたお江戸の衆でごぜえませう。」

と云ひながら笠を取つて講中札の端にかけて、

「どうぞお昇りなせえまし……お客様だよウ。」

と一人が呼べば。

「へッ兎角容姿がいゝと無理やりに泊られるやつさ、ヤレどつこいしよ。」

と彌次さん上り際へ腰をかけて、草鞋の紐を繙さながら、足洗を持つて來たもう一人の女に、

「其れで何かい、あのお娘は餘程蟲が食ひ込んでゐるのかい。」

とまだ根よく訊いてゐる。

「ほゝゝ氣にしなさるだね、食ひ込んでゐるの段ぢやァごぜえませんのさ。」

「癪に障るぜチョッ。」

と彌次さん舌打をしたが、また思ひついた様に、

『えゝオイ姐や、泊る代りになあのお娘を沁々見せて貰えてえもんだね。』
『あれさ詰らねえではございませんかの、他人の花でごぜえますだに。』
『他人の花でも眼の保養といふほどでもねえが、何れ其のお娘のレコもゐるンだらうから、其の濡事の樣子を一幕覗きてえといふ道樂さ。』
『止しなせえましよ莫迦氣なこんでごぜえますだ、江戸の衆ッたら直き惡さアするだかンね。』
『ウンニャ人の戀路の邪魔なんざアしねえッて事よ、唯何も道中のお慰みだ、善光寺如來は御緣日のからくりを覗くてえやつだ、アいゝヤレ膝でチョックラ突いて眼で知らせエカタンてえ所をねあはゝゝゝゝ。』
『ほゝゝゝ面白氣なお客樣だユウ。』
『ふんとに江戸の衆は氣イさくいだからねほゝゝゝ。』
『止せやい、おだてゝ胡麻化すな、何でもいゝから覗かせなつて事よ。』

十返舍一九　東海道膝栗毛

三

茲に上州星の兵作といふ絹商人、この信濃路から越後へさして雪解の春を巡る其の定宿、松屋の娘の給仕ッ振りに、氣前を見せた商賣ものがものを云つて、双方ほつかりとした心持になつたのが、恰度去年の今頃で、其の時おたよは十八、兵作が廿四といふのだから、其の順で今年は十九に廿五と來た互ひの危年、噫！　爭はれず、思ひ焦がれて樂しみきつて此の春逢つた二人の胸は、觸れゝばヂリ、と燒つきもしよう、イヤもうお話を通り越した燃上り樣だつた。

兵作いつもなら、此の土地の得意先を一巡したら、急いで越後路へ入るべきだが、此の土地の得意廻りさへおち〳〵とはしてゐられず、たゞもうおたよと凝固まつちまつて、『明日はお立ちかお名殘惜しい雨の十日も降ればよい』なんといふ、其麼文句の必要を認めないほどめちや〳〵になつた末は、御約束の通り、添はれなければ死ぬといふドン詰りになつた。

其れに心中物のお誂へに依つて、共に總領の一人娘に一人息子と來てゐるのだから、親に知れれば忽ちポンと生木を割かれる、現今ならば何うしたつて猫イラズものだ。

まだ宵の口ながらしめりかへつてゐる此の部室は、暗燈の丁子がたまつて薄ッ暗いが、搔き立て樣でもなく、空ッぽらしい荷行季にもたれて疑つと腕を組んだ兵作に、體をそむける樣にして艶ッぽく憂ひをふくむで横座りに寄つかゝつたのはおたよだ。

これをお芝居好みの淨瑠璃か何かでゆくと――「さわぎゆく、嚇もとめる旅雀、ぞめく道者の三

度笠、傾く陽あしいつしかに、暮て命の宵闇を、たどる戀路の突當り、如來のかげもありやなし——」てな所だ。

『なァ兵さん。』

『うーむおたよ。』

と、見合はせる顏と顏と來た。

元來おたよは丸ボチやで、信濃名所は更科の月といふやつだッたが、其れがその十六夜から缺け初めて、近頃すつかり細つちまつた。

『痩たえなァおたよ。』

と兵作はホット溜息をして、おたよの手をとつて膝に奇せ、己が空いた方の手を其の上から重ねたものだ。

『兵さんおまへも、えらく目が窪みましたなァ。』

と斯樣云つて、今更しけ〴〵兵作の顏を視るおたよの眼には、次第々々に露が潤んで來た。

『なァおたよ、俺等が家の定宿で親父どの、代からの久しい馴染だッけが、這麼ことにならうとは去年の今頃までは思はなかつたッけの。』

『ほんにな。』

とおたよは頷きながら云つて、其の潤んだ露の玉をほろ〴〵と落し、

『兵さんおまえは、去年の今頃までは思はぬ事かも知れないが、私やおまえが父樣と一緒に初めて來なさつた、忘れもしないおまえは彼の時元服前、よい息子さんぢやと思ふたのが、いとしうなつた初め……』

と、憂ひの中にも過古の想出に、思ひ染たそも〴〵などを抽き出して來ると、今泣いた顏がだらしなくほどけもする、尤も這麼言は、今めづらしくいふのではなく、逢つてゐさへすれば、何かにつけて繰返されるのだからやりきれない。

斯樣した模樣を、長旅のつれ〴〵お慰みの物好きに彌次さん廊下に屁放腰をして、障子を濡して指の穴、